門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区

一般国道１号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

本報告書の対象となっている寝屋川市・交野市・枚方市域に存在する交野台地および枚方丘陵は、各時代の指標となる資料を伴う旧知の遺跡が点在することで知られています。それらの遺跡では旧石器ないし縄文時代というきわめて古い時代の遺物が出土する傾向がみられ、この地域が農耕社会の成立以前に良好な狩場にめぐまれた、生活条件の整った場所であったことをうかがわせます。時期がくだって古代には、秦氏を代表とする渡来系氏族が移り住み、漢字や朝鮮半島系の文物・生活様式など、当時としては最先端の技術が多くもちこまれたことでも知られます。

特に平野に面した高宮遺跡では古墳時代の朝鮮半島の土器を含んだ竪穴住居群の検出があります。また、高宮・大尾・太秦の各遺跡では、弥生時代から鎌倉時代までの墳墓も密集して築かれており、長年にわたる人々の活動が読みとれます。

もう一方の調査対象範囲である寝屋川市から門真市にかけての平野部は、縄文時代にあった海が水面の低下で陸化し、非常に平坦な地形が形成されました。これらの地域では水が豊富なため、稲作技術が取り入れられた当初から活発に農業開発が進められました。今回の調査では従来、湿地帯で可耕地と考えられなかった地域まで、かなり大規模に弥生時代の水田が拡がる可能性が出てきました。そして、それ以降の奈良・鎌倉時代の活発な生産活動の一端をもうかがい知ることができます。

山地から低湿地に至る異なる立地のもとで北河内を横断する発掘調査を行うことは、自然環境が社会形成にどのような影響を与え、それが自然にいかにフィードバックしたかを考えるためにも重要です。確認調査の性格上、面的調査に比して個々の調査成果は小さいものですが、それらの成果を集約することによって、社会と自然との関わりの一端をより広い視点でとらえることが可能になると考えます。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。

2003年2月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内の内、寝屋川市・四条畷市・交野市・枚方市域の遺跡群の確認調査の報告書である。

2．調査は、門真市東部および寝屋川市域については国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所単独、門真市中部および交野市・枚方市域については国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所・日本道路公団関西支社枚方工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人　大阪府文化財センター（平成14年３月31日まで財団法人　大阪府文化財調査研究センター）が実施した。

3．調査は、平成13・14年度に財団法人　大阪府文化財センター中部調査事務所調査第一係が実施した。現地調査および担当者は以下のとおりである。

平成13年度

門真市域（門真西地区他（確認）　門真西地区）

門真市北巣本町地先他	平成13年11月20日～平成14年３月25日		
（門真市横地地先）	中部調査事務所調査第一係	主任技師	井藤　暁子
	同	専門調査員	松尾　洋次郎

門真市域（門真西地区他（確認その２）　門真西地区）

門真市三ツ島地先	平成14年２月15日～平成14年３月25日		
（門真市北島地先）	中部調査事務所調査第一係	技師	田中　龍男
	同	専門調査員	河村　恵理

門真市域（門真西地区他（確認）　讃良郡条里遺跡西地区）

門真市北巣本町地先他	平成13年11月20日～平成14年３月25日		
	中部調査事務所調査第一係	主任技師	井藤　暁子
	同	専門調査員	松尾　洋次郎

寝屋川市域（讃良郡条里遺跡（確認その２）　讃良郡条里遺跡）

寝屋川市高宮地内他	平成13年６月19日～平成13年11月30日		
	中部調査事務所調査第一係	技師	合田　幸美
	同	同	本田　奈都子
	同	専門調査員	清水　哲

寝屋川市域（讃良郡条里遺跡（確認その３）　讃良郡条里遺跡）

寝屋川市新家二丁目他	平成13年11月17日～平成14年３月25日		
	中部調査事務所調査第一係	技師	黒須　亜希子
	同	専門調査員	清水　哲

寝屋川市域（大尾・太秦遺跡（確認）　大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群）

寝屋川市国守町	平成14年３月19日～平成14年６月30日		
	中部調査事務所調査第一係	技師	伊藤　武
	同	専門調査員	植村　悟

寝屋川市域（寝屋南遺跡他（確認）　打上遺跡）

寝屋川市寝屋地内他	平成13年６月19日～平成13年10月31日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	服部　美都里
	同	同	黒須　亜希子

寝屋川市域（寝屋南遺跡他（確認）　寝屋南遺跡）

寝屋川市寝屋地内	平成13年６月19日～平成13年10月31日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	服部　美都里
	同	同	黒須　亜希子

寝屋川市域（寝屋東遺跡（確認）　寝屋東遺跡）

寝屋川市寝屋地内	平成13年11月16日～平成14年２月28日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	服部　美都里

寝屋川市域（寝屋東遺跡（確認その２）　寝屋東遺跡）

寝屋川市寝屋地内	平成14年２月15日～平成14年３月25日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	伊藤　武
	同	専門調査員	植村　悟

交野市域（私部南遺跡他（確認）　私部南遺跡）

交野市私部南一丁目地先他	平成13年９月５日～平成14年３月15日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	河端　智
	同	専門調査員	阿河　大介

交野市域（私部南遺跡他（確認）　東倉治遺跡）

交野市私部南一丁目地先他	平成13年９月５日～平成14年３月15日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	河端　智
	同	専門調査員	阿河　大介

枚方市域（津田城遺跡東地区（確認）　津田城遺跡）

枚方市津田東町三丁目地先他	平成13年８月10日～平成13年12月25日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	田中　龍男
	同	専門調査員	河村　恵理

平成14年度

門真市域（門真西地区他（確認その３）　門真西地区）

門真市北島地先	平成14年10月１日～平成14年11月29日		
	中部調査事務所調査第一係	技　師	伊藤　武
	同	専門調査員	植村　悟

４．調査の実施にあたっては関係諸機関をはじめ、以下の方々から多大なご教示ならびに資料提供などを得た。記して感謝の意を表する。

宇治原靖泰〔門真市教育委員会〕、塩山則之・浜田延充〔寝屋川市教育委員会〕、野島　稔・村上始（四条畷市教育委員会）、泉野和夫・真鍋成史・小川暢子（交野市教育委員会・財団法人　交野市文化事業団）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、櫻井敬夫・宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀（財団法人　枚方市文化財研究調査会）、泉　拓良（奈良大学）、池田　研（財団法人　大阪市文化財協

会)、地村邦夫（大阪府立弥生文化博物館）小島博子、佐野　円、文谷由紀江、村岡浩康、青山由美子、田口麻子、伊達佳代、大矢祐司、岩下明正、浜田保子

5．本書で用いた現場写真は各調査担当者が撮影し、遺物の撮影は担当者以外に主査片山彰一が担当した。

6．本書の執筆は文責を文末に記した。また各地域における歴史環境は井藤が、自然遺物の一部を主査山口誠治が、分析関係は各委託者が、そして調査成果の一部を地村邦夫が担当した。編集は一瀬和夫・田中龍男・清水　哲・奥村弥恵が共同で担当した。

7．現在確認調査で収集・作成した資料は、すべて当センターで保管している。

凡　　例

1．本書に掲載した地形図・遺構実測図、その他の図に付された方位は、全て座標北を示している。

2．当センターが調査および本書で使用している座標は、国土座標第Ⅵ系を基準に設置したものである。また、レベル高は東京湾標準水位のT.P.+の数値を使用した。

3．本書で使用した土色の記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖第15版』1995年版を使用した。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と調査方法……1
第２章　調査成果……5
　第１節　門真西地区（その１・２・３）……5
　第２節　讃良郡条里遺跡（その２・３）……33
　第３節　大尾・太秦遺跡……81
　第４節　打上・寝屋南遺跡……105
　第５節　寝屋東遺跡（その１・２）……131
　第６節　私部南遺跡……169
　第７節　東倉治遺跡……199
　第８節　津田城遺跡東地区……203
第３章　分析・検討……227
　第１節　門真市の現地形に至る堆積過程とその成因－門真西地区及び既存調査の堆積層から－……227
　第２節　門真遺跡群　花粉・珪藻・火山灰の土壌分析、年代測定分析……233
　第３節　門真遺跡群　貝類他自然遺物同定土壌分析……251
　第４節　門真西地区の自然遺物について……259
　第５節　讃良郡条里遺跡　自然化学分析……263
　第６節　北河内における沖積堆積の概観（２）……289

挿図索引

第１図　調査遺跡分布図（西部）……1
第２図　調査遺跡分布図（東部）……2
第３図　門真西地区（その１）　１・２調査区位置図……6
第４図　門真西地区（その１）　３・４調査区位置図……8
第５図　門真西地区（その１）　１調査区平面図および断面図……10
第６図　門真西地区（その１）　２調査区平面図および断面図……11
第７図　門真西地区（その１）　３調査区平面図および断面図……12
第８図　門真西地区（その１）　４調査区平面図および断面図……13
第９図　門真西地区（その１）　１調査区出土遺物……14
第10図　門真西地区（その１）　２調査区出土遺物……14
第11図　門真西地区（その１・２）　土層断面柱状図……15
第12図　門真西地区（その２）　調査地位置図……17
第13図　門真西地区（その２）　周辺の主要遺跡分布及び既往の調査地位置図……19
第14図　門真西地区（その２）　北・東側土層断面図……23・24
第15図　門真西地区（その３）　調査地位置図……25

第16図　門真西地区（その３）　平・断面図……26
第17図　門真西地区（その３）　出土遺物実測図……27
第18図　三ツ島西遺跡　トレンチ位置およびトレンチ平面・断面模式図……29
第19図　三ツ島西遺跡　土層断面柱状図……30
第20図　三ツ島西遺跡　第１トレンチ出土遺物……31
第21図　三ツ島西遺跡　第１・２トレンチ断面図……31
第22図　讃良郡条里遺跡（その２・３）　調査地周辺の遺跡位置図……34
第23図　讃良郡条里遺跡（その２・３）　周辺遺跡の出土遺物……34
第24図　讃良郡条里遺跡（その２・３）　トレンチ位置図……35
第25図　讃良郡条里遺跡（その２）　基本層序模式図……42
第26図　讃良郡条里遺跡（その２）　①調査区断面図……43
第27図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区断面図……43
第28図　讃良郡条里遺跡（その２）　③調査区断面図……44
第29図　讃良郡条里遺跡（その２）　①調査区　第２面（Ⅱ層上面）……44
第30図　讃良郡条里遺跡（その２）　①調査区　第12面（Ⅻ層上面）……44
第31図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第２面（Ⅲ層上面）……45
第32図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第８面（Ⅹ層上面）……45
第33図　讃良郡条里遺跡（その２）　溝状落ち込み断面図……45
第34図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第９面（Ⅺ層上面）……45
第35図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第10面（Ⅻ層上面）……45
第36図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第11面（ⅩⅢ層上面）……45
第37図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第12面（ⅩⅣ層上面）……45
第38図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区　第13面（ⅩⅥ層上面）……45
第39図　讃良郡条里遺跡（その２）　③調査区　第５面（Ⅴ層上面）……46
第40図　讃良郡条里遺跡（その２）　③調査区　第６面（Ⅵ層上面）……46
第41図　讃良郡条里遺跡（その２）　③調査区　Ⅻ層相当層出土木製品……46
第42図　讃良郡条里遺跡（その２）　Ⅵ～Ⅸ層出土遺物……47
第43図　讃良郡条里遺跡（その２）　Ⅹ～ⅩⅦ層上層出土遺物……48
第44図　讃良郡条里遺跡（その３）　基本層序模式図……52
第45図　讃良郡条里遺跡（その３）　第①トレンチ断面図……53
第46図　讃良郡条里遺跡（その３）　第①トレンチ平面図……54
第47図　讃良郡条里遺跡（その３）　第①トレンチ出土遺物実測図……54
第48図　讃良郡条里遺跡（その３）　第②トレンチ断面図……55
第49図　讃良郡条里遺跡（その３）　第②トレンチ平面図……56
第50図　讃良郡条里遺跡（その３）　第②トレンチ遺物実測図……56
第51図　讃良郡条里遺跡（その３）　民俗例に見る足漕ぎ水車の一例……57
第52図　讃良郡条里遺跡（その３）　木組遺構部材実測図……58
第53図　讃良郡条里遺跡（その３）　第③トレンチ断面図……59

第54図　讃良郡条里遺跡（その３）　第③トレンチ平面図……60
第55図　讃良郡条里遺跡（その３）　第③トレンチ出土遺物実測図……61
第56図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ断面図……63
第57図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ出土遺物実測図……63
第58図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ平面図（１）……65
第59図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ　第11－２面出土遺物実測図……66
第60図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ平面図（２）……67
第61図　讃良郡条里遺跡（その３）　第⑤トレンチ断面図……69
第62図　讃良郡条里遺跡（その３）　第⑤トレンチ平面図……70
第63図　讃良郡条里遺跡（その３）　第⑤トレンチ出土遺物実測図……72
第64図　讃良郡条里遺跡（その３）　第⑤トレンチ　第５－３層出土遺物実測図……73
第65図　大尾・太秦遺跡　調査地位置図……81
第66図　大尾・太秦遺跡　調査区配置図……82
第67図　大尾・太秦遺跡　３トレンチ周溝９出土土師器……83
第68図　大尾・太秦遺跡　１～４トレンチ平面図……84
第69図　大尾・太秦遺跡　１～４トレンチ断面及び周溝断面図……85
第70図　大尾・太秦遺跡　５～８、12、17、18トレンチ平・断面図……92
第71図　大尾・太秦遺跡　９～11、21トレンチ平・断面図……93・94
第72図　大尾・太秦遺跡　16、20、22トレンチ平・断面図……95
第73図　大尾・太秦遺跡　13～15、19トレンチ平・断面図……98
第74図　大尾・太秦遺跡　２、７～９、16、22トレンチ出土遺物……99
第75図　大尾・太秦遺跡　20トレンチ出土遺物……100
第76図　大尾・太秦遺跡　11トレンチ出土遺物……101
第77図　大尾・太秦遺跡　調査及び旧地形図から復原できる尾根と谷……102
第78図　打上・寝屋南遺跡　調査位置と周辺の遺跡……106
第79図　打上・寝屋南遺跡　トレンチ設置位置図……107
第80図　打上・寝屋南遺跡　基本層序模式図……109
第81図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第２トレンチ平面・断面図、出土遺物実測図……111
第82図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第３トレンチ平面・断面図……112・113
第83図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第３トレンチ出土遺物実測図……115
第84図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第４トレンチ平面・断面図……118・119
第85図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第４トレンチ出土遺物実測図……120
第86図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第５トレンチ平面・断面図……120
第87図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第１トレンチ平面・断面図、出土遺物実測図……122・123
第88図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第２トレンチ平面・断面図……124・125
第89図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第２トレンチ出土遺物実測図……126
第90図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第３トレンチ平面・断面図……128
第91図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第４トレンチ平面・断面図……129

第92図　寝屋東遺跡（その１・２）　周辺遺跡分布図 ……131
第93図　寝屋東遺跡（その１）　調査位置図 ……132
第94図　寝屋東遺跡（その１）　基本層序柱状図（北西断面）……133
第95図　寝屋東遺跡（その１）　検出遺構全体図 ……134
第96図　寝屋東遺跡（その１）　１Ａ、１Ｂトレンチ　平・断面図及び出土遺物 ……137
第97図　寝屋東遺跡（その１）　２トレンチ　平・断面図 ……138
第98図　寝屋東遺跡（その１）　３Ａトレンチ第１遺構面　平・断面図及び出土遺物 ……139
第99図　寝屋東遺跡（その１）　３Ａトレンチ第２遺構面、３Ｂトレンチ　平・断面図及び出土遺物 ……140
第100図　寝屋東遺跡（その１）　３Ｃ～３Ｅトレンチ　平・断面図及び出土遺物……141
第101図　寝屋東遺跡（その１）　４Ａ、４Ｂトレンチ　平・断面図……142
第102図　寝屋東遺跡（その１）　４Ｃ、４Ｄトレンチ　平・断面図……143
第103図　寝屋東遺跡（その１）　５Ａ、５Ｂトレンチ　平・断面図……144
第104図　寝屋東遺跡（その１）　５Ｃ～５Ｅトレンチ　平・断面図……145
第105図　寝屋東遺跡（その１）　６Ａ～６Ｃトレンチ　平・断面図……146
第106図　寝屋東遺跡（その１）　７Ａ、７Ｂ、８トレンチ　断面図及び出土遺物……147
第107図　寝屋東遺跡（その１）　９トレンチ　平・断面図及び出土遺物……148
第108図　寝屋東遺跡（その１）　10、11トレンチ　断面図……149
第109図　寝屋東遺跡（その２）　トレンチ配置図……152
第110図　寝屋東遺跡（その２）　１Ａ～１Ｃ、３Ａトレンチ平・断面図……158
第111図　寝屋東遺跡（その２）　２、３Ｂ・３Ｃトレンチ平・断面図……159
第112図　寝屋東遺跡（その２）　３Ｄ、４Ａ～４Ｄ、７トレンチ平・断面図……160
第113図　寝屋東遺跡（その２）　５トレンチ平・断面図……161
第114図　寝屋東遺跡（その２）　４Ｅ、６、８トレンチ平・断面図……162
第115図　寝屋東遺跡（その２）　１Ａ、２、３Ａ、５、６トレンチ検出遺構　平・断面図……163
第116図　寝屋東遺跡（その２）　各トレンチ出土遺物……164
第117図　寝屋東遺跡（その２）　検出遺構全体図……165
第118図　寝屋東遺跡（その２）　検出遺構変遷図……166
第119図　私部南遺跡　調査区位置図……169
第120図　私部南遺跡　トレンチ位置図……170
第121図　私部南遺跡　14～16トレンチ断面図 ……173・174
第122図　私部南遺跡　１～３トレンチ断面図 ……175・176
第123図　私部南遺跡　４・５トレンチ断面図・平面図 ……177・178
第124図　私部南遺跡　22トレンチ断面図・平面図……180
第125図　私部南遺跡　18トレンチ断面図・平面図……182
第126図　私部南遺跡　20トレンチ断面図・平面図……183
第127図　私部南遺跡　21・17トレンチ断面図・17トレンチ平面図……184
第128図　私部南遺跡　19・６トレンチ断面図・19トレンチ平面図……186

第129図　私部南遺跡　8・9トレンチ断面図・平面図 ……187・188
第130図　私部南遺跡　10・11トレンチ断面図・平面図……189
第131図　私部南遺跡　12トレンチ断面図・平面図 ……191・192
第132図　私部南遺跡　13トレンチ断面図・平面図 ……193・194
第133図　私部南遺跡　模式断面図 ……195・196
第134図　私部南遺跡　出土遺物……197
第135図　東倉治遺跡　調査区位置図……199
第136図　東倉治遺跡　トレンチ位置図……200
第137図　東倉治遺跡　1～4トレンチ断面図……201
第138図　津田城遺跡東地区　周辺の主要遺跡分布図……204
第139図　津田城遺跡東地区　トレンチ配置図 ……211・212
第140図　津田城遺跡東地区　旧河道・旧谷地形想定復元図 ……213・214
第141図　津田城遺跡東地区　No.1－1～3、2、3－1・2トレンチ断面図……215・216
第142図　津田城遺跡東地区　No.4－1・2、5、6トレンチ断面図……217・218
第143図　津田城遺跡東地区　No.7－1・2、8、9、10－1・2、11－1・2トレンチ断面図
……219・220
第144図　津田城遺跡東地区　No.12～16トレンチ断面図……221・222
第145図　津田城遺跡東地区　No.17、18－1・2、19－2トレンチ断面図……223・224
第146図　津田城遺跡東地区　No.19－1、20トレンチ断面図……225・226
第147図　門真遺跡群　門真西地区の主要花粉化石分布図……235
第148図　門真遺跡群　門真西地区における珪藻化石分布図……238
第149図　門真遺跡群　堆積物の特徴と鉱物組成……243
第150図　門真遺跡群　火山ガラスの屈折率とそのタイプ……244
第151図　讃良郡条里遺跡　2－④調査区断面図　土壌試料採取地点……264
第152図　讃良郡条里遺跡　2－⑥調査区断面図　土壌試料採取地点……264
第153図　讃良郡条里遺跡　2－④調査区の花粉化石分布図……267
第154図　讃良郡条里遺跡　2－⑥調査区の花粉化石分布図……268
第155図　讃良郡条里遺跡　1－⑧調査区の花粉化石分布図……269
第156図　讃良郡条里遺跡　2－②・③、1－⑧調査区の花粉化石分布図……270
第157図　讃良郡条里遺跡　主な堆積物中の珪藻化石分布図……275
第158図　讃良郡条里遺跡　堆積物中の鉱物組成……281
第159図　讃良郡条里遺跡　火山ガラス屈折率……282
第160図　河内湾周囲の縄文時代晩期・弥生時代前期の遺跡分布図……289
第161図　寝屋川市～門真市における調査区柱状断面図 ……291・292
第162図　讃良郡条里遺跡（その1～3）　縦断方向地盤想定図他 ……293～296
第163図　門真西地区および既往調査からの地層・地質縦断 ……297～300
第164図　河内平野北部の地形と遺跡分布 ……301・302
第165図　北河内主要古墳分布図……307

表　索　引

第1表　門真西地区（その1）　遺物観察表……9
第2表　門真西地区（その2）　層位別貝化石分類表及びその比率……22
第3表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（1）……76
第4表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（2）……77
第5表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（3）……78
第6表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（4）……79
第7表　讃良郡条里遺跡（その2・3）　トレンチ単点一覧……79
第8表　門真遺跡群　門真西地区出土の貝類とその構成……230
第9表　門真遺跡群　門真西地区（その1）　3・4調査区各層の二枚貝綱出土個体数……231
第10表　門真遺跡群　門真西地区（その1）　3・4調査区各層の巻貝綱出土個体数……231
第11表　門真遺跡群　産出花粉一覧……234
第12表　門真遺跡群　珪藻化石産出……238
第13表　門真遺跡群　堆積物の鉱物分析結果一覧……242
第14表　門真遺跡群　火山ガラスの屈折率測定結果……244
第15表　門真遺跡群　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果……246
第16表　門真西地区（その3）　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果……249
第17表　門真遺跡群　種実同定結果……254
第18表　門真遺跡群　検出貝類の分類……254
第19表　門真遺跡群　貝類同定結果……255
第20表　門真遺跡群　植物遺体の同定結果……260
第21表　門真遺跡群　木製遺物の樹種同定結果……260
第22表　門真遺跡群　動物遺体の同定結果……260
第23表　讃良郡条里遺跡　産出花粉化石一覧……266
第24表　讃良郡条里遺跡　2－②・③、1－⑧調査区の産出花粉化石一覧……270
第25表　讃良郡条里遺跡　土壌試料と堆積物の特徴……274
第26表　讃良郡条里遺跡　堆積物中の珪藻化石産出（1）……276
第27表　讃良郡条里遺跡　堆積物中の珪藻化石産出（2）……277
第28表　讃良郡条里遺跡　讃良郡条里遺跡における堆積物分析結果一覧……281
第29表　河内平野北半部　弥生・古墳・中世面高表……303

本　文　写　真

写真1　門真遺跡群　門真西地区の花粉化石……236
写真2　門真遺跡群　珪藻化石顕微鏡写真……239
写真3　門真遺跡群　門真西地区堆積物中鉱物類の顕微鏡写真……245

写真４　門真遺跡群　年代測定試料（タブノキ　Machilus thunbergii　Sieb. et Zucc.　クスノキ科）
……247
写真５　門真遺跡群　年代測定試料（フネガイ科）……248
写真６　門真遺跡群　種実遺体 ……256
写真７　門真遺跡群　貝類 ……257
写真８　讃良郡条里遺跡　産出花粉化石の顕微鏡写真 ……271
写真９　讃良郡条里遺跡　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真 ……278
写真10　讃良郡条里遺跡　１－⑤調査区　28層に含まれるテフラの顕微鏡写真 ……283
写真11　讃良郡条里遺跡　１－⑧調査区　28層に含まれるテフラの顕微鏡写真 ……284
写真12　讃良郡条里遺跡　出土木材樹種 ……286

写真図版目次

写真図版１　門真西地区（その１）１
写真１．１調査区　１層～２－ａ層　断面
写真２．１調査区　３－ｂ層～３－ｄ層　断面
写真３．２調査区　９－ｂ層～10層　断面
写真４．３調査区　３－ｃ層～３－ｄ層　断面
写真図版２　門真西地区（その１）２
写真１．３調査区　第９面　タブノキ検出状況
写真２．３調査区　４－ｄ層～５層　断面
写真３．４調査区　第２面　流路２検出状況（南から）
写真４．４調査区　第７面　マガキ検出状況
写真図版３　門真西地区（その１）３
写真１．１調査区　第３面　落込み検出状況（東から）
写真２．２調査区　１－ａ層～３層
写真３．２調査区　２－ａ層下層　平面検出状況（西から）
写真４．２調査区　３層～８－ａ層　断面
写真図版４　門真西地区（その１）４
写真１．２調査区　第６面　平面検出状況（西から）
写真２．２調査区　９－ｂ層　平面検出状況（西から）
写真３．３調査区　第５面　上面検出状況（北から）
写真４．３調査区　第７面　平面検出状況（北から）
写真図版５　門真西地区（その１）５　１・２調査区出土遺物
写真図版６　門真西地区（その１）６
写真１．３・４調査区出土の腹足綱
写真２．３・４調査区出土の魚類・甲殻類

写真図版７　門真西地区（その１）７　３・４調査区出土の二枚貝

写真図版８　門真西地区（その２）１

写真１．調査地全景（南西から）

写真２．調査地より北側をのぞむ

写真３．第１面検出落ち込み遺構断面（南から）

写真４．第１面　落ち込み全景（東から）

写真図版９　門真西地区（その２）２

写真１．第３面　自然堤防の堤状の高まり「畦畔？」（南から）

写真２．第３面　自然堤防東壁断面（西から）

写真３．第５面（砂層）

写真４．第27層巣穴（西から）

写真図版10　門真西地区（その２）３

写真１．東側断面（第１層～第20－２層）

写真２．東側断面（第20－２層～第26－２層）

写真３．東側断面（第26－２層～第29層）

写真４．北側断面（第１層～第20－２層）

写真５．北側断面（第20－２層～第26－２層）

写真６．北側断面（第26－２層～第29層）

写真図版11　門真西地区（その２）４　貝化石及びカニ類

写真図版12　門真西地区（その３）１

写真１．南壁土層堆積状況

写真２．東壁土層堆積状況

写真３．５層上面全景（北から）

写真４．７層上面全景（北から）

写真図版13　門真西地区（その３）２　１～３・８・９層出土遺物

写真図版14　讃良郡条里遺跡（その２）１

写真１．①調査区　第12面（Ⅻ層上面）　東から

写真２．②調査区　第８面（Ⅹ層上面）　南から

写真３．②調査区　第９面（Ⅺ層上面）　西から

写真４．②調査区　第10面（Ⅻ層上面）　南西から

写真図版15　讃良郡条里遺跡（その２）２

写真１．③調査区　第５面（Ⅴ層上面）　東から

写真２．③調査区　第６面（Ⅵ層上面）　西から

写真３．第Ⅻ層中出土　板状木製品

写真４．③調査区　第ⅩⅩⅢ層断面（巣穴）　南から

写真図版16　讃良郡条里遺跡（その２）３

写真１．②調査区　南北断面（Ⅹ～ⅩⅥ層）　北から

写真２．②調査区　東西断面（Ⅹ～ⅩⅥ層）　北から

写真３．②調査区　第10面検出大畦畔盛土断面（数字は面番号）　北東から
写真４．③調査区　第５・６面検出畦畔断面（上からⅠ～Ⅶ層）　南から
写真図版17　讃良郡条里遺跡（その２）４　Ⅵ～Ⅸ層出土遺物
写真図版18　讃良郡条里遺跡（その２）５　Ⅹ～ⅩⅦ層出土遺物
写真図版19　讃良郡条里遺跡（その３）６
写真１．第①トレンチ　第７面　畦畔・足跡検出状況
写真２．第①トレンチ　第16面　畦畔・足跡検出状況
写真３．第②トレンチ　第１－２面　木組・畦検出状況
写真４．第②トレンチ　第22面　流路検出状況
写真図版20　讃良郡条里遺跡（その３）７
写真１．第③トレンチ　第10面　土坑１完掘状況
写真２．第③トレンチ　第12面　畦畔・足跡検出状況
写真３．第④トレンチ　第２面　畦畔・足跡検出状況
写真４．第④トレンチ　第11－２面　供献土器出土状況
写真図版21　讃良郡条里遺跡（その３）８
写真１．第④トレンチ　第11－４面　遺構検出状況
写真２．第⑤トレンチ　第５－３面　遺物出土状況
写真３．第⑤トレンチ　第５－３面　甕・高坏出土状況
写真４．第⑤トレンチ　第５－３面　甕出土状況
写真図版22　讃良郡条里遺跡（その３）９　第１・第２トレンチ出土遺物
写真図版23　讃良郡条里遺跡（その３）10　第２・第３トレンチ出土遺物
写真図版24　讃良郡条里遺跡（その３）11　第３・第４トレンチ出土遺物
写真図版25　讃良郡条里遺跡（その３）12　第４トレンチ出土遺物
写真図版26　讃良郡条里遺跡（その３）13　第３トレンチ出土遺物
写真図版27　大尾・太秦遺跡１
写真１．大尾・太秦遺跡遠景（北から）
写真２．大尾・太秦遺跡遠景（南から）
写真図版28　大尾・太秦遺跡２
写真１．１トレンチ全景（南西から）
写真２．２トレンチ全景（北西から）
写真３．３トレンチ全景（南東から）
写真４．４トレンチ全景（東から）
写真図版29　大尾・太秦遺跡３
写真１．２トレンチ周溝２断面
写真２．１トレンチ周溝６断面
写真３．４トレンチ周溝10断面
写真４．３トレンチ周溝９土器出土状況
写真図版30　大尾・太秦遺跡４

写真１．６トレンチ全景（東から）
写真２．７トレンチ全景（北西から）
写真３．８トレンチ全景（南東から）
写真４．９トレンチ全景（北西から）
写真図版31　大尾・太秦遺跡５
写真１．５トレンチ全景（南から）
写真２．６トレンチ東半谷埋め立て状況
写真３．７トレンチ検出土坑１断面
写真４．７トレンチ検出焼土土坑
写真図版32　大尾・太秦遺跡６
写真１．９トレンチ東端遺構検出状況（北西から）
写真２．９トレンチ検出竪穴住居址１・２
写真３．９トレンチ検出溝１
写真４．９トレンチ溝１土器出土状況
写真図版33　大尾・太秦遺跡７
写真１．10トレンチ全景（西から）
写真２．10トレンチ西端遺構検出状況（東から）
写真３．10トレンチ東半遺構検出状況（西から）
写真４．11トレンチ全景（南西から）
写真図版34　大尾・太秦遺跡８
写真１．10トレンチ北壁検出ピット断面
写真２．11トレンチ南壁検出溝３断面
写真３．11トレンチ検出谷および溝２（手前）
写真４．12トレンチ全景（北から）
写真図版35　大尾・太秦遺跡９
写真１．16トレンチ全景（北西から）
写真２．17トレンチ全景（北東から）
写真３．18トレンチ全景（西から）
写真４．20トレンチ全景（北から）
写真図版36　大尾・太秦遺跡10
写真１．16トレンチ検出焼土ピット
写真２．20トレンチ南端検出11トレンチへと続く谷
写真３．20トレンチ検出竪穴住居址１
写真４．20トレンチ検出竪穴住居址２
写真図版37　大尾・太秦遺跡11
写真１．21トレンチ全景（南東から）
写真２．22トレンチ全景（北から）
写真３．13トレンチ全景（南西から）

写真４．14トレンチ全景（西から）
写真図版38　大尾・太秦遺跡12
写真１．14トレンチ北東端遺構検出状況（東から）
写真２．15トレンチ全景（北から）
写真３．19トレンチ全景（西から）
写真４．15トレンチ中央谷埋め立て状況
写真図版39　大尾・太秦遺跡13
写真１．15トレンチ南端谷埋め立て状況
写真２．15トレンチ遺物包含層堆積状況
写真３．21トレンチ土層堆積状況
写真４．22トレンチ土層堆積状況
写真図版40　大尾・太秦遺跡14　２・７～９トレンチ出土遺物
写真図版41　大尾・太秦遺跡15　９・16・20・22トレンチ出土遺物
写真図版42　大尾・太秦遺跡16　20トレンチ出土遺物
写真図版43　大尾・太秦遺跡17　11トレンチ出土遺物
写真図版44　大尾・太秦遺跡18　７・９・11・17・20トレンチ出土遺物
写真図版45　打上・寝屋南遺跡１
写真１．寝屋南地区　第２トレンチ　全景（西から）
写真２．寝屋南地区　第２－２トレンチ　第１面鋤溝群
写真３．寝屋南地区　第２－２トレンチ　谷状落込北東壁断面
写真４．寝屋南地区　第２トレンチ　落込部分北西壁断面
写真図版46　打上・寝屋南遺跡２
写真１．寝屋南地区　第３－１トレンチ　全景（北東から）
写真２．寝屋南地区　第４トレンチ　全景（北東から）
写真３．寝屋南地区　第３－２トレンチ　全景（南西から）
写真図版47　打上・寝屋南遺跡３
写真１．寝屋南地区　第５トレンチ　全景（南東から）
写真２．打上地区　第１－１トレンチ　上段より中段・下段をのぞむ
写真３．打上地区　第１－２トレンチ　第１面全景（北東から）
写真４．打上地区　第１－１トレンチ　土坑１銭貨出土状況
写真図版48　打上・寝屋南遺跡４
写真１．打上地区　第２トレンチ　第３面足跡検出状況
写真２．打上地区　第２トレンチ　第５面全景（南東から）
写真３．打上地区　第２トレンチ　第３面全景（南東から）
写真図版49　打上・寝屋南遺跡５
写真１．打上地区　第２トレンチ　第４層遺物出土状況
写真２．打上地区　第２トレンチ　北壁断面
写真３．打上地区　第３トレンチ　全景（北東から）

写真４．打上地区　第３トレンチ　土坑検出状況
写真図版50　打上・寝屋南遺跡６
写真１．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真２．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真３．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真４．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真図版51　打上・寝屋南遺跡７
写真１．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真２．寝屋南地区　第３－２トレンチ出土遺物
写真３．打上地区　第２トレンチ出土遺物
写真４．打上地区　第２トレンチ出土遺物
写真図版52　打上・寝屋南遺跡８
写真１．打上地区出土遺物
写真２．打上・寝屋南地区出土遺物
写真３．打上・寝屋南地区出土瓦
写真図版53　寝屋東遺跡（その１）１
写真１．調査前風景（西から）
写真２．調査前風景（南西から）
写真３．調査前風景（東から）
写真４．１Ａトレンチ断面（南から）
写真図版54　寝屋東遺跡（その１）２
写真１．２トレンチ全景（南西から）
写真２．３Ａトレンチ全景（南西から）
写真３．３Ｂトレンチ全景　掘立柱検出状況
写真４．３Ｃトレンチ全景（南から）
写真図版55　寝屋東遺跡（その１）３
写真１．３Ｄ・３Ｅトレンチ全景　溝・谷検出状況（南西から）
写真２．４Ａトレンチ全景（北東から）
写真３．４Ａトレンチ土坑検出状況（南東から）
写真４．４Ｂ～４Ｄトレンチ全景（南西から）
写真図版56　寝屋東遺跡（その１）４
写真１．４Ｃトレンチ全景　不定形土坑検出状況（南西から）
写真２．５Ｄ・５Ｅトレンチ全景（北東から）
写真３．６Ｂトレンチ全景（南から）
写真４．６Ｃトレンチ西壁断面（北東から）
写真図版57　寝屋東遺跡（その１）５
写真１．７Ａトレンチ全景（北東から）
写真２．８トレンチ全景（南東から）

写真３．９トレンチ全景　溜池屑部検出状況（南東から）
写真４．10トレンチ全景（北西から）
写真図版58　寝屋東遺跡（その２）１
写真１．１Ａ（手前）～３Ｄトレンチ（奥）全景（南西から）
写真２．１Ａトレンチ全景（南西から）
写真３．１Ｂトレンチ全景（南西から）
写真４．１Ｃトレンチ全景（南西から）
写真図版59　寝屋東遺跡（その２）２
写真１．１Ａトレンチ検出ピット１（南から）
写真２．１Ｂトレンチ東側壁面検出ピット
写真３．１Ｃトレンチ検出溝１（西から）
写真４．１Ｃトレンチ検出溝１断面
写真図版60　寝屋東遺跡（その２）３
写真１．２トレンチ全景（北東から）
写真２．３Ａトレンチ全景（北東から）
写真３．３Ｂ（手前）～３Ｄトレンチ（奥）全景（南西から）
写真４．３Ｃ（手前）・３Ｄトレンチ（奥）全景（南西から）
写真図版61　寝屋東遺跡（その２）４
写真１．２トレンチ検出ピット１（南西から）
写真２．２トレンチ検出ピット２（北東から）
写真３．２トレンチ検出土坑１（南から）
写真４．３Ａトレンチ検出土坑１（南西から）
写真図版62　寝屋東遺跡（その２）５
写真１．３Ａトレンチ土層堆積状況
写真２．３Ｂトレンチ検出段および溝（西から）
写真３．３Ｄトレンチ検出溝１（西から）
写真４．６トレンチ土層堆積状況
写真図版63　寝屋東遺跡（その２）６
写真１．４Ａ（手前）～４Ｅトレンチ（奥）全景（南西から）
写真２．４Ｃ（手前）～４Ｅトレンチ（奥）全景（南西から）
写真３．５トレンチ全景（南西から）
写真４．６トレンチ全景（北東から）
写真図版64　寝屋東遺跡（その２）７
写真１．５トレンチ検出土坑１（南東から）
写真２．５トレンチ検出溝１（西から）
写真３．５トレンチ検出土坑２（南東から）
写真４．５トレンチ検出土坑２断面
写真図版65　寝屋東遺跡（その２）８

写真１．４Ａトレンチ検出溝１断面
写真２．４Ｂトレンチ西側壁面検出ピット
写真３．４Ｅトレンチ検出段（南から）
写真４．６トレンチ検出土坑１断面
写真図版66　寝屋東遺跡（その２）９
写真１．７トレンチ全景（南西から）
写真２．７トレンチ土層堆積状況
写真３．８トレンチ北全景（南西から）
写真４．８トレンチ南全景（南西から）
写真図版67　寝屋東遺跡（その２）10　１Ａ～１Ｃ・３Ａトレンチ出土遺物
写真図版68　寝屋東遺跡（その２）11　３Ｂ・３Ｄ・４Ａ・４Ｄ・５トレンチ出土遺物
写真図版69　寝屋東遺跡（その２）12　４Ｃ・４Ｅ・６トレンチ出土遺物
写真図版70　寝屋東遺跡（その２）13　３Ａ・６～８トレンチ出土遺物
写真図版71　私部南遺跡１
写真１．14・15－１トレンチ　全景（西から）
写真２．14トレンチ　東壁断面（西から）
写真３．15－１トレンチ　北壁断面（西から）
写真４．15－２トレンチ　北壁断面（西から）
写真５．16－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真６．16－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真図版72　私部南遺跡２
写真１．１トレンチ　北壁断面（南から）
写真２．２トレンチ　北壁断面（南から）
写真３．３トレンチ　北壁断面（南から）
写真４．４－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．４－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真６．５－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真図版73　私部南遺跡３
写真１．５－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真２．５－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真３．５－２トレンチ　平面（西から）
写真４．22－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．22－１トレンチ　平面（東から）
写真６．22－１トレンチ　平面（東から）
写真図版74　私部南遺跡４
写真１．22－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真２．22－２トレンチ　平面（西から）
写真３．22－２トレンチ　平面（東から）

写真４．18－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．18－１トレンチ　平面（西から）
写真６．18－２トレンチ　北壁断面（南から）

写真図版75　私部南遺跡５
写真１．20－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真２．20－２トレンチ　南壁断面（北から）
写真３．20－２トレンチ　平面（西から）
写真４．21－１トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．21－２トレンチ　北壁断面（南から）
写真６．６トレンチ　北壁断面（南から）

写真図版76　私部南遺跡６
写真１．17トレンチ　南壁断面（北から）
写真２．17トレンチ　平面（東から）
写真３．19トレンチ　平面（東から）
写真４．19トレンチ　平面（東から）
写真５．19トレンチ　平面（東から）
写真６．19トレンチ　北壁断面（南から）

写真図版77　私部南遺跡７
写真１．８トレンチ　北壁断面（南から）
写真２．９トレンチ　北壁断面（南から）
写真３．９トレンチ　平面（東から）
写真４．10トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．11トレンチ　北壁断面（南から）
写真６．11トレンチ　平面（西から）

写真図版78　私部南遺跡８
写真１．12トレンチ　１面（西から）
写真２．12トレンチ　２面（東から）
写真３．12トレンチ　２面（東から）
写真４．13トレンチ　１面（東から）
写真５．13トレンチ　２面（東から）
写真６．13トレンチ　２面（東から）

写真図版79　私部南遺跡９　出土遺物

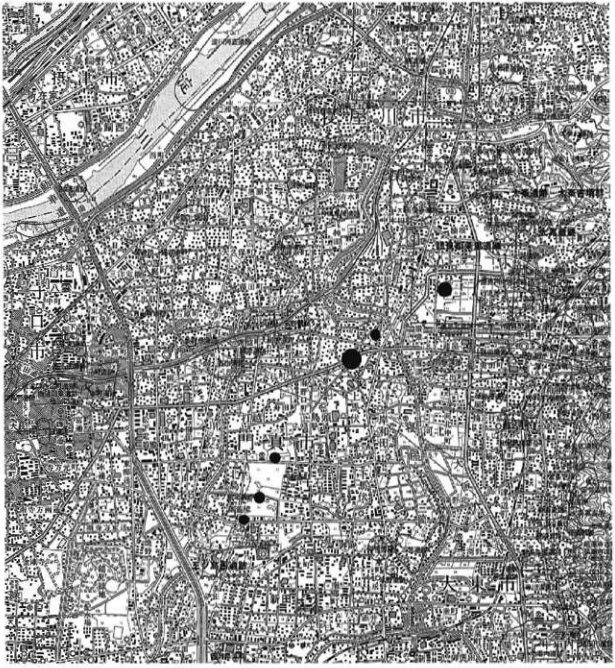
写真図版80　東倉治遺跡１
写真１．１トレンチ　全景（西から）
写真２．１トレンチ　東壁断面（西から）
写真３．２トレンチ　北壁断面（南から）
写真４．２トレンチ　北壁断面（南から）
写真５．３トレンチ　東壁断面（西から）

写真６．４トレンチ　東壁断面（西から）
写真図版81　津田城遺跡東地区１
写真１．No.１～11トレンチ　調査地遠景（西から）
写真２．No.１－１トレンチ（北東から）
写真３．No.２トレンチ（北から）
写真図版82　津田城遺跡東地区２
写真１．No.３トレンチ（東から）
写真２．No.４－１・４－２トレンチ（東から）
写真３．No.５トレンチ（東から）
写真４．No.６トレンチ（北西から）
写真図版83　津田城遺跡東地区３
写真１．No.７－１トレンチ（南から）
写真２．No.７－２トレンチ（北から）
写真３．No.８トレンチ（北東から）
写真４．No.９トレンチ（南西から）
写真図版84　津田城遺跡東地区４
写真１．No.９・10－１・10－２トレンチ（南から）
写真２．No.10－１トレンチ（北から）
写真３．No.11－１トレンチ（北東から）
写真４．No.11－２トレンチ（西から）
写真図版85　津田城遺跡東地区５
写真１．No.12・13トレンチ（北東から）
写真２．No.12トレンチ（西から）
写真３．No.14・15トレンチ（北から）
写真４．No.15トレンチ（西から）
写真図版86　津田城遺跡東地区６
写真１．No.16トレンチ（東から）
写真２．No.17トレンチ（東から）
写真３．No.18－１トレンチ（東から）
写真４．No.18－２トレンチ（西から）
写真図版87　津田城遺跡東地区７
写真１．No.19－２トレンチ（北西から）
写真２．No.19－１トレンチ（西から）
写真３．No.20トレンチ（北から）

第１章　調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は、第二京阪道路とそれに併行して建設される一般国道１号バイパス（大阪北道路）予定地で、埋蔵文化財の遺構・遺物の有無を確認するために行った。

平成８年度に一般国道１号の一部、府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線間における道路整備に伴って、門真市三ツ島地先で埋蔵文化財確認調査を行った〔『三ツ島遺跡　一般国道１号バイパス（大阪北道路）建設に伴う門真市三ツ島地区埋蔵文化財確認調査報告書』1997．３〕。平成10年度には門真市四宮地区と枚方市長尾台地区の確認調査を、平成11年度には枚方市津田城遺跡と交野市有池遺跡で確認調査を行った〔『一般国道１号バイパス（大阪北道路）建設に伴う　長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群』2001．３〕。平成12・13年度には枚方市茄子作遺跡、寝屋川市小路遺

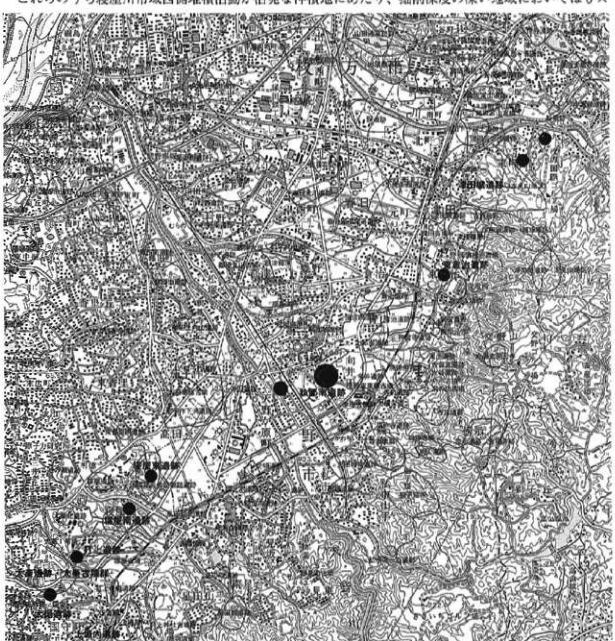


第１図　調査遺跡分布図（西部）

跡などを中心として、北河内を横断する路線全域に確認調査が及ぶことになった。

その結果、小路遺跡は北接する高宮遺跡、南接する小路遺跡の範囲が拡大し、東側では大尾遺跡が新規登録された。その東方の寝屋川市打上遺跡では古墳を検出したことを受け、北接する太秦遺跡・太秦古墳群が範囲拡大された。また、枚方市・交野市にまたがる茄子作遺跡では弥生時代・古代の集落に伴う遺構の検出があったことを重視し、上の山遺跡として新規登録された〔『一般国道バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書　讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』2002．8〕。前回よりも増して平成13・14年度では、門真市門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、寝屋川市讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、交野市私部南遺跡、東倉治遺跡、枚方市津田城遺跡東地区と調査範囲が拡がった。

これらのうち寝屋川市域西側堆積活動が活発な沖積地にあたり、掘削深度の深い地域においては6×



第2図　調査遺跡分布図（東部）

4ないしは5×4mのトレンチにそれぞれ土留め用の鋼矢板を打ち込んで高架道路基礎が地下に大きく影響を与えると考える現地表面から5mの深さまでを掘削することを基本とした。このことは前年と同様だが、特に今回、低地部では縄文時代の貝層の位置確認に留意をはらった。それ以外の場所では主に予定地の側辺にそわせるように幅2～4mの細長いトレンチを設定し、鋼矢板は用いずに掘削した。対面するトレンチ間で様相が大きく異なる部分や丘陵性の地形を呈する部分では、用地を横断する方向のトレンチや等高線の微地形にあわせ調査区を設定した。現代の耕作土および盛土は主に重機で掘削し、それより下層の堆積土は人力で一層ごとに掘削し、遺構の検出に努めた。遺構は原則として掘削していない。

なお、これら調査の成果を受けて、各地点は、讃良郡条里遺跡西地区の遺構分布の面的把握のための再調査、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、寝屋東遺跡、私部南遺跡では、それぞれ遺跡範囲を拡大する扱いとなった。（一瀬）

第2章　調査成果

第1節　門真西地区（その1・2・3）

1．門真西地区（その1）

1．調査に至る経緯（第13図）

一般国道1号バイパス（大阪北道路）、及び、この中央に建設される第二京阪道路予定地のうち、門真市北巣本町と宮前町の各1カ所、北島地先2カ所の合計4カ所で埋蔵文化財を確認する調査を実施した。門真市域の当該道路における調査は、平成8年度の三ツ島地先、平成10年度の上馬伏から横地地先に至る地域で実施されているが、これらに続くものである。加えて、平成13年度は、三ツ島地先の1カ所で「門真西地区（その2）遺跡確認調査」も実施されている。

なお、平成6年度には、大阪市営地下鉄第7号線（現、長堀鶴見緑地線）建設に関わる三ツ島西遺跡の調査が、財団法人　大阪府埋蔵文化財協会（平成7年度に財団法人　大阪府文化財調査研究センターに統合）によって実施されている。この調査地は、第二京阪道路が近畿自動車道天理・吹田線、大阪中央環状線に取り付くランプに含まれる地区である（本節4．既往の調査地域・三ツ島西遺跡調査報告参照）。

2．位置と環境（第13図）

最終氷期が終わった北・中河内地方では、温暖化による海面上昇のため、縄文時代前期には大阪湾が生駒山麓まで入り込んでいた。これは、以降、淀川や古大和川水系の沖積作用による陸化が進み水域が狭められると、河内湾、河内湖へと変化していった。さらに、中世にはすでに池と化し、近世における深野池（大東市）、新開池（東大阪市）がその名残とされる。深野池が戦国時代に存在したことは、キリシタン宣教師として当地を訪れたルイス・フロイスの記述によって知られる（フロイス『日本史』）。

河内湖名残の二つの池は、近世になると、寛文2（1662）年の河内国絵図を例として、国絵図、村絵図に描かれる。両池には、北からは寝屋川（絵図には大和川と記される）、南からは古大和川にまとめ、生駒西麓からの諸川が集まる。このため、許容量を超えた水量が集まると、地域一帯に損害を与えた。しかし、これらは、宝永元年（1704）の大和川付替、また、その後の干拓工事によって緩和されることになった。加えて、現代に至ると、洪水の被害が甚大であった淀川も護岸工事が繰り返され、さらに、古川・寝屋川の流路整備、集落内の水路整備などが進んでいる。延喜式にも記載された蓮根栽培で有名な低湿地帯であった本地域も、様相は激変しつつある。

現在、門真市域の遺跡は、かつての淀川左岸の京阪鉄道本線の線路敷きに沿うようにある微高地上に発見されている遺跡群、その後背低地に形成された遺跡群の、南北に大きく片寄る2遺跡群に分けられる。今回の調査地域は、北巣本・宮前地区が北遺跡群に、北島地区は南北両遺跡群の中間より南側に位置する。

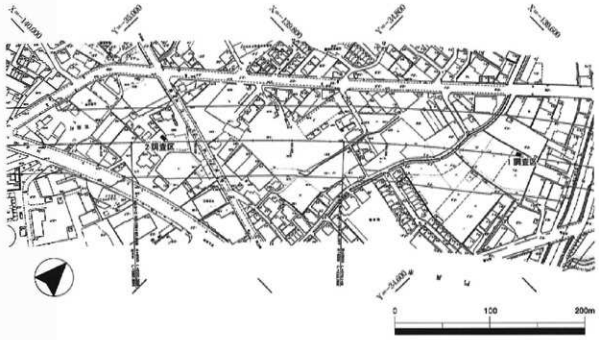
北遺跡群は、西に隣接する守口市域を含めた少し広い範囲で見ると、八雲遺跡（守口市）、西三荘・八雲東遺跡（守口市・門真市）で縄文後期土器が出土し、当時の陸地化の状況がわかる。銅鐸3個が出土した大和田遺跡、10基の方形周溝墓が検出された古川遺跡（門真市）など、弥生時代には遺跡が大

きく展開するようになる。楯遺跡（守口市）、普賢寺遺跡（門真市）では5世紀後半～6世紀前半、また、大庭北遺跡（守口市）でも6世紀後半の古墳が検出されている。以降、奈良時代の褒楕墓検出の橋波口遺跡（門真市）、平安後期～室町時代の寺院関係遺構が調査された普賢寺遺跡（門真市）、大阪府の史跡「伝茨田堤」の南にあり、室町時代の同堤の護岸施設かと推測される木組みが検出された宮野遺跡（門真市）と続く。また、平安時代の掘立柱建物が検出された大庭北遺跡、中世の柱穴検出の古川遺跡に続き、最近、楯遺跡では中世の複数の屋敷地が検出されている。少し離れた中神田遺跡（寝屋川市）でも鎌倉時代屋敷地を取り囲む堀跡が検出され、北遺跡群では中世の顕著な集落遺跡は発見されていなかったが期待がかかるようになった。南遺跡群は、昭和37年8月にくり舟が検出された三ツ島遺跡を中心とする。くり舟は弥生時代のものとされるが、遺跡群としての詳細は今後のものである。

なお、中世、南北朝期から室町期にかけて、古川以西・淀川左岸流域は「河内十七カ所」、寝屋川流域は「河内八カ所」という地域名称が史料にあらわれる。「カ所」は、近世の村単位にあたる。当時、十七カ所は幕府御料地、八カ所は北野社寄進地であり、各々、低湿地開発が行われたのであろう。また、北巣本町の調査地は、中世末期の開発領主が近世期にも所領を引き継ぎ、いわゆる一村一地主（一村一国）制が許された巣本村に含まれる地区である。調査地周辺部は、河内湾の時代から連綿と続く河内地方開発の歴史の鍵を握る地域となっている。

3．調査の方法（第3・4図）

調査は、道路予定地内で且つ調査可能な地点において4.0m×6.0mの調査坑を設定し、計4カ所で実施した。各箇所では土留め用の鋼矢板を打設し、現地盤高より－5mを掘削限界として調査を進めた。調査は、現代耕作土などの表土または造成土を重機で掘削・除去し、以下を人力によって掘削した。また、層位・面の検出状況にあわせ、平面図（S＝1/40）と断面図（S＝1/20）の作成、および写真撮影を行った。なお、調査区は北より順に番号を付した。以下、調査区を便宜的に大きく2地区にまとめ、それに従い各区ごとに述べることとする（第3・4図）。



第3図　門真西地区（その1）　1・2調査区位置図

4．各調査区の成果（第5～11図）

北巣本・宮前地区（1・2調査区）

当地区は、寝屋川の右岸の平坦地で、現地盤高でT.P.2.5～3.0mをはかる門真市内では微高地にあたる所である（第3図）。市内における遺跡の大半が自然堤防などの微高地で確認されていること、また北巣本地区は近世から続く村落域であることなどから、遺構・遺物の検出が期待できた。

1調査区（第5・9図）

調査対象地内で北東端にあたる当調査区では、東約30m先で寝屋川が南流している。旧地目は田圃である。調査では約0.3mの近・現代の耕土を除去すると、床土にあたる1－a層の黄茶褐色細シルトで、上面において第1面を確認した。雲母・Feを多量に含む土壌で、遺構・遺物は検出していない。つづく2－a層～2－i層は白灰～青灰色粗シルト～中礫である。おおむね粒径は東から西に向かって粗く、また上層から下層に向かって細かくなる。各層でラミナが顕著に確認できた。2－e層は暗灰色の粘土ブロックが南西方向から混入する。2－h層は淡灰色細砂で、上面において流路1を検出した。2層中からは須恵器（1）・土師器（2～6）・瓦器（7・8）・山茶碗（9）、また自然遺物類（流木・種子）が出土した（第9図）。それぞれが出土した層位・遺構は後の観察表に記した。これら遺物は堆積作用による摩滅をほとんど受けず、遺存状態が良いものが多い。3－a層は暗灰褐色粘土で、上面で北東から南西に向かう地形の落込みを形成していた（第3面、図版3写真1）。3－b層以下は灰色の細砂層で、上面にあたる第4面などで生物による生痕を検出した（図版1写真2）。3－b上層ではラミナが顕著であった。

2調査区（第6・10図）

一帯は主として産業廃棄物を含んだ1.5m近くの盛土がされていた。この層を除去すると1層の暗灰色粗シルトで、この上面で第1面を検出した。層厚は約0.3mを測り、下層（1'層）には鉄分が多量に垂下沈着していた。この層では土師器・瓦器（10～12）・瓦質土器（13～15）・須恵器（16）・炭化物を含んでいるが（第10図）、遺構の検出はできなかった。2－a層は暗灰色粘土の粗シルトが混じる粘性の極めて強い層で、この上面は第2面にあたる。第3面は、流水堆積と思われる3層の暗灰黄褐色シルトの上面で検出した（図版3写真3）。北西隅からの広がりで未分解の葉・木片が所により0.08mの層厚で堆積している。5層は灰褐色粘土で極めて粘性が強く、第5面はこの上面にあたる。未分解の炭化物・植物遺体を豊富に含み、特に下層（5'層）に至り顕著であった。6'層は灰黄色粘土の薄層で、上面が第6面である。層厚は0.02mほどで、平面全体には暗灰色が斑点状に広がっていた（図版4写真1）。第7面は7'層の暗黒灰色粘土の上面である。同層は粘性が極めて強く、植物遺体を含んでいた。9－a'層は暗灰色細シルトと植物遺体の互層で、上面では植物遺体のまとまりが確認できる第9面を検出した。また、9層中では生物の活動痕である生痕を3点検出した（図版1写真3）。以上のいずれの層からも遺構・遺物の検出は見なかった。

北島地区（3・4調査区）

古川左岸の後背低地で、東方にはかつて千石沼とよばれた池沼がある。「北島」とは、中世に八ヶ湖の中の島を拠点に開拓され、三ツ島の北に位置することを由来とする地名である（『大阪府の地名』Ⅱ（日本歴史地名大系28）平凡社　1986）。現地盤高はT.P.+0.5～1.0mをはかる（第4図）。市内の低地部では古くからレンコンの栽培用地としての利用が盛んで、本調査地の近辺では今日でも行われている。

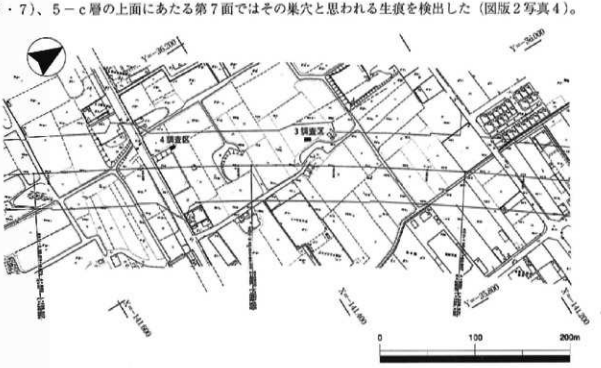
したがって、調査前ではレンコン畑跡の検出も予想していた。

3調査区（第7図）

旧地目は水田であった当調査区では、約0.3mほどの旧耕土層を除去すると、1－a層の極暗灰色粘土が確認できた。この層はヨシと思われる垂下した植物茎を包含していた。この植物茎は続く1－b層の淡灰青色粘土にまで及んでいた。1－b層の上面では第1面を検出した。2層は灰褐色粘土で、上面が第2面にあたる。この層はコモと思われる植物遺体を多く包含していた。3－d層は灰青色極細砂で、下層に向かい白灰色細砂の波状ラミナがはいる（図版1写真4）。上層では生物による生痕を確認した。上面で検出した第6面には暗灰色粗シルトと植物遺体の互層（3－b下層）と灰青白色極細砂（3－c層）が被っていた。4－a層は暗灰褐色粗シルトの極細砂混じりで、上面にあたる第7面においては足跡（シカ？）を検出した（図版4写真4）。地形は北から南に下がる傾斜を見せる。4－d層以下では貝類化石が出土したほか、この層の上面にあたる第8面などではその巣穴となる生痕を検出した。5層は灰黄褐色粘土で、この上面にあたる第9面では長さ約3.5mの自然木（タブノキ）を検出した（図版2写真1）。この層の下部では極細砂の薄層が波状にはいるのを確認した。この調査区では、他に顕著な遺構及び遺物の検出はしていない。

4調査区（第8図）

現地盤は約1.2mほど盛土されていた。盛土からは近・現代の遺物を採集した。これを除去すると1－a層の黒灰色粘土で極めて粘性が強く、上面において第1面を検出した。下にのびる植物茎があった。2－a層は暗灰黄褐色粘土で、この上面にあたる第2面では流路2を検出した。流路2の幅は約1.6mほどで、断面はU字状を呈する（図版2写真3）。遺物を伴わないため形成時期は不明である。4－a層は灰白色極細砂で、上面の第5面で生物の生痕を確認した。3調査区と同様で、第5面には灰褐色細シルトと植物遺体の互層が被覆していた。5－a層は暗灰褐色粗シルトで粗～細砂が混じり、上面では北から南に向かって下る第6面を検出した。5－c層以下では貝類化石が出土したほか（図版6・7）、5－c層の上面にあたる第7面ではその巣穴と思われる生痕を検出した（図版2写真4）。



第4図　門真西地区（その1）　3・4調査区位置図

番号	調査区	層位・遺構	時期	遺物種	器種	法量（cm）			色調		成形	主な調整・手法		備考
						口径	（残）器高	底径	外面	内面		外面	内面	
1	1調査区	表採	古墳	須恵器	杯身	11	3	－	青灰	オリーブ灰	堅緻	ナデ	ナデ	
2	1調査区	2－d層	古代	土師器	皿	12.6	3	－	灰白	浅黄橙	堅緻	ナデ	ナデ	
3	1調査区	溝路1	古代	土師器	皿	14.6	3.8	－	明褐白	灰褐	堅緻	ナデ	ナデ	
4	1調査区	溝路1	古代	土師器	皿	14	1.9	－	灰白	灰白	堅緻	ナデ	ナデ	
5	1調査区	2－e層	古代	土師器	皿	13.8	1.7	－	灰黄褐	灰黄褐	堅緻	ナデ	ナデ	
6	1調査区	2－f層	古代	土師器	皿	9.6	2.2	－	灰黄	灰白	堅緻	ナデ	ナデ	
7	1調査区	2－h層	中世	瓦器	椀	－	1.8	6	灰白	灰	堅緻	指オサエ	ミガキ	
8	1調査区	2－h層	中世	瓦器	椀	14.9	5.1	－	黒	オリーブ黒	堅緻	ミガキ	ミガキ	
9	1調査区	2－e層	中世	山茶碗	椀	15.6	5.8	7.6	明青灰	灰白	堅緻	ナデ	ナデ	墨書
10	2調査区	1層	中世	瓦器	椀	15.4	3	－	灰	灰	堅緻	ナデ	ナデ	
11	2調査区	1層	中世	瓦器	椀	15.2	3.5	－	灰白	灰白	堅緻	ナデ	ナデ	
12	2調査区	1層	中世	瓦器	椀	－	2	4.5	灰白	オリーブ黒	堅緻	指オサエ	ナデ	
13	2調査区	1層	中世	瓦質土器	釜	19.2	4.7	－	灰黄褐	にぶい黄橙	堅緻	ケズリ	ハケ	
14	2調査区	1層	中世	瓦質土器	釜	20	3.9	－	灰	灰黄	堅緻	ケズリ	ハケ	
15	2調査区	1層	中世	瓦質土器	浅鉢	－	3.1	－	灰黄	浅黄	堅緻	ナデ	ナデ	
16	2調査区	1層	中世？	須恵器	甕	54	2.6	－	灰	灰白	堅緻	ナデ	ナデ	

第1表　門真西地区（その1）　遺物観察表

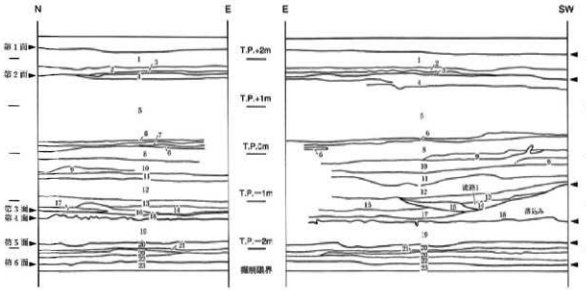
5．出土遺物（第9・10図）

出土位置・状況は上表の通りである。1は、たちあがりがほぼ直立する杯身片である。たちあがりは右方向の回転ナデ、受部と体部にはナデを施している。2～4は底部から緩やかに開きながら立ち上がる皿である。体部から口縁部にかけてはヨコナデを施している。5・6は皿である。6は「て」字状口縁を呈し、口縁部は丁寧にヨコナデし端部を玉縁状に収めている。7・8は椀の口縁・底部である。7は断面三角形の高台を持ち、内面には暗文がある。8は高台を欠損し、内・外面とも密に磨いている。9は外面に右方向の回転ナデを施した椀で、底面には墨書がある。1～9の遺物の時期は、5世紀末から12世紀中ごろまでに収まる。10～12は内・外面に磨きを施した椀の口縁・底部片である。10・11は口縁部にヨコナデを施している。13・14は体部にケズリを施す釜、15は浅鉢のそれぞれ口縁部から体部の破片である。16は甕の口縁部片で、内・外面にヨコナデを施している。10～15の時期はおおむね12世紀中頃に収まる。

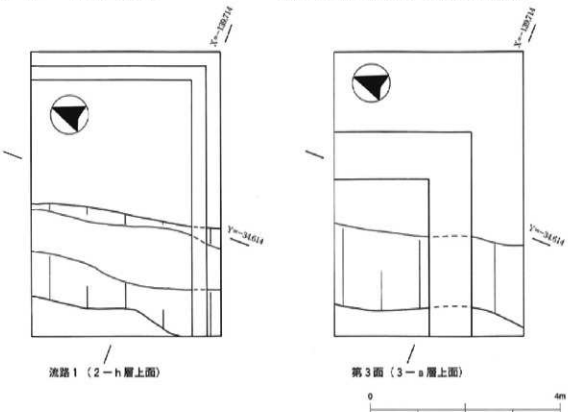
6．まとめ

今回の調査対象地は南北に長く調査区もその中に互いに距離をおいて配しているため、全体を通じての細部に至る基本的な層序は求めにくい。したがって、各地区および調査区での特徴的な層を取り上げ、大きくまとめることとする（第11図）。北巣本・宮前地区での二つの調査区では堆積状況が大きく異なっている。1調査区の2層では河川氾濫の繰り返しによると思われる堆積を3m近く確認したのに対し、2調査区では灰褐～暗黒灰色の粘土が連続的に堆積しているのが確認できた。特に2調査区の6層は、池島・福万寺遺跡で確認される弥生時代前期中頃にあたる第4黒色粘土層に、また7'層は第5黒色粘土層にそれぞれ相当するものと考える。両調査区の層的対応関係としては、1調査区3－a層と2調査区8－b層との対応を考える。次に北島地区においては、4調査区の造成土を除けばほぼ同質の層序で、その対応関係が追える。3調査区3－c～d層以下と4調査区4層以下は、当地区および周辺が浸水・陸化を繰り返した結果の堆積によるものと考える。

以上から調査の要点を大きく2点にまとめる。まず、北巣本・宮前地区の特に2調査区では遺物包含



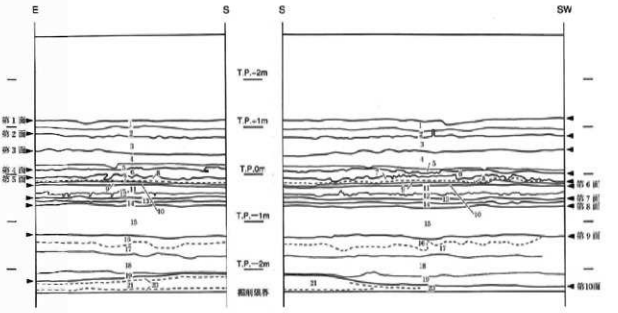
1：1－a層　第1面　黄茶褐色粗シルト　粘性極めて弱い
雲母・Feを多量に含む
2：1'層　暗灰白色粗シルト　粘性極めて弱い
3：1－b層　灰白色細砂　粘性極めて弱い　Feが混じる
4：2－a層　第2面　白灰色極細砂～細礫　Fe含む　炭化物含む
ラミナあり
5：2－b層　白灰色細砂礫～中礫　下層につれ粒径が粗くFeを含む
ラミナ顕著
6：2－c層　暗灰色極細砂　粘性極めて弱い
7：2－c'層　淡灰色細砂
8：2－c'層　青灰色中砂　木片・炭化物を含む
ラミナは斜交状に入る
9：2－d層　青灰色細砂
10：2－d'層　灰色細砂　木片を含む
12：2－f層　灰白色極細砂　中～粗砂は混じる
13：2－g層　白色細砂　中砂混じり
14：2－h層　淡灰色細砂
15：2－h'層　青灰白色粗シルト　細砂混じり
16：2－h''層　淡灰色粗シルト
17：2－i層　灰青白色粗シルト　細砂混じり　ラミナあり
18：3－a層　第3面　暗灰褐色粘土　粘性極めて強い
19：3－b層　第4面　暗灰色極細砂　暗灰褐色細シルトブロックが混じる
ラミナは波状に入る　下層に生痕あり
20：3－c層　第5面　灰青色極細砂　生痕あり
21：3－c'層　灰白色細砂
22：3－d層　暗灰青色粗シルト　粘性極めて弱い　ラミナあり
生痕あり
23：3－e層　第6面　淡青灰色細砂　植物遺体が混じる　生痕あり



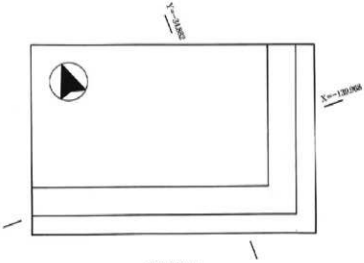
流路1（2－h層上面）

第3面（3－a層上面）

第5図　門真西地区（その1）　1調査区平面図および断面図

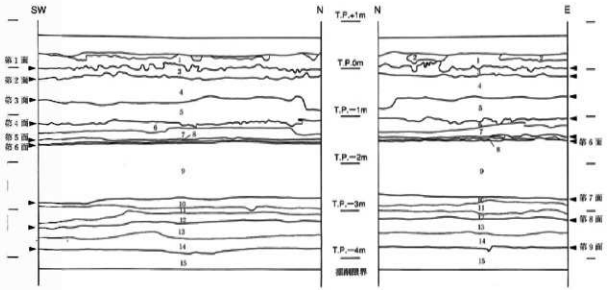


1：1－a層	第１面	暗灰色細シルト　極細砂混じり　粘性並	
2：1－b層		暗灰色細シルト　極細砂混じり　Feが多量に垂下沈着	
3：2－a層	第２面	暗灰色粘土　粗シルト混じり　粘性極めて強い	
4：2－b層	第３面	灰青褐色細砂　粘性弱い　ラミナあり　植物遺体混じる 下層に未分解の木・葉片が沈留	
5：3層		暗灰青褐色細シルト　粘性並　植物遺体が混じる	
6：4層	第４面	灰褐色粘土　粘性極めて強い　植物遺体が混じる	
7：5層	第５面	灰褐色粘土　粘性極めて強い　炭化物が混じる 植物遺体を多く含む	
8：5'層		灰褐色粘土と未分解の植物遺体の互層	
9：5"層		灰色粘土　粘性極めて強い　植物遺体を多く含む	
10：6'層	第６面	灰青色粘土　粘性極めて強い	
11：6層		極暗灰色粘土　粘性極めて強い　植物遺体を多く含む	
12：7層		暗灰色粘土　粘性極めて強い　植物遺体を含む	
13：7'層	第７面	暗黒灰色粘土　粘性極めて強い　植物遺体を含む	
14：8－a層	第８面	淡灰色粘土　粗シルト混じり　粘性極めて強い	
15：8－b層		灰褐色粘土　粗シルト・雲母混じり　粘性極めて強い 植物遺体・炭化物含む	
16：9－a'層	第９面	暗灰色細シルトと植物遺体の互層　ラミナが透状に入る	
17：9－a層		灰色極細砂　粘土小ブロック混じり　粘性極めて弱い 生痕あり	
18：9－b層		灰青白色細砂　炭化物が少量混じる 生痕が顕著にあり	
19：9－b'層		青灰色極細砂　植物遺体を含む　ラミナが透状に入る 生痕あり	
20：10層	第10面	淡灰褐色粘土　粘性並　植物遺体・炭化物混じる	
21：10'層		清灰色細シルト　粘性弱い　極細砂混じり	

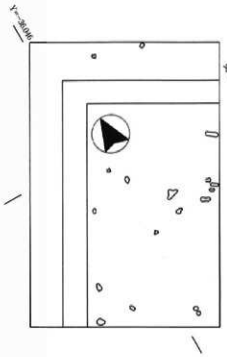


調査区平面

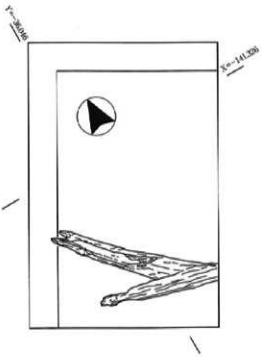
第６図　門真西地区（その１）　２調査区平面図および断面図



1：1－a層		極暗灰色粘土　極細砂混じり　粘性強い
2：1'層		植物茎（ヨシ？）混じり　浅灰色細砂　粘性薬い
3：1－b層	第1面	淡灰青色粘土　粘性並
4：2層	第2面	灰黄褐色粘土　粘性並　植物遺体（コモ？）を含む
5：3－a層	第3面	暗灰褐色粗シルト　粘性弱い　植物遺体が混じる
6：3－b層	第4面	暗灰色粗シルト　極細砂混じり　粘性極めて弱い
7：3－b層		未分解の植物遺体（葉片？）との互層
	第5面	灰青白色極細砂と植物遺体の互層　粘性極めて弱い
8：3－c層	第6面	灰青色極砂　上層にかけては植物遺体が乗下して入る（生痕）
9：3－d層		下層では白灰色細砂の塊状ラミナが顕著に入る
	第7面	暗灰褐色粗シルト　極細砂混じり　粘性並
10：4－a層		ラミナはレンズ状に挟在　植物遺体を含む
11：4－b層		黒灰色極細砂　粗シルトがブロック状に混じる ラミナはレンズ状に挟在　植物遺体・炭化物を含む
12：4－c層		黒灰色粗シルト　極細砂混じり　粘性弱い 植物遺体・炭化物を含む
13：4－d層	第8面	黒灰色細シルト　粗シルト混じり　粘性強い 植物遺体・炭化物を含む 生痕あり　貝類化石を含む
14：4－e層		暗灰褐色細シルト　粗シルト混じり　粘性強い 植物遺体・炭化物を多く含む　生痕が顕著にあり 貝類化石を多く含む
15：5層	第9面	灰青褐色粘土　粘性強い　生痕が顕著にあり 貝類化石を多く含む

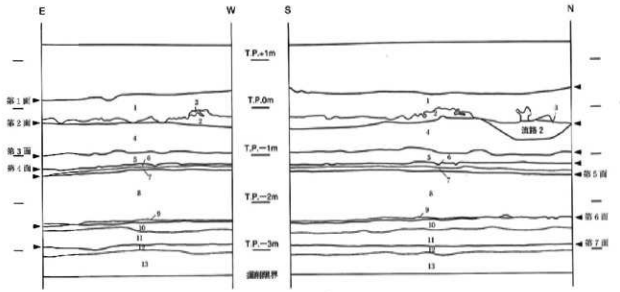


第7面（4－a層上面）

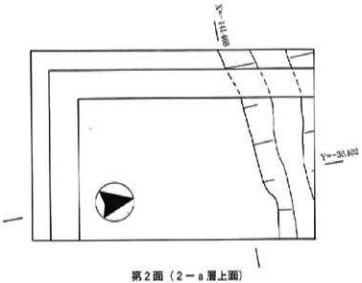


第9面（5層上面）

第7図　門真西地区（その1）　3調査区平面図および断面図

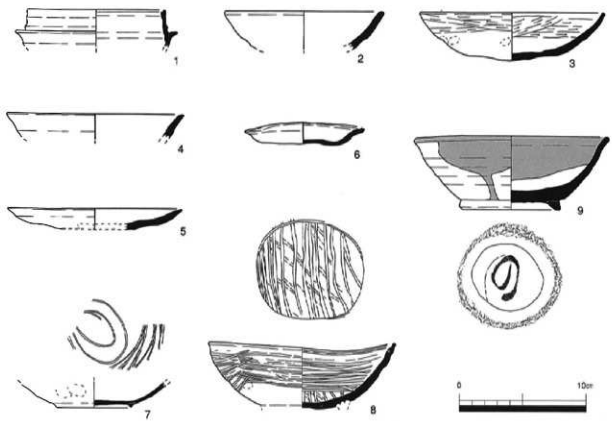


1：1－a層　第１面　黒灰色粘土　粘性極めて強い
2：1－b層　　青灰色粘土　細シルト混じり　粘性並
　　植物茎（コモ？）が垂下して混じる
3：1'層　　極暗灰～灰白色粘土　粘性並
4：2－a層　第２面　暗灰黄褐色粘土　粘性並　植物遺体が混じる
　　第３面　黄灰褐色細シルト　細砂含む
5：2－b層　第４面　灰青色粗シルト　細砂含む
6：3層　　灰褐色粗シルトと植物遺体の互層　粘性極めて弱い
7：3層　　第５面　灰白色極細砂　ラミナは波状に入る　植物遺体が垂下して入る（生痕）
8：4－a層　　暗灰色極粗砂
9：4－b層　第６面　暗灰褐色粗シルト　粗～細砂混じり　粘性弱い
10：5－a層　　ラミナはレンズ状に挟在　植物遺体を含む
　　暗灰褐色細シルト　細砂混じり　粘性強い　　ラミナはレンズ状に挟在
　　下部にCaが混じる
11：5－b層　　第７面　暗灰褐色細砂　粗シルト混じり　粘性並　植物遺体を含む
12：5－b'層　　生痕あり　貝類化石を含む
　　暗灰褐色シ埋ルト　粘性並　植物遺体を含む　生痕が顕著にあり
13：5－c層　　貝類化石を多く含む

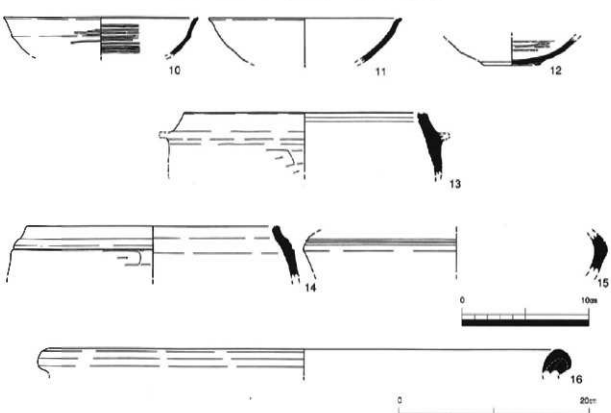


第２面（２－ａ層上面）

第８図　門真西地区（その１）　４調査区平面図および断面図



第9図　門真西地区（その1）　1調査区出土遺物



第10図　門真西地区（その1）　2調査区出土遺物

第11図　門真西地区（その1・2）　土層断面柱状図

層を確認できた。1調査区からも流水堆積の砂層から遺存状態の良い遺物が採集できている。これらの時期は出土遺物から12世紀を中心としたものと考えており、当地区より南で平成11年度に調査した門真遺跡群4トレンチからも同時期ごろの瓦器椀が出土しており、周囲にはこれに該当する時期の集落の存在がうかがえる。次に、北島地区の3調査区4層以下、4調査区5層以下では貝類の生息層を確認した。これについては第3章で述べる。遺構の検出は3調査区のシカと思われる足跡、4調査区の流路2にとどまるが、周辺に活動痕跡を求められる可能性はある。

最後に、今回の調査では出土状況の良好な遺物が少なかった為に各層の年代を確認することが困難であったため、各調査区で自然遺物の検出・取り上げ、および土壌サンプルの採集を行った。採集したサンプルについては放射性炭素年代測定など種々の自然科学分析を行い、その結果を第3章で付載したので調査成果と併せて参照していただきたい。（井藤・松尾）

2．門真西地区（その2）

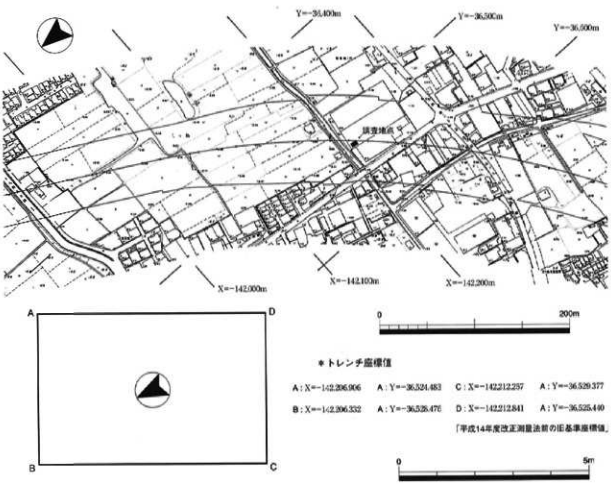
1．調査の概略（第12図）

今回の調査地は、なみはやドームの北東で門真市三ツ島地先の沖積（層）低地上に位置する。この調査地周辺は、東側の生駒山地と西側の上町台地に挟まれた低地部で、砂・シルト・海成粘土が相互に厚く堆積している地域である。また、この地域では北側の淀川方面に向かって流れていた多くの河川によって生じた旧河道・後背湿地・微高地・自然堤防などの複雑な配置の微地形を見ることができる。

調査区は、工場の跡地に6.0×4.0mのトレンチを現地表面の土地区画に沿って、ほぼ正方位になるように設定（一ヶ所）した。掘削深度は周辺のボーリングデータに基づいて、現地盤から5.0mを予定していたが、盛土の除去後に鋼矢板を打設したため、最終の人力掘削深度は6.0m（T.P.－5.0m）付近までとった。

2．調査地周辺の環境（第13図）

今回の調査地は、大阪府を南流する淀川下流域左岸に広がる沖積低地（T.P.1.0m前後）の一角で、大阪府内でも低い地域にあたる大阪府北東部の門真市三ツ島地区に所在する（図版8写真1・2）。調査地南・東側には、縄文海退の影響によって生じた窪地である旧深野・新開同池が位置し、古くから水による被害が生じていたことが窺える。そこでまず、調査地周辺での古環境の変遷を見ると、縄文時代前



第12図　門真西地区（その2）　調査地位置図（S=1/4,000：1/100）

期前半～縄文時代中期にかけては河内湾の海面下に市域が位置していた「河内湾」の時代から始まる。縄文時代晩期～弥生時代前期前半頃になると、湾内への海水の流入が減少する海退がみられ、その結果、調査地周辺の淡水化が進み「河内潟」の時代になる。その後、弥生時代後期～古墳時代前期にこの周辺は、大阪湾から海水が流入しなくなり、汽水～淡水域へと変化し、淡水湖である河内湖が形成されるに至ったことが近年の地質学・考古学的な調査によって明らかにされつつある。

中世になると、「八箇所」と呼ばれる荘園が形成され、のちには豊臣秀吉が河内を直轄し、大正時代以降の三ツ島一帯では、盛んに蓮根栽培がおこなわれている。このように古くから周辺地域では、河内湖に河成堆積物が厚く堆積した後に湿地帯（陸化）となった様相を残し、淀川や古川とつながる用水路を交通手段として使用するなど、水との関わりが深い土地柄であったことが窺える。

近年の発掘調査成果では、調査地周辺の三ツ島遺跡でくり船が見つかり、中世から現代の遺物が出土した蓮根畑耕作粘土や干潟堆積層が確認されている。また、三ツ島西遺跡では、近世の瓦生産に伴う粘土採掘坑や縄文晩期の土器片が出土し、調査地付近に同時期の遺跡の存在を示す資料が得られている。しかし、調査地周辺においては、周知の遺跡はもとより発掘調査が実施された地点は非常に少なく、考古学的なアプローチや歴史を把握するデータの蓄積が不足している地域でもある。

≪参考文献≫
門真市史編纂委員会　1988　『門真市史　第一巻』門真市
門真市史編纂委員会　1992　『門真市史　第二巻』門真市
宮地良典・田結庄良昭・寒川旭　2001　『大阪東北部地域の地質』地域地質研究報告　地質調査書

3．調査成果（第14図）

調査では、G.Lから1.0m付近まで盛土を機械掘削した後、鋼矢板を打設し、北側と東側に土層観察用の断面を残しながら約T.P.-5.0mまで人力掘削を実施した。検出した面は第1～9面あり、第1～29層に分層した。以下、各層の概要を上から順に述べる。

第1～4層

約50～80cmの堆積が見られる第1～4層について概観すると、第1・4層は灰色の粘土層であり、第4層と同下層の第5層が攪拌することから、蓮根畑の耕作土である可能性が高い。それに対して、第2・3層は、中砂を含むオリーブ黒色のシルト層であり、それぞれ第1層と4層の間に薄く堆積することから、耕作地を作るための整地土の役割を果たした層と考えられ、最低でも2時期にわたって畑の利用があったと思われる。また、部分的に工場建設時の攪乱が見られる第1層の粘土層から、近世～中世の瓦や瓦器・土師器の小片などの出土が見られることから、これらの蓮根畑は、近世以降に営まれたと思われる。

第5・6層

T.P.－0.4～－1.0m付近で検出した。第5層は黒色有機質粘土層で植物遺体とスミを多く含み、直上層である第4層との攪拌が顕著に見られる。また第5層上面である第1面から落込み1を検出したが、北半が調査区外に及ぶことや、落込み1の埋土である第6層からの遺物が確認できなかったことから、落込み1の性格・時期の確定はできなかった。

なお、第5層で見られる黒色有機質粘土層は、河内平野の低地部において縄文時代後半から古墳時代までの間に、長期間地表面であった時期に形成され、特に河内平野でも早く陸化した場所では、淡水堆

積に覆われる機会が多くて複数層に及ぶ黒色有機質粘土層の形成が見られる。

しかしながら、調査地周辺は、河内平野の中でも最後まで水域として残った地域であり、洪水堆積層の累積が少ない地域である。そのため、本調査区でも黒色有機質粘土層は１層しか検出されていない。また検出された黒色有機質粘土層が、近世以降の耕土上面から１ｍほどの深さしかなく、さらに上層に後世の攪乱で喪失した黒色有機質粘土層が存在した可能性も考えられる。

この黒色有機質粘土がいつから形成をはじめ、いつまで継続したかについては、遺物の出土もなく、今のところ判断の材料がない。

第７～15層

T.P.－1.0m前後付近で約40cmの堆積が見られる第７～15層は、帯状に植物遺体とスミを多く含む。

第13図　門真西地区（その２）　周辺の主要遺跡分布及び既往の調査地位置図
（国土地理院1/25,000地形図を縮小して改変）

また土層断面でラミナが見られることから、洪水堆積などによる水の流れから形成されたと思われる。ここでは第7層除去面を第2面として精査したが、遺構は検出されなかった。

第16層

東側土層断面で確認できた第16層は、第15層の直下層であるが、第7～15層とは異なり植物遺体含有量が比較的少ない。第16層は、北側土層断面において堆積が確認できず、調査区内で堆積状況が異なる。このことから第16・17層上面を第3面として検出した。しかし耕作土に相当すると思われる第16層からは、足跡など水田の存在を明確にできる遺構・遺物は検出されなかった。

第17～19層

第17～19層は、第7～16層と比較して、植物遺体含有量は少なく、中砂～微砂を多く含む比較的粒径の粗いシルトが、T.P.－0.9mの付近から下に約50cmある盛り上がりを形成する。また第17層と上層の境界で水の流れの影響と思われる攪拌が見られる。調査区東および北断面の観察から、北東隅を頂点に第17～19層が盛りあがっており、その影響が第7～16層に及んでいる。この盛りあがりは、自然堤防形成に伴うものと考えられる。ただ、調査面積が狭小のため判断はしにくいが、水田畦畔の可能性もわずかながらある。

第20－1・20－2層

T.P.－1.4～－2.2m付近で、約1mに及ぶ堆積が見られる第20－1・20－2層はほぼ同時期の堆積であり、上層に粒径の粗い中砂が目立つことから洪水による堆積であると考えられる。また水際に生息していたと思われる植物の根が多量に見られることから、当時、岸辺に位置していたと推測できる。

第21層～23層

約30cmの堆積が見られる第21～23層は、植物遺体を帯状に多く含む層であることから、数回にわたって堆積を繰り返していることが分かる。しかし第23層上面を第4面として精査したが、人為的な遺構は検出されなかった。

第24層

T.P.－2.5～－2.7m付近で、約20cmの堆積が見られる第24層は、緑灰色の砂層で中砂を多く含み、ラミナが見られることから、大規模な洪水などによる堆積と考えられる。上層を第5面として精査したところ、巣穴等の生物攪乱が検出された。

第25～29層

T.P.－2.8m付近から認められる第25～29層は、2.5m以上の堆積が見られ、生物攪乱の痕跡が顕著に見られる。しかし層ごとに若干の差異が見られるので、以下、各層について貝化石の採取状況や貝・カニの巣穴の検出状況を踏まえて概観したい（第2表）。第25層は砂とシルトの互層やラミナが見られるが、直上層の第24層とは異なり粒径の小さいシルトが目立つ。また第24層から続く巣穴も検出された。第26－1層からは干潟帯に生息するマガキやハイガイなど大型種の二枚貝が見られ、続く第26－2層からも同様にハイガイ（最大長7cm）などの二枚貝を採取した。また、第26－2層の下部で山地に分布するブナ科（広葉樹）の自然木が検出された。当時の植物環境の様相から周辺でのブナ科の生育は考えられないので、洪水等によって流されてきたものであると考えられる。第27層では最も貝化石の種類や量が多く、カニの鉗脚部も採取した。また巣穴などの生物攪乱の痕跡も顕著に見られた。続く第28層は、上層の第25～26層では貝化石中の二枚貝の占める割合が多いのに対して、二枚貝より巻貝の占める割合が高くなる傾向がある。同層中では、貝のカルシウム化が特に激しい。また最下層の第29層で

は、小型の巣穴が最も目立って見られる。採取された貝化石は、巻貝が多く、小型種のものが多い。

第25～29層間で第6～9面を精査したところ、巣穴等の生物攪乱の痕跡が検出された。この層間での傾向を見ると、第25～29層内で検出された貝化石は、上層で比較的大型種のものが多く検出され、下層になるほど小型になり、二枚貝よりも巻貝の割合が高くなる。また全ての層で巣穴を確認できたが、下層になるほど顕著に見られた。これら各層は干潟堆積層である。

4．まとめ

今回の調査区では、第1層出土の遺物と第1面で検出した遺構の落込み1以外は、確認できなかった。その第1面検出の落込み1であるが、遺構の全容が調査区内に入っておらず、遺物も出土しなかったこともあって時期を特定できず、性格不明としか言えない。しかしながら、自然堆積層が顕著に見られることから古環境の復原や変遷などが推定できる資料を多く得ることができた。以下前述した調査成果や、後述する遺構面である可能性の高い面を精査した結果をふまえて考察する。

まず第2面は、第7層を除去した段階で面の傾斜が観察されたため精査を行ったものであるが、傾斜は第3面の影響と判明したため、遺構面ではないことは明らかである。その第3面であるが、調査区北東部に盛り上がりを確認し、2通りの堆積状況が推測できた。1つ目として、前述した調査成果より、第7～15層は流水による堆積の可能性が考えられることや、高まりを形成する第17～19層が、シルトの内でも粒径がやや粗いことから、自然堤防構成層の可能性が高いことがあげられる。自然堤防であれば、北西から南東方向に延びる自然堤防の南西側の最縁部にあたる。ただ、調査範囲が狭小なため判断材料に乏しい。一方、標高等のデータから推定すると、この微高地が大畦畔の一部である可能性も残している。大畦畔となると、第5層を河内平野黒色有機質粘土の範疇と考えれば、古墳時代以前という年代観を与えることができる。調査地周辺が、水域から脱して黒色有機質粘土の形成条件を備えた時期は不明であるが、常識的には弥生から古墳時代に属するものであろう。しかしながら、大畦畔であれば水田面と考えられる第16層上面で足跡が確認できず、否定的な傍面も強い。今回設定した調査区は、古川とつながる上八箇荘水路の南側に平行して流れる水路の南側に位置するが、水路が正方位の緯横に流れる現在の土地利用とは一致しない。また、第5層から遺物の出土がなかったことや、他に黒色有機質粘土層が確認されなかったことなど不明な点が多いため、今回の調査結果からは層序の対応関係を明らかにすることはできず、一概に畦畔であるとは言えない。

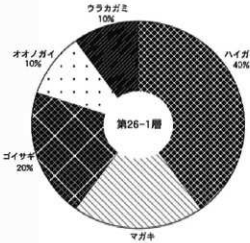
以上2通りの堆積状況が推定できるが、今回の調査は調査範囲が狭く限られており、自然堤防状の高まりをトレンチが斜め方向に切っているとも推測できる。また出土遺物による時期の確定もできなかったので、一概には自然堤防や大畦畔のどちらとも断定できなかった。

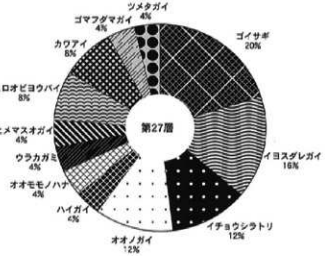
最後に古環境の復原で「鍵層」となる干潟堆積層について考えたい。干潟堆積層は、前述した貝化石の採集成果や、同調査期間に行われた門真西地区（北島地区、北巣本・宮前地区）で、同じ浜水堆積砂層が確認され、3調査区の砂層直下からは、動物の足跡などが検出された。以上のことから、当調査区の第25～27層は、干潟堆積層に相当すると考えられ、おそらく第28・29層も対応すると思われる。しかし、自然堆積層から採集された貝化石などは他地域から流されてきた可能性もあることから、干潟堆積層の範囲確定基準にするには不安定な資料である。他の調査地点も合わせ、珪藻分析による調査や貝の^{14}C年代測定により、より確かな古環境復原が期待できるであろう。

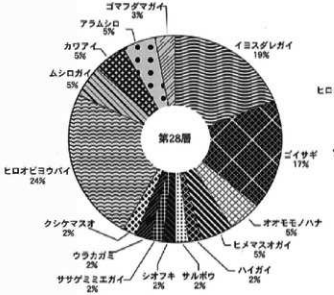
（田中・河村）

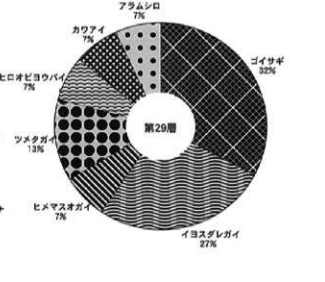
	和名	第26－1層		第26－2層		第27層		第28層		第29層		側溝		合計	
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
二枚貝	マガキ	2	1											2	1
	ハイガイ	4	4	1	1	1	1	1						7	6
	サルボウ								1						1
	シオフキ								1						1
	イボキサゴ	1	2			2	5	7	6	3	5(1		3	13	21(1
	オオノガイ	1	1			3							(2	4	1(2
	ウラカガミ	1				1	1(3		1(1		(2			2	2(6
	クシケマスオ								1	1				1	1
	イヨスダレガイ					4	1	7	8(1	2	4(3	2		15	13(4
	イチョウシラトリ					3	2						1	3	3
	オオモモノハナ					1	1	2						3	1
	ヒメマスオガイ					1	1	1	2		1			2	4
	ササゲミミエガイ							1						1	
	小計	17		2		28(3		39(2		16(6		6(2		108(13	
巻貝	カワアイ					2		2		1				5	
	アラムシロ							2		1				3	
	ゴマフダマ					1		1						2	
	ムシロガイ							2						2	
	ツメタガイ					1				2				3	
	ヒロオビヨウバイ					2		10		1				13	
	アダムスタマガイ											1		1	
	小計					6		17		5		1		29	
	合計	17		2		34(3		56(2		21(6		7(2		137(13	

注）Lは二枚貝の左側、Rは右側を示す。（数字　はLRの判別不可能

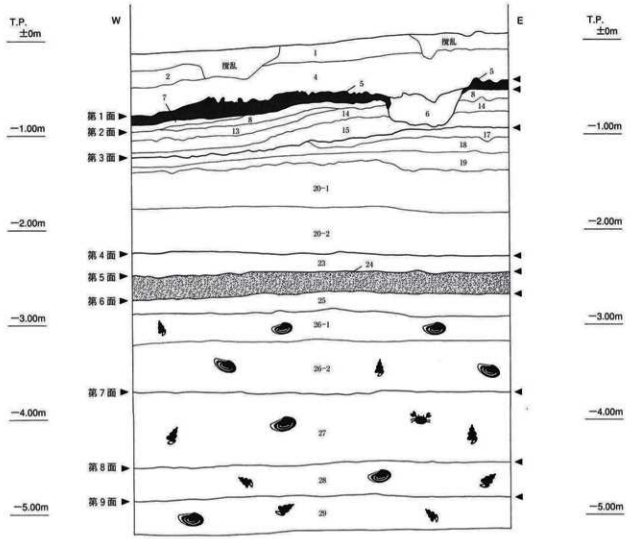




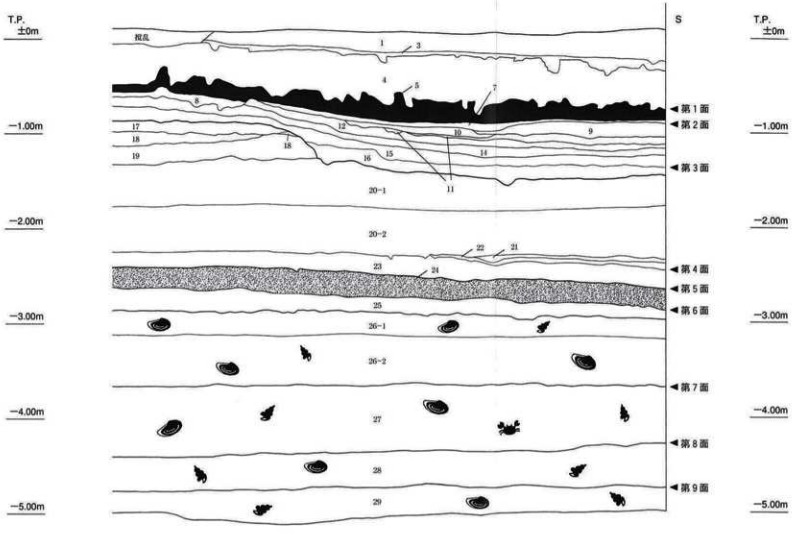




第2表　門真西地区（その2）　層位別貝化石分類表及びその比率（%）



北側土層断面図



東側土層断面図

1. 5Y3/1 暗緑灰色粘土　中砂・微砂　上部に中砂多く含む
2. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト　中砂多く含む
3. 10Y3/1 オリーブ黒色シルト　微砂多く含む　植物遺体多く含む
4. 10Y5/1 灰色粘土　中砂（5をY層に巻き上げる）
5. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土　植物遺体・スミ多く含む（4をブロック状に含む）
6. 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト　中砂多く含む（5をブロック状に含む）
7. 2.5Y5/1 黄灰色シルト　微砂多く含む　スミ多く含む
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　微砂多く含む　植物遺体多く含む
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　微砂多く含む　スミ多く含む
10. 10YR4/4 褐色シルト　中砂多く含む　植物遺体・スミ多く含む
11. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　中砂多く含む　スミ多く含む
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　微砂多く含む　植物遺体・スミ多く含む
13. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト　微砂多く含む　植物遺体・スミ多く含む
14. 5Y4/4 暗オリーブ色シルト　微砂多く含む　植物遺体多く含む
15. 10Y5/1 灰色シルト　中砂〜微砂多く含む　植物遺体多く含む
16. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　中砂〜微砂多く含む　植物遺体多く含む　中砂帯状に含む
17. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト　微砂多く含む　植物遺体・スミ多く含む
18. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　微砂多く含む　植物遺体・スミ多く含む

7.5Y5/2 灰褐色シルト　中砂〜微砂多く含む　植物遺体含む
5GY5/1 オリーブ灰色シルト　中砂多く含む　植物遺体多く含む
〃　〃　中砂〜微砂多く含む　〃
5G6/1 緑灰色シルト　細砂多く含む　植物遺体帯状に含む
5G5/1 緑灰色シルト　中砂〜細砂多く含む　植物遺体帯状に含む
5G3/2 灰オリーブシルト　細砂多く含む　木片含む
10GY5/1 緑灰色砂質　中砂多く含む　縦に底穴の痕跡あり　若干のラミナ見られる
2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　中砂およびシルトが帯状に混在　ラミナ見られる
5GY5/1 暗オリーブ灰色シルト　中砂〜細砂多く含む　植物遺体含む
〃　〃　細砂多く含む　〃　Ca 塊含む　貝化石含む
5GY5/1 オリーブ灰色シルト　上部に中砂・下部に細砂含む　植物遺体・木片少量含む
貝化石・巣穴多く含む（帯2層に連なる巣穴が見られる）
2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト　細砂多く含む　植物遺体少量含む　貝化石・巣穴含む
10Y5/1 灰色シルト（やや粘質）　細砂〜微砂多く含む　貝化石含む

二枚貝
巻き貝
カニ
砂層

0　2m

第14図　門真西地区（その2）北・東側土層断面図（S＝1／40）

３．門真西遺跡（その３）

１．調査に至る経緯と調査方法（第15図）

本調査は一般国道１号バイパス（大阪北道路）及び第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財の確認調査である。調査地は三ッ島遺跡、三ッ島北遺跡に隣接する門真市北島浅先に所在する。調査地周辺の路線内では、平成６年度の三ッ島西遺跡の調査を嚆矢として、平成８年度には三ッ島地区、平成10年度には上馬伏－横地地区間、昨年度は北巣本町－北島地区間と三ッ島地区の２箇所で確認調査が実施されている。今回の調査地は、昨年度に実施した２箇所の調査地の中間地点にあたる。

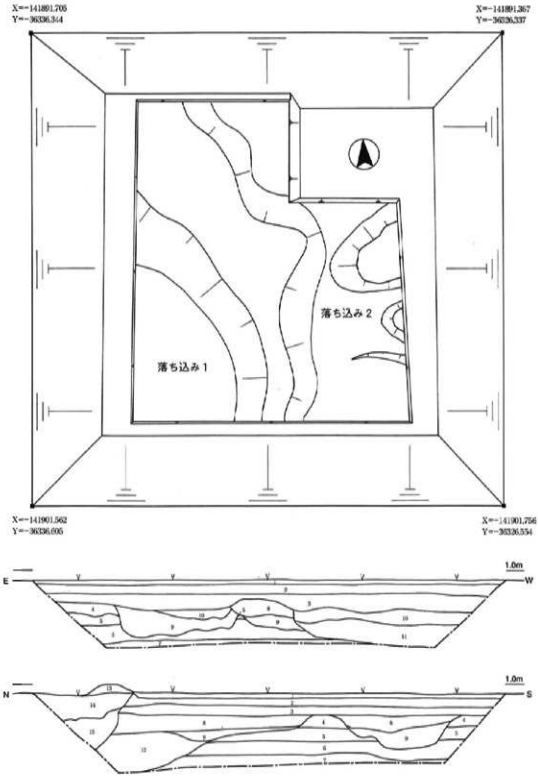
調査は10×10mのトレンチを設定し、全て人力により掘削した。法面を１：１の勾配で設け、GL.－1.6mの砂層まで掘削したが、以下は湧水による崩壊の恐れがあるため、掘削不可能と判断し中止した。最終調査面積は53m²となった。現地調査期間は平成14年11月11日から同25日までである。

２．位置と周辺環境（第13図）

調査地は三ツ島遺跡の北、T.P.0.8mという低地に位置する。縄文時代前期から中期にかけて、この周辺一帯は縄文海進の影響で河内湾の水面下にあったが、その後干潟、湖、池へと変遷を遂げ、次第に陸地と化していく。

門真市内における陸地化の始まりは、淀川左岸の自然堤防上に位置する西三荘遺跡で見ることができる。出土した縄文時代後期の土器は表面の磨耗がほとんどなく、周辺に当時の遺跡が存在していたことを示している。これは人間の活動が可能である季節的な陸地が出現していたことを示唆するものである。その後、河内湾は縄文晩期から弥生時代にかけて、海面降下のため河内湖と呼ばれる干潟となり、古墳時代には海水の流入がなくなり汽水潟、淡水湖となる。湖岸線はかつての河内湾から比べればかなり後退し、門真市北部地域では淀川や古川の自然堤防などにより陸地化が進む。３個の銅鐸が出土した大和田遺跡、弥生時代前期・中期の土器や中世の掘立柱建物の柱穴などが発見された古川遺跡、５世紀後半から６世紀にかけての円墳が検出された普賢寺遺跡、伝茨田の堤の護岸施設かと推測される室町時代の木組列が検出された宮野遺跡など、早くから陸地化した地域を中心に遺跡の発見が集中している。

第15図　門真西地区（その３）　調査地位置図



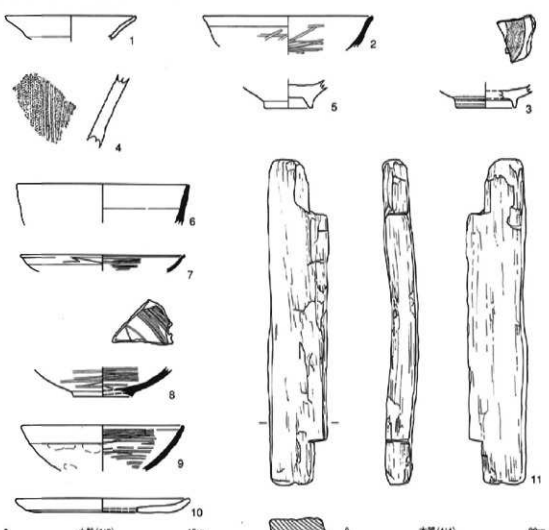
1. 耕土
2. 10YR5/6黄褐色斑多く混じる2.5Y5/1黄灰色粘質土（床土）
3. 2.5Y5/1黄灰色粘質土
4. 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土わずかに含む5PB2/1青黒色粘土ブロック
5. 5Y6/1灰色粘土（植物遺体多く含む）
6. 10Y6/1灰色細砂わずかに含む5Y4/1灰色粘土（植物遺体多く含む）
7. 5Y4/1灰色粘土含む10Y6/1灰色細砂（植物遺体多く含む）
8. 5P5/1暗紫灰色粘質土
9. 5P5/2青黒色粘土ブロックと5Y6/1灰色粘土ブロックの混合（比率1：1）
10. 10Y4/1灰色粘質土
11. 2.5Y4/1黄灰色粘土（湿色化した植物遺体多く含む）
12. 5P5/2青黒色粘土ブロック土わずかに含む7.5Y6/1灰色粘土
13. 2.5Y6/2にぶい黄色シルト
14. 7.5Y4/1灰色粘質土（レンコン灯）
15. 5P5/4暗青灰色粘土

第16図　門真西地区（その3）　平・断面図

一方、南部地域では、全長17mに及ぶ巨大なくり舟の発見で話題を呼んだ三ツ島遺跡や、縄文時代晩期の土器が出土した三ッ島西遺跡での調査が行なわれたが、歴史的な様相は明確にされていない。

なお、河内湖が湖から池へ、池から陸へと変遷していった様子は『枕草子』をはじめ、いくつかの史料から窺うことができる。まず、『枕草子』や『千首』には、河内湖が「勿入の澤」と呼ばれる池沼であったことが記されている。この池沼の所々には小島が出来、家が数軒存在した様子は、慶長十年（1605年）の『往古写書』に先祖の言い伝えとして記録に残る。ルイス・フロイスの『日本史』では長さ4・5里の池として深野池の存在が、また、寛文二年（1662年）の『河内国絵図』と後に貼付された紙片には「深野池」（大東市）や「新開池」（東大阪市）の二つの池が存在したこと、宝永二年（1705年）から享保九年（1724年）にかけて、この両池が開拓され新田となったことが示されている。

河内湖が池へと変わっていく過程で、古川左岸には村々の総称である「八箇所」という地域名称が現れる。この名称は応永十五年（1408年）の『斯波淵種寄進状』が初見で、明応二年（1493年）の『北野社家日記』にも「八ヶ所」と見え、周囲の池を開拓していたことであろう。近世以降、この「八箇所」を南北二つに分け、北半分を「上四ヶ」、南半分を「下四ヶ」と呼び区別されることもあった。当調査地が位置している「北島」は「上四ヶ」の一つである大和田庄に属し、元和三年（1617年）の「検地帳」表紙にその名が見られる。



第17図　門真西地区（その3）　出土遺物実測図

今日、この北島周辺では、『延喜式』にも貢進物としての記録が残る蓮根の栽培が盛んである。上八箇荘水路などの用水路も発達し、近年までそれを運送手段として、肥料の搬入、農作物の出荷などを行なっていた。河内湖が姿を消したとはいえ、蓮根畑の深田や水路網など、水とのかかわりが深い地域といえる。

＜参考・引用文献＞
門真町史編纂委員会　1962　『門真町誌』
門真市史編纂委員会　1988　『門真市史』第一巻
門真市史編纂委員会　1992　『門真市史』第二巻
門真市教育委員会　1992　『門真市循口遺跡発掘調査概要』
門真市教育委員会・守口市教育委員会　1993　『西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要』
門真市教育委員会　2000　『普賢寺古墳』

3．調査成果（第16・17図）

現地表面はT.P.0.8mを測り、以下には現代表土（1層）と灰土（2層）が合わせて約30cm、黄灰色粘質土（3層）が最大で約40cm、オリーブ灰色粘土をわずかに含む青黒色粘土ブロック土（4層）が約25cm、灰色砂土層（5・6層）が約60cm堆積する。それよりも下層は、灰色粘土を含む灰色細砂層（7層）となるが、湧水が著しく厚みを確認することは出来なかった。5層から7層は植物遺体を多く含み、水平に堆積する。河内湾が徐々に縮小し、陸地化していく様子を示すものである。

4層上面で溝状の落ち込みを2条（落ち込み1・2）検出した。しかし、4層はトレンチ南東の一部でのみの検出であるため、実際の検出面は5層上面となった。

落ち込み1はトレンチのほぼ中央から東に傾斜する不定形なもので、深さはトレンチ北東隅で約1.3mを測る。その最下層は4層の青黒色粘土ブロックが混入する灰色粘土（12層）、中層は青黒色粘土ブロックと灰色粘土ブロックの混合層（9層）、上層は暗紫灰色粘質土（8層）である。

落ち込み2はトレンチ南西部で検出した。深さは約0.8mを測る。断面観察によって、落ち込み1を切ること、また一度掘り直しが行なわれていることが判明する。ただし掘り直し以前の落ち込み埋土は、落ち込み1の埋土と酷似しており、両者がそれほど時期を隔てたものではなかったことが窺える。掘り直し後の落ち込みには、上層に灰色粘質土（10層）、下層に黄灰色粘土（11層）が堆積する。共に植物遺体を多く含む。

調査区は、嘗て蓮根等の運搬に多用された用水路の際に位置しており、落ち込みは水路に取り付く舟着き場であったとも考えられるが、詳細は明らかに出来なかった。

1・2層からは近世以降の陶磁器に混じって瓦器椀や土師器皿などの小片が、3層からは瓦器椀片（12）が出土した。落ち込み1の上層からは奈良時代の須恵器坏片（6）、12世紀中頃から13世紀にかけての瓦器椀（7～9）、土師器皿（10）が、同中層からは木製品（11）が出土した。（11）は長さ34.7cm、幅6.2cm、厚さ2.7cmで、両端の片隅を切り欠く。用途は不明。なお、7層から木片が一点出土している。この木片の放射性炭素による年代測定分析によって、当調査地点における陸地化の年代が約5,700年程前であったことが判明した（第3章第2節6）。　（伊藤・植村）

4．既往の調査地域・三ツ島西遺跡

1．調査の方法（第18図）

北・中河内地方では、縄文時代前期の海進によって生駒山麓まで大阪湾海岸線が入り込み、河内湾、次いで河内湖を形成した。その後は陸化が進み、近世期にまで痕跡を留めたのが門真市に隣接する大東市の深野池、東大阪市の新開渕といわれる。地下鉄線建設予定地[四]は、門真市三ツ島地先の、主要地方道大阪中央環状線を東に越えた地点から門真南駅に至る約300mの区間である。当該地の東には、昭和37年8月に工場建設予定地から巨大なくり舟が出土した三ツ島遺跡があり、今回調査では、これらに関連する遺構の検出が期待された。

調査にあたり、掘削深度が5.0mの調査坑を2カ所設置した。調査坑は安全対策のため中位に犬走りを設け、法部は1/1勾配とし、上面の一辺13m、下面の一辺を2mとした（第18図）。

2．調査結果（第19～21図）

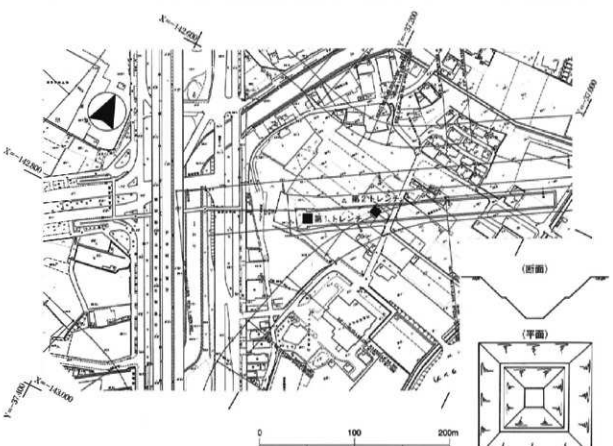
第1トレンチ

（1）層序

第19・21図の通りである。

（2）遺構・遺物・所属時期

遺構は検出できなかった。第3層より器種不明土師器小片5点、第4層ブロック土中より瓦器小片1



第18図　三ツ島西遺跡　トレンチ位置およびトレンチ平面・断面模式図

点、第5層より土師小皿片1点、瓦器椀片2点、須恵器小皿片1点、弥生土器とみられる小片1点、層位不明であるが土師器皿片1点が各々検出された（第20図）。

第5層の瓦器椀小片（3）は12世紀後半、須恵器小皿（2）も同時期のものである。トレンチ内採集の土師器皿片（1）は15世紀以降のものと考えられる。他は小片のため詳細は不明である。

第2トレンチ

（1）層序

第19・21図の通りである。

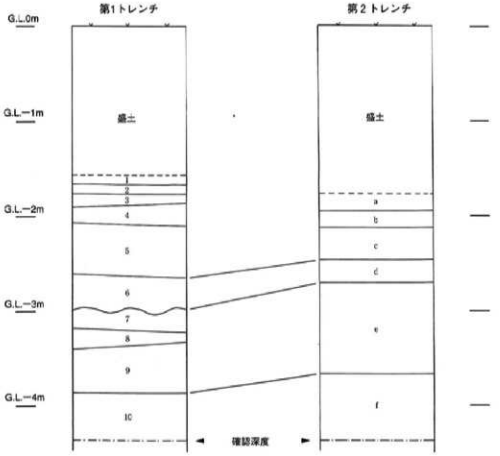
（2）遺構・遺物・所属時期

遺構、遺物ともに検出できなかった。層の堆積状況から、d層は第1トレンチ第5層に対応するものとみられる（第19図）。時期としては、12世紀後半と考えるものである。

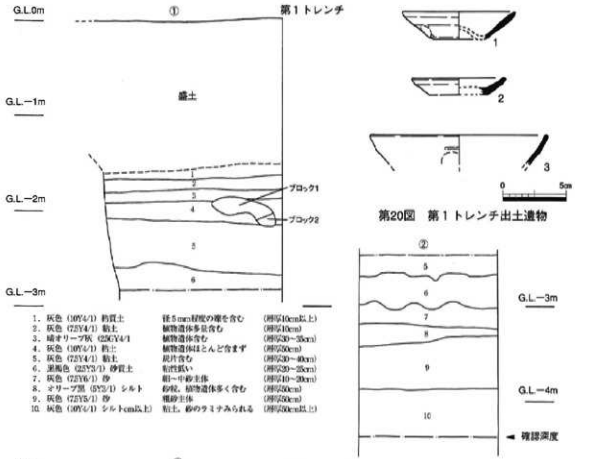
3．所見

今回調査を実施した地点は、古川左岸に位置し、古の河内湖に由来する低湿地である。近辺は中世までに土砂の堆積が進んだが、現在も標高はT.P.＋1m前後と低い。

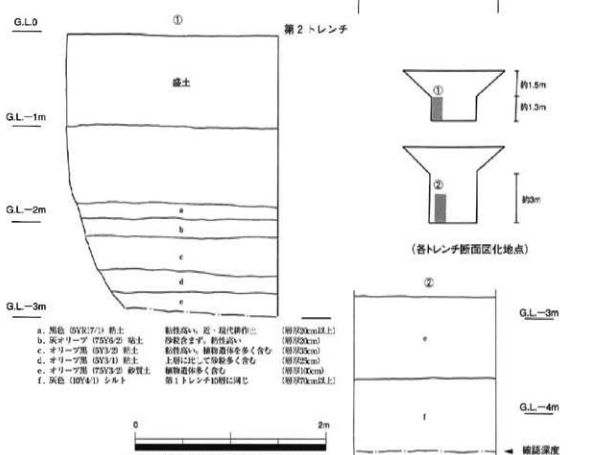
調査では遺構は検出できなかった。従前の調査でも本地域の水田化は18世紀以降と指摘されているが、この周辺の大規模な開発が、宝永元（1704）年の大和川付け替え工事後の干拓以後であるためであろう。遺物は第1トレンチで土器片12点が出土した。年代が特定できるのは第5層の瓦器、須恵器で12世紀後半と考えられる。他の多くは中～近世と思われるが、いずれも小片で量も限られており、



第19図　三ツ島西遺跡　土層断面柱状図



第20図　第１トレンチ出土遺物



※ 但し、掘削深度は現況面を任意の0（=GL.0）として、以下を測定した。

第21図　三ツ島西遺跡　第１・２トレンチ断面図

各層の年代を確定できるものではなかった。第1トレンチ第6層以下、第2トレンチe層以下は、G.L－4.4mまでしか確認できなかったが、砂とシルトの互層が続くものと推定できる。第5層の年代から考えて、平安時代以前の河内潟の状況を示していると言える。第10層にはラミナの入り込みが見られることから、やや水流はあったらしいが、おおむね潮底と考えられる。従って、顕著な遺構が検出される可能性は低い。（地村邦夫）

（註）平成6年5月15日付、大阪市交通局から大阪市教育委員会に対し、大阪市営地下鉄第7号線（現：長堀鶴見緑地線）鶴見緑地～門真南間建設に先立つ埋蔵文化財調査の依頼があった（大公建路120号）。これを受け、平成6年8月4日～8日にかけ、財団法人　大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査を実施した。

第2節　讃良郡条里遺跡（その2・3）

1．位置と環境（第22・23図）

讃良郡条里遺跡について　「讃良郡条里遺跡」は、大阪府寝屋川市と四条畷市の一部にまたがる周知の遺跡である。この遺跡名称は、この地域が旧河内国讃良郡に属すること及び、正方位に近い現在の土地区画が「条里制」に基づくものであろうと推定されることから名づけられた。そのため遺跡の範囲は広大であり、東西1.3km、南北2.6kmに及ぶ（第22図）。大阪府下の条里遺構については、早くから歴史地理学者の手によって推定案が提示されており、讃良郡条里についても小字名を元に復元が試みられてきた(註1)。しかし近年では、発掘調査データの累積により、条里制施行期についての是非が問われつつある。

讃良郡条里遺跡内における確認調査は、当センターにおいて計3回（今回を含む）実施してきたが（讃良郡条里遺跡（その1・2・3））、讃良郡条里遺跡は大阪外環状線をはさんで立地しており、すでにその東側の確認調査成果については報告を行っている(註2)。確認調査（その1）では、丘陵部の裾野より2.5kmの距離にわたって5.2m×4mの小トレンチを設けたが、そのほとんどから縄文時代中期の遺物が出土した。④調査区出土の星田式深鉢片はほとんど磨滅もうけていないことから至近距離において廃棄されたものと考えられ、周辺に同時期の遺構が存在する可能性を強く示唆するものである。

また、当センターの確認調査以前にも、1989～1992年に大阪府教育委員会が遺跡内において調査を行い、古墳時代中期から中世にいたるまでの集落を確認した。この調査では、5世紀代の井戸材として転用された船材が発見され、反響を呼んだ。また、1993年の寝屋川市教育委員会による発掘調査では、古墳時代中期から後期の集落から大量の製塩土器が出土した（後述）。

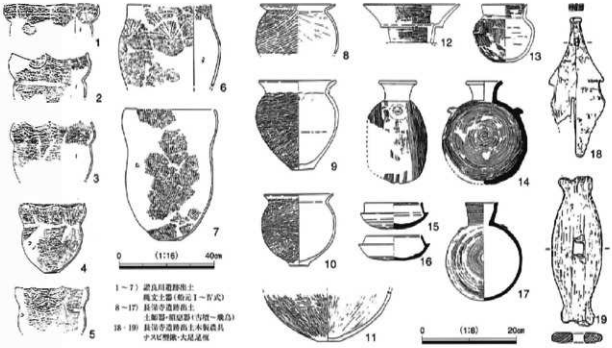
即ち、遺跡名の由来である条里遺構以外にも、多岐にわたる遺構および遺物が出土する地域であることが、現在では明らかにされつつある遺跡である。

調査地周辺の地形と景観　今回の調査対象地は、寝屋川市新家2丁目地内に含まれる。寝屋川市は淀川左岸地帯に位置し、一般に「北河内」と称される地域である。東には大阪府と奈良県を隔てる生駒山地を控え、これより派生する交野台地に連なる丘陵地から、西へむかってなだらかにひらく地形を呈する。丘陵からは、讃良川・楠根川・岡部川・清滝川などの小河川が源を発して低地へと流入し、市域の西部に沖積地を形成する。低地の旧集落は、これら河川の自然堤防上に営まれてきた。調査地に北接する新家集落（江戸時代初期に堀溝村より出郷）も、讃良川南岸の微高地上に立地する。しかし、微高地以外の土地は湿地状を呈し、水田耕作すら容易ではない場所も多くあった。このため、新家集落内には遷移培を手がける家もあったことが記録されている。戦後は住宅需要の激増から、低地を埋め立てて宅地造成が図られたため、現在では大阪市のベッドタウンとして住宅が建ち並ぶ風景が見られる。

また、この地域は、早くから淀川の水運と、大和から大阪中心部へと通ずる奈良街道（現市道堀溝中央線）を主とした陸運が確立されており、交通の要所として栄えてきた地域でもある。現在では、調査地南方の国道163号が奈良街道に代わって大阪市内へと通じ、市域のほぼ中央を横断する国道170号線（大阪外環状線）に加えて、輸送車の激しい往来が日々繰り返されている。

調査地周辺の遺跡　讃良郡条里遺跡範囲内および周辺には、条里制が関連する遺構に限らず、多岐にわたる時代および性格の遺跡が調査報告されている。

第22図　讃良郡条里遺跡（その2・3）　調査地周辺の遺跡位置図（1/50,000）



第23図　讃良郡条里遺跡（その2・3）　周辺遺跡の出土遺物

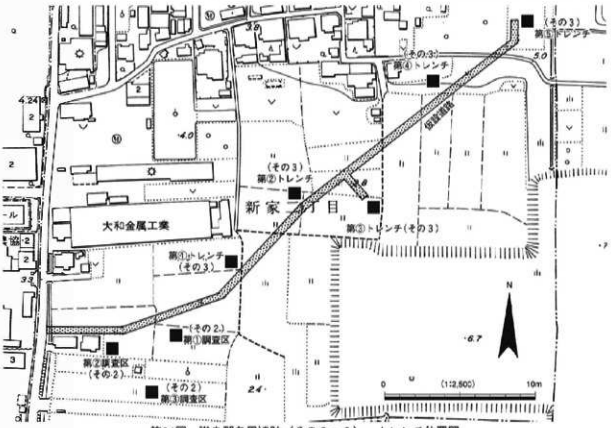
旧石器時代　交野台地の縁辺部には、旧石器時代の遺物が確認されている遺跡が多く立地する。高宮遺跡・讃良川遺跡・忍ヶ丘駅前遺跡からは、翼状剥片を加工した国府型ナイフ形石器が出土した。すべて原位置を保つものではないが、この付近が濃密な国府期遺物の分布地であることを示す資料である。

縄文時代　気温の寒暖によって汀線が大きく変動した時代である。前述の高宮遺跡では、前期に属する土坑を検出し、内部から北白川下層式や大歳山式の土器片が出土した。また、讃良川遺跡では、中期初頭～後期初頭の貯蔵穴が検出されており、船元式を主体とした土器が多量に出土した。ともに古代河内湾沿いに展開する集落遺跡として貴重な調査事例である。讃良川の南岸に位置する砂遺跡からは、縄文時代中期の船元式を中心とする土器群のほか鷹島式の五角形底部が出土し、地面に置かれたような状態での石皿、集石遺構などが検出された。また、堝期の滋賀里式深鉢の甕棺や数基の土坑墓も検出された。

昨年度、実施した讃良郡条里遺跡確認調査（その１・２）において出土した縄文土器は、中期～後期に属するものであり、鷹島式・船元Ⅰ～Ⅳ式・里木Ⅱ～Ⅲ式・星田式に分類される。讃良川遺跡との関係も含め、広範囲にわたって縄文遺跡が展開していた可能性を示す資料である。

弥生時代　弥生時代には、河内湖を眼下に控えた当地には、大規模な集落が展開された。調査地より北へ約1.4kmの地点には弥生時代前期の拠点集落である高宮八丁遺跡が位置している。ここでは縄文時代晩期の滋賀里Ⅳ式・船橋式・長原式に属する土器片が、初期の弥生土器と共伴する例が認められている。出土した弥生土器は畿内第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式を中心とするが、一部に近江・山城・播磨・東海地域の搬入土器を含んでおり、往時の広域交流を彷彿とさせる。

また2001年に調査を行った大尾遺跡では、尾根上に周溝を共有する方形周溝墓群を検出した。さらに讃良郡条里遺跡確認調査（その２）では、弥生時代前期より中期とみられる土器片が、少量ながらも



第24図　讃良郡条里遺跡〈その２・３〉　トレンチ位置図

水田耕作土内より出土している。

古墳時代　調査地より約1km隔てた地点に位置する忍丘古墳は、竪穴式石室をもつ前期古墳である。また、交野台地の裾野である太秦丘陵には、古墳中期～後期にかけて形成された太秦古墳群が広く存在する。近年史跡整備が行われた太秦高塚古墳も、この古墳群の範囲に含まれる。調査地の北方1.2km地点に位置する長保寺遺跡では、古墳時代後期の低地集落が営まれており、14棟の掘立柱建物と群集土坑墓が認められた。遺物では、初期須恵器や陶質土器が注目すべきものとして挙げられる。また、井戸枠に転用された準構造船の舳先の出土によって、古墳時代における港湾都市の存在が明らかとなった。

調査地の南方300mの近接地点に位置する郡屋北遺跡では、近年の調査において古墳時代中期（5世紀後半）の「木製輪鐙（わあぶみ）」が出土し、乗馬の使用が確認された例として報告された。さらに、朝鮮半島系の土器片が多数出土しており、生駒山麓から周辺地域にかけて起居した渡来人集団と馬の飼育に関する資料として注目されている。

古代　前述の高宮遺跡内の丘陵上に位置する高宮廃寺跡は、薬師寺式伽藍配置をもつ古代寺院である。出土した瓦から創建は白鳳時代にまで遡ると推定されているが、寺域の西側では、同時期から奈良時代まで続く集落跡が確認されている。丘陵端部では、大規模な整地跡と大形掘立柱建物跡を検出しており、当該地域に起居した有力豪族の存在を物語る。また、低地に位置する神田東後遺跡と長保寺遺跡では、平安時代から中世にわたって集落が営まれていたことが報告されている。

中世　高宮遺跡では、今年度の調査において中世の集落跡が確認された。鎌倉時代の屋敷跡や鳥帽子を副葬した土壙墓等、貴重な遺構を検出した。

以上、近年の調査事例を含めてこの地域の主な遺跡を概観した。各時代を通じ、重要な遺物を包含する地域であることを改めて認識させられる次第である。　（黒須）

註

1）　讃良郡の条里については、天坊幸彦氏が1947年に「上代遠華の歴史地理的研究」のなかで「寝屋川附近復里図」を発表したのが最初であり、つづいて寺前治一氏による研究成果と「条里制復原図」が『寝屋川市誌（1965年）』に掲載されたことで周知されるところとなった。

2）　（財）大阪府文化財センター　2001　『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、庄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区　一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター第77集

2．確認調査（その2）　調査成果

1．調査区の設定（第24図）

調査対象地は、国道1号線バイパス（大阪北道路）建設予定地内において、国道170号線（外環状線）の西方約500mの地点であり、交野台地の南端より西方に流れる讃良川が南方へ流向を変える南東岸に位置する。生駒山地より西流してきた岡部川が調査地の南方を流れており、三方を河川に囲われた後背湿地にあたる。現地盤の標高はT.P.2.8～2.6mと概ね平坦である。

調査区は6.0×4.0mのトレンチを3ヶ所設定し、西から①～③調査区としている。調査区は基本的に現地表面の土地区画に沿って、正方位に乗るように設定している。掘削深度はボーリングデータに基づき、現地盤から5.0mに設定し、鋼矢板を打設している。

2．調査成果（第25～43図）

現代の水田耕作土、床土、および客土と考えられるブロック土混じりの層をバックホーで除去した面を機械掘削終了面の第1面とし、以下、人力掘削により調査を行った。遺構面については各調査区の調査順に面番号を付し、アラビア数字で表記している。層番号は各調査区で対応する層に同一番号を付記しているが、煩雑を避けるためにローマ数字を用いている。

以下、基本層序と各調査区の遺構、遺物について解説する。

基本層序（第25～28図）

土層については、調査区相互での対応関係が把握された。したがって、基本層序（第25図）として、各対応層に同一番号を付している。以下、各層の特徴について述べてゆく。

Ⅰ層は、暗黄灰色（2.5Y5/2）～青灰色（10BG5/1）極粗砂～粗砂と若干の小礫からなり、粘質シルトがブロック状に混在している。

Ⅱ層は、灰オリーブ色（5Y5/2）粘土からなり、有機物、植物遺体を含んでいる。①・③調査区では、下部に渦を巻くように堆積する灰色（10Y6/1）極細砂混じり粘土が認められた。

Ⅲ層は、灰色（5Y5/1）粘土、Ⅳ層は、灰色（5Y4/1）粘土からなる。Ⅳ層は、やや黒みを帯びていることから、Ⅲ層との識分が可能であったが、層厚が薄く、③調査区では部分的にブロック状に散り散りになっている。Ⅲ層段階の水田耕作に伴う攪拌作用が、Ⅳ層まで影響しているものと考えられる。

Ⅴ層は、褐灰色（10YR4/1）粘質シルト～粘土からなり、植物遺体が多量に含まれている。上面にはクラックが入り、地表面として安定した時期があったことが伺える。②調査区では、上層のⅣ層からの攪拌が及んでおり、層界は不明瞭であった。

Ⅵ層は、黄灰色（2.5Y5/1）粘土からなり、植物遺体が含まれる。Ⅶ層は、灰色（7.5Y4/1）粘質シルト～粘土からなる。上部がやや軟質であるが、比較的締まった質感である。Ⅳ・Ⅶ層には1cm前後のCa塊の沈着がみられ、特にⅦ層中には多量に含まれている。②調査区は、①・③調査区と比して、含まれるCa塊が若干少ない。

Ⅷ層は、黄灰色（2.5Y4/1）粘土、Ⅸ層は、暗灰黄色（2.5Y4/2））粘質シルトからなり、ともに植物遺体を多量に含み、層中にはCa塊が沈着している。特にⅨ層の最下部には4～5cm大の大粒のCa

塊が多量に認められた。当初、両層は同一層として認識したが、①調査区において、Ⅷ・Ⅸ層の間層に暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土が存在したことから細分を試みた。②調査区では、Ⅸ層の最下部にCa塊を含まず、灰色（7.5Y5/1）粘質シルト～粘土に極細砂が若干混入する薄層が認められた。

X層は、灰色（7.5Y4/1）粘土からなり、極細砂～シルトが若干混入している。②調査区では、下部に有機物が縦方向に入るオリーブ灰色（2.5GY5/1）極細砂～粘質シルトの自然堆積層が確認された。自然堆積層の残存範囲については面的な広がりを検出しており、X層の上面がⅨ層段階の削平を受けているものの、本来、微高地として一段高くなっていたことを確認している。

XI層は、洪水に伴う氾濫堆積物であり、ラミナが明瞭にみられる。上層が灰色（10Y6/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）極細砂～粘土、中層はオリーブ灰色（2.5GY5/1）～オリーブ黒色（5Y3/2）細砂～粘質シルトや灰黄色（2.5Y6/2）～灰色（7.5Y5/1）小礫混じり極粗砂～中砂が互層をなし、上方細粒化がみられる。下層は褐灰色（10YR5/1）～オリーブ黒色（5Y3/2）粘質シルト～粘土と有機物層の互層からなる。特に最下層では、植物遺体や有機物がかなり多く含まれている。西側の①調査区で最も堆積が顕著であり、その西方に供給源となる流水域が想定される。

XⅡ層は、微高地上にあたる②調査区と低地部の①・③調査区で若干様相が異なる。まず、②調査区では、灰色（7.5Y4/1）粘質シルト～粘土から構成されており、水田部分では耕作によって攪拌された粗砂～中砂が混入していた。①・③調査区は、暗灰黄色（2.5Y5/2）極細砂～粘質シルトからなり、植物遺体を多量に含んでいた。特に③調査区では、層厚は約80cmに及び、3～4層の細分が可能であった。下半部の灰オリーブ色（5Y4/2）～黒褐色（2.5Y3/2）シルト質粘土層中には、最大径10cm程の流木や木片が多く含まれており、XⅡ層の土砂供給が始まった当初は、沼地状の堆積環境にあったと考えられる。

XⅢ層は②調査区でのみ確認された。オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土からなり、中砂～細砂が若干混入する。植物遺体・有機物を多量に含んでいる。①・③調査区では、XⅡ層下部にみられた沼地状の堆積物がこれに相当するものと考えられ、②調査区と①・③調査区との間で安定した地表面が形成されるまでに時間差があったことが伺える。

XⅣ層は洪水に伴う氾濫堆積物であり、②・③調査区において確認された。灰オリーブ色（5Y5/2）粘土と灰オリーブ色（5Y6/2）極粗砂～細砂、灰色（10Y6/1）中砂～極細砂が互層をなし、植物遺体を多く含む。②トレンチでは、下層に灰オリーブ色（5Y4/2）粘土、灰色（10Y6/1）極細砂、植物遺体・有機物を含むオリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土の細かな水平堆積層が互層をなしており、ある程度水深のある湖沼域での堆積環境を示している。また、③調査区では最深部で、XX層まで洪水の浸食が及んでいる。

XⅤ層は、XⅣ層上を覆う層厚3cm以下の明オリーブ灰色（5GY7/1）極細砂～粘質シルトであり、有機物が含まれている。XⅣ層の旧地表面が一時的に水没した際の沼沢地の堆積物と推測される。

XⅣ層は、オリーブ黒色（5Y3/2）粘土からなり、植物遺体を多量に含んでいる。①調査区では小粒のCa塊の沈着がわずかにみられた。

XⅦ層は、②調査区でのみ確認され、XⅣ層の植物遺体の含有量が減少することから認識された。2層の細分が可能であり、上層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質シルト～粘土、下層は極細砂がわずかに混入する黒色（7.5Y2/1）粘土である。

XⅧ層は、緑灰色（10GY6/1）粘土であり、層厚約2cm程度でXⅨ層上を薄く覆っている。XV

層と同様の堆積環境が考えられる。

ⅩⅨ層は、黒色（2.5Y2/1）粘質シルト～粘土である。河内平野一円で確認されている黒色バンド層に相当するものと考えられ、大阪市文化財協会の趙哲済氏の提唱する長原遺跡標準層序「NG9Ci層」、池島・福万寺遺跡の「第4黒色粘土層」、1991年の大阪府教育委員会の讃良郡条里遺跡における縄文晩期深鉢出土層等があげられる[6]。地層の形成時期については、池島・福万寺遺跡の出土遺物から、縄文時代後期後葉から弥生時代前期中葉と推定されている。

ⅩⅩ層は、灰オリーブ色（5Y5/2）粘質シルト～粘土からなり、植物遺体を多量に含んでいる。

ⅩⅪ層は、オリーブ黒色（5Y3/2）粘質シルトと黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト～粘土がブロック状に混在している。上層のⅩⅩ層堆積時の浸食によるものであるが、ⅩⅠ層自体も不安定な堆積と考えられる。

ⅩⅫ層は、洪水に伴う氾濫堆積物であり、上・下2層の細分が可能であった。上層は暗灰黄色（2.5Y4/2）～オリーブ黒色（5Y3/2）粘質シルトを主体に黄灰色（2.5Y5/1）粗砂～シルト混じり細砂と互層をなしている。下層は灰色（7.5Y6/1～N6/0）極粗砂～中砂を主体とする黒褐色（2.5Y3/2）粘質シルトとの互層であった。両層とも植物遺体、有機物をかなり多く含んでいる。①・③調査区では、間層に弱い土壌化層である灰オリーブ色（5Y4/2）粘質シルトが存在したが、流水による浸食を受け、巻き上げられた状態で観察された。

ⅩⅫ層は、細かい水平堆積の砂泥互層であり、生痕が顕著に認められた。干潟のような堆積環境が考えられ、当地が河内湾沿岸部に位置していたことを示している。上・下2層の細分が可能であり、上層は黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルトと灰オリーブ色（5Y4/2）細砂が互層をなし、下層では灰色（7.5Y4/1）極細砂と粘質シルトがより密に重なり合っている。間層に河成堆積物である暗緑灰色（7.5GY4/1）中砂～極細砂を挟み、陸域からの影響を受けやすい立地条件にあったことが伺える。

遺構

①調査区（第26・29・30図、図版14－1）

①調査区は、西地区の北西に位置する。約45cmの現代耕土・床土等を除去した後、検出されたブロック土の混入する砂礫層（Ⅰ層）の上面を第1面とした。

第2面（第29図）の南端で東西方向の正方位に則り、北側に低くなる段差（畦畔36）を確認しており、水田畦畔に相当する可能性が高い。遺物は出土していないが、層順から近・現代の時期と推定される。

第12面（第30図）では、ⅪⅠ層の洪水堆積物によって埋没した足跡列を確認している。足跡列は東西または南北方向を指向し、進行方向に規則性が認められる。方形の水田区画内を歩行した痕跡と考えられ、後述する②調査区では、対応する遺構面において、溝と水口を有する大畦畔を検出していることから、水田域が当調査区まで広がる可能性を示している。

②調査区（第27・31～38図、図版14－2～4・16－1～3）

②調査区は、西地区の南側に位置する。先行していた①・③調査区の成果から判断し、約50cmの現代耕土・床土等とⅠ層相当層まで機械掘削を行っており、Ⅱ層の上面を機械掘削終了面としている。②調査区のⅩ層以下では、他の調査区より微高地に立地し、安定して土壌形成がなされたと考えられる。水田関連の遺構を確認しており、微高地、大畦畔、畦畔、溝、落ち込み、置石を検出した。

第2面（第31図）では、東西方向の畦畔39を検出している。現地表で、調査地の南側を西へ流れている農業用水路より約22m（2反）の距離にあたっており、正方位の水田区画に乗るものである。

第8面（第32図）では、調査区の東側で南東～北西方向に自然堆積層が帯状に露出する部分を検出している。本来、微高地であった部分が後世の耕作による攪拌・削平を受けて、旧耕作土層が失われたものである。

この微高地の主軸に直交して、溝状落ち込み40が確認された。埋土は上層のⅨ層である。Ⅸ層の形成過程において掘削され、Ⅸ層上面の第7面が廃絶するまでには埋没していたものと考えられる。この溝状落ち込み40の方向軸は、第8面の微高地が第7面段階においても土地利用に影響を及ぼしていたことを示している。また、溝状落ち込み40が微高地の下場推定ラインと交差する部分で拳大の石（置石41）を検出した。この石は水田区画の目印として人為的に配置されたものと考えられる。

第9面（第34図）を構成するⅪ層は、①・③調査区では流水堆積の構造が残る。したがって、当面で検出した畦畔45は、畦畔の下部が攪拌を免れたことで擬似的に削り残されたもので、上層のⅩ層段階の水田畦畔を反映したものである。また、Ⅹ層を埋土とするピット42～44を検出している。護岸杭、あるいは、畦畔の補強材の痕跡と考えられ、水田区画に伴う施設が存在した可能性が高い。

第10面（第35図）は、Ⅺ層の砂礫層および、最下層にみられる有機物層に上面を覆われており、旧地表面の遺存状態は良好である。第10面では水口を伴う大畦畔47・48と溝49、落ち込み46を検出している。大畦畔47・48は北東～南西を軸とし、南東～北西に低くなる地形の傾斜に直交して設定されている。人為的な盛土がなされており、図中では盛土の範囲を点線で示している。大畦畔が同じする水口部分へは、南西より溝49が流れている。この水口より北西側へは一段低まっており（落ち込み46）、粘質シルト～中砂の互層が水平に堆積していた。ⅩⅡ層中より出土した遺物から弥生時代中期前半（Ⅱ様式新段階～Ⅲ様式古段階）に帰属すると考えられる。

第12面（第37図）では、南東から北西に流れる溝51を検出した。ⅩⅣ層の洪水堆積後、間もなく掘削されたものであるが、第11面段階までには廃絶・埋没したと考えられる。第11面（第36図）ではその周辺がたわんで、落ち込み50となっている。

第13面（第38図）で検出した高まり52は、断面が台形状をなし、南北方向にのび、北端がやや東側に屈曲している。下層には洪水堆積に伴うレンズ状の堆積などが認められず、湿地帯の漸移的な堆積が連続していることから、地形形成が自然の営力によるものとは判断し難い。水田畦畔の可能性もあるが、盛土や遺物などの人為的な痕跡も確認できなかった。

この高まり52と関連して、注目されるのはⅩⅦ層上層である。ⅩⅣ層下層との判別が困難であったため、ⅩⅦ層上層からなる遺構面および遺構の検出は出来なかった。掘削段階の観察とその後の断面の検討により、このⅩⅦ層上層は高まり52の下部にのみ残る層であることが確認され、層中からⅠ～Ⅱ様式と考えられる弥生土器片が出土している。

③調査区（第28・39・40図、図版15－1～4・16－4）

③調査区は、西地区の北東に位置する。約45cmの現代耕土・床土等を除去して検出されたⅠ層の上面を第1面とした。第5・6面で水田畦畔を検出している。第5面（第39図）の畦畔37は残存幅で約70cmを測っており、農道としても機能していたことが考えられる。第6面（第40図）で検出した畦畔38は、第5面段階の畦畔37と比べ、南から見て、若干西側へ方向軸を振っていることから、当面に帰属するものと判断した。両水田面は水田耕土層の下面の状況より、畦畔を境に東側が低くなって

いることが確認された。

遺物（第41～43図、図版17・18）

基本層序に基づき、出土遺物について上層より解説する。

Ⅵ層（第42図1）は、②調査区において、14～15世紀代の瓦質羽釜の他、瓦器、須恵器の細片が出土している。

Ⅷ・Ⅸ層（第42図2～12）は、②調査区を中心に10世紀代の土師器小皿、高坏脚部、5世紀末～6世紀初頃の須恵器の甕のほか、滑石加工品等が出土している。両層の出土遺物に特に時期差が認められず、土師器小皿が二層間で接合するなど、層の形成過程については今後、検討が必要である。また、Ⅸ層を埋土とする②調査区の溝状落ち込み40からは須恵器の甕が出土している（第42図12）。

Ⅹ層（第43図1・2）は、②調査区で土師器の甕が口縁部から体部にかけてほぼ一個体分が出土している。細片に破砕されており、摩耗も著しく、形状や時期の特定は困難であった。煤の付着具合等から古墳時代前期と推定される。このほか土師器の甕の頸部などが出土している。①・③調査区からも土師器片が出土したが、細片であり時期は不明である。

ⅩⅡ層に関連して、②調査区では上面で検出された落ち込み46の埋土から、弥生Ⅳ様式と考えられる高坏坏部の口縁端部片が出土している（第43図3）。また、ⅩⅡ層中からは、Ⅱ様式新段階の甕口縁部、Ⅲ様式古段階の広口壺口縁部のほか、弥生土器の細片が出土している（第43図4～10）。③調査区では流木に混じって角材、杭、用途不明の板状木製品が出土している（第41図1～3）。

ⅩⅢ、ⅩⅣ層、ⅩⅦ層上層からは、②調査区で弥生土器片が出土している。器種、時期などについては細片のため特定できなかったが、ⅩⅣ層（第43図11～13）の細片はⅡ様式段階、ⅩⅦ層（第43図14～16）の細片については褐灰色～灰オリーブ色を呈する胎土の色調からⅠ～Ⅱ様式のものと考えられる。

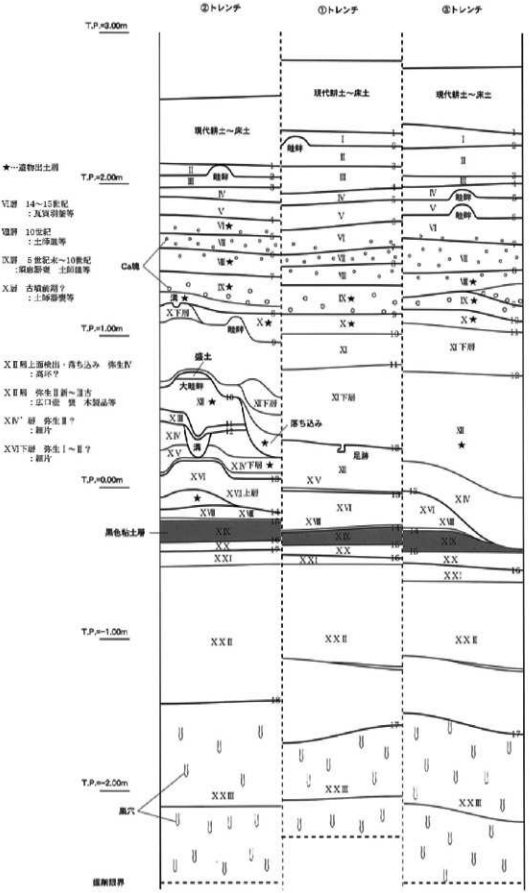
3．まとめ

調査対象地周辺は、ⅩⅩⅢ層段階には海域にあり、陸域からの河底堆積物が及ぶような、汀線に近い干潟の環境下にあった。その後、海水面の低下に伴う大量の土砂（ⅩⅩⅡ層）が流入したことで地形が上昇し、黒色粘土層（ⅩⅨ層）が形成される湿地帯として陸地化したと考えられる。以降、現代に至るまでは、河川、地下水位等の影響を受けやすい沼地～湿地帯に立地している。

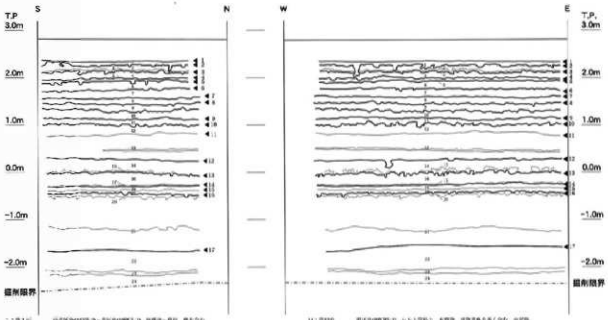
本調査において、当地に人間の痕跡が認められるのはⅩⅦ層段階であり、弥生時代Ⅰ～Ⅱ様式期と考えられる土器片が出土している。ⅩⅦ層段階には局所的な洪水砂層が南側の②調査区で認められるように、自然地形の発達が顕著となる。弥生時代中期前半、Ⅰ様式新～Ⅲ様式古段階（ⅩⅡ層）には、南東から北西方向に下降する自然地形を利用した水田跡が確認された。また、調査地の南東側には地形形成に影響を及ぼした旧河道の存在が想定される。

ⅩⅡ層を覆った洪水堆積（XI層）以降は、粘質シルト～砂土が堆積する湿地帯の環境下にあり、地形は徐々に平坦化している。しかし、基本的な地形の方向軸は、南東から北西方向に下降しており、安定した地表面の形成が始まると推定される古墳時代前期のⅩ層段階より、5世紀末～10世紀代のⅧ・Ⅸ層段階、14～15世紀代以降のⅤ・Ⅳ層段階までの水田開発にその影響が認められる。

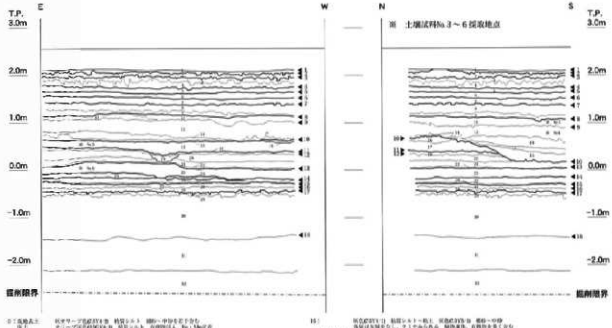
調査対象地は「条里制地割」が推定されている地域であり、正方位に乗る水田区画はⅡ・Ⅲ層の上



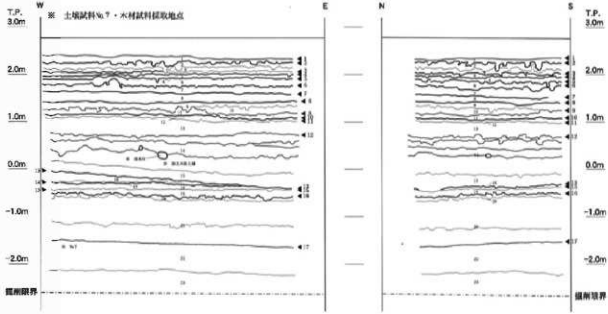
第25図　讃良郡条里遺跡（その2）　基本層序模式図



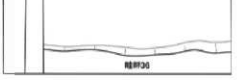
第26図　讃良郡条里遺跡（その２）　①調査区断面図



第27図　讃良郡条里遺跡（その２）　②調査区断面図

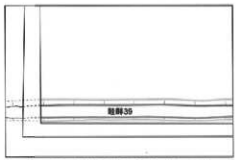


第28図　讃良郡条里遺跡（その２）　③調査区断面図

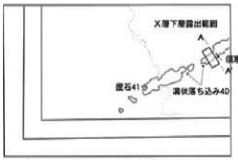


第29図　讃良郡条里遺跡（その２）
①調査区　第２面（II層上面）

第30図　讃良郡条里遺跡（その２）
①調査区　第12面（X II層上面）



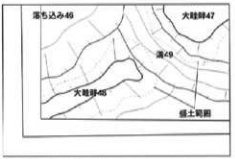
第31図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第２面（Ⅲ層上面）



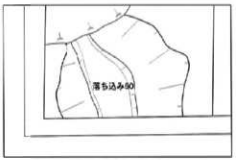
第32図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第８面（Ⅹ層上面）

第33図　讃良郡条里遺跡（その２）
溝状落ち込み断面図（S=1/20）

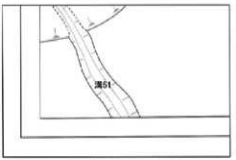
第34図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第９面（ＸⅠ層上面）



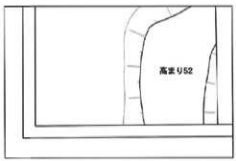
第35図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第10面（ＸⅡ層上面）



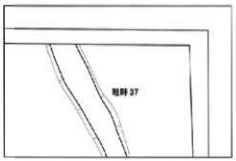
第36図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第11面（ＸⅢ層上面）



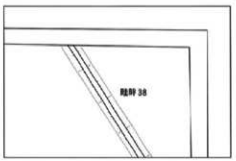
第37図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第12面（ＸⅣ層上面）



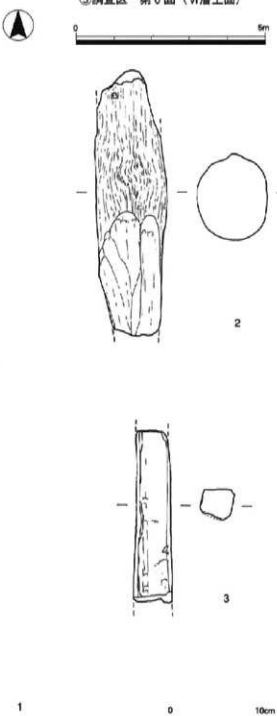
第38図　讃良郡条里遺跡（その２）
②調査区　第13面（ＸⅥ層上面）



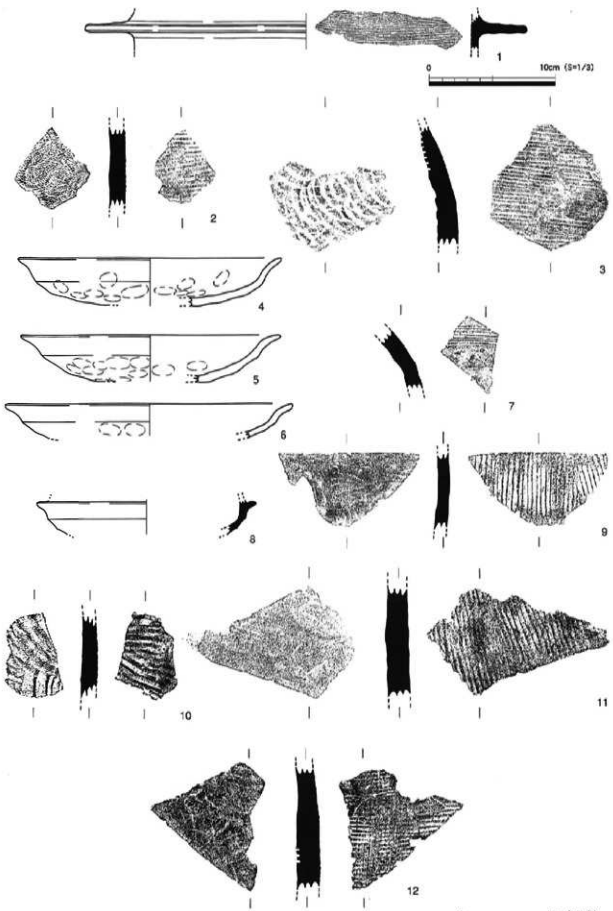
第39図　諸良郡条里遺跡（その２）
③調査区　第５面（Ⅴ層上面）



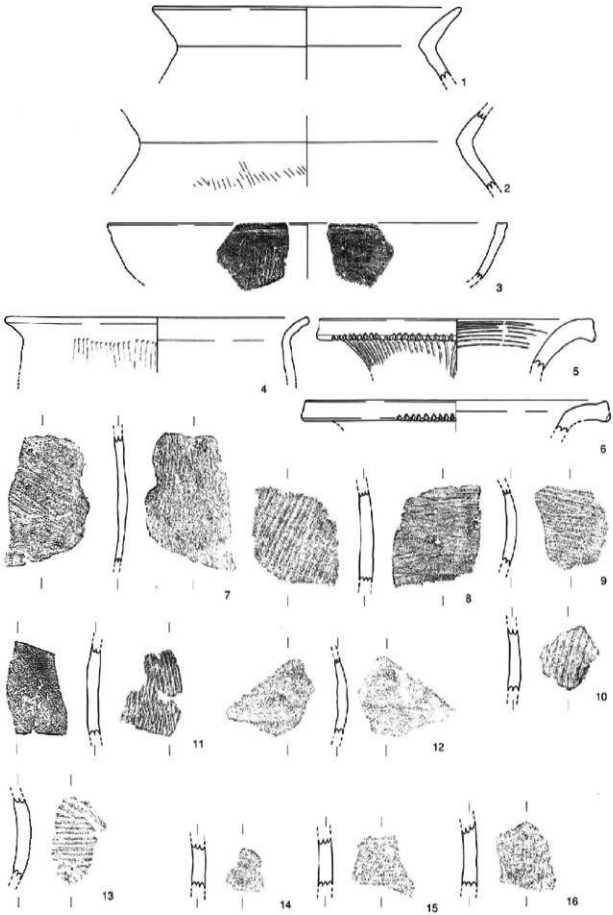
第40図　諸良郡条里遺跡（その２）
③調査区　第６面（Ⅵ層上面）



第41図　諸良郡条里遺跡（その２）　③調査区　ＸⅡ層相当層出土木製品



第42図　讃良郡条里遺跡（その2）　Ⅵ～Ⅸ層出土遺物



第43図　諸良郡条里遺跡（その2）　X～XVII層上層出土遺物

面において検出された。直下のIV層の遺存状態が悪いことから、Ⅲ層段階に当地に大規模な造成がなされた可能性がある。正方位を指向する土地区画の施行時期については、Ⅱ・Ⅲ層関連の遺物が未出土であり、時期を特定するには至らなかった。しかし、VI層の上面で地形の軸に則った水田畦畔が検出され、層中に包含されていた瓦質羽釜より得られた年代観より、中世末以降の所産であることは明らかである。土地条件がかなり軟弱な地盤であったことから、古代の条里制施行時には、その開発対象地に含まれなかった可能性が高い。Ⅱ・Ⅲ層段階は地形的に西側の標高が高くなることから水源となる河川は西方に想定される。したがって、正方位地割の施行に伴い、水利系統についても大規模な改変が行われた可能性があり、また、当地に影響を及ぼす河川の変遷についても今後の成果が期待される。（清水）

3．確認調査（その3）　調査成果

1．調査区の設定（第24図）

確認調査（その3）では、前回の確認調査同様、6.0m×4.0m＝24.0㎡の規模をもつトレンチを5箇所に設置した（第24図参照）。調査区は基本的に現地表面の土地区画に沿い、一辺を正方位にむけて計画した。

調査に先立ち、現地盤が軟弱なため、重機搬入を行うための仮設道路を敷設した。調査区には、すべて長さ12mの鋼矢板を各60本打設し、その後重機および人力によって掘削をおこなった。掘削深度はボーリングデータに基づき、現地表面より5mに設定した。

尚、5箇所の調査区のうち、第⑤トレンチについては、住宅跡地にあたり、地表面以下約2.5mに至るコンクリートガラを多く含む盛土が認められた。即ち鋼矢板の圧入が非常に困難な状況であったため、はじめに重機による機械掘削を行い、盛土を除去した段階で矢板を設置して調査を行うこととした。

遺構面および包含層の名称は、上位より付番した。機械掘削終了面を第1面とし、第1面を上面とする土層を第1層とした。層番号は、はじめに調査を着手した第①トレンチを基本として対応させ、同一層番号を付するように考慮した。しかし、調査区東側の第④・⑤トレンチにおいては、これ以外のトレンチとは堆積状況が大きく異なるため、独自の層番号を付した。

2．基本層序（第44図）

今回の調査では、各トレンチを通じて同一とみられる層位があり、これを基準として層名称を付番した。以下、全体を概観し、大別したものを基本層序（ローマ数字）として記す。尚、（アラビア数字）は各トレンチにおいて府番した層名とほぼ一致するものである。

第Ⅰ層　（第1－1層・第1－2層）現代盛土・現代耕作土・現代耕作土床土・池埋土・近代洪水砂層　等

現代における堆積層1－1層と近代洪水砂層である1－2層に大別できる。1－1層は、調査対象土層ではないため、重機において掘削を行った。第①・②・③トレンチは、水田内に設置した調査区であるため、当該層は粘土質シルトである昭和～平成期の水田耕作土と床土である。第④トレンチは、近年まで池であり、これを埋めた灰白色粗砂が第Ⅰ層にあたる。第⑤トレンチでは住宅建設のために搬入された盛土と、約20cmの厚さで残存する耕土および床土が該当する。

第1－2層は、厚さ90cm～120cmの厚さで堆積する洪水砂である。ラミナの方向軸は北東から南東方向への流れを示しており、調査区北方を東行する讃良川の氾濫に起因するものと解される。第①・②・⑤トレンチにおいて確認した。層内には近代以前の遺物が多く含まれる。また、この洪水によって大正期の木組遺構（第②トレンチ）が埋没した。

第Ⅱ層　〈第2層～第4層〉近世の水田耕作土層

灰色粘土を主体とし、貝殻やこれが溶解したカルシウム塊・アシ類等の植物遺体を多く包含する。第⑤トレンチでは後世の削平により、2・3層は確認できなかったが、これ以外のトレンチでは良好に残存していた。

第Ⅲ層　〈第5層～第7層〉中世の水田耕作土層

やや褐色を帯びた粘土層である第5層と灰色粘土である第6・7層が該当する。第5層からは

13世紀の遺物が出土した。第7層は、上面に正方位を軸とした水田畦畔を持つ、もっとも古い耕土である。

第Ⅳ層　（第8層～第10層）古代の遺物包含層・古代の水田耕作土

灰色粘土を主体とした包含層である。出土遺物は、6世紀末～7世紀初頭期の須恵器が大半である。第③トレンチでは、径5m程度と推定される土坑を検出し、内部から須恵器坏・提瓶・木製一木鋤等が出土した。第①トレンチ・第④トレンチでは溝状遺構および人為的に設けられた段差を確認した。

第Ⅴ層　（第11層）古墳時代の洪水砂層

灰白色～灰色粗砂を主体とする洪水砂層であり、ラミナが明瞭にみられる。上層が灰色（10Y6/1）～オリーブ灰色（5GY5/1）極細砂～粘土、中層はオリーブ灰色（2.5GY5/1）～オリーブ黒色（5Y3/2）細砂～粘質シルトや灰黄色(2.5Y6/2)～灰色（7.5Y5/1）小礫混じり極粗砂～中砂が互層をなし、上方細粒化がみられる。下層は褐灰色（10YR5/1）～オリーブ黒色（5Y3/2）粘質シルト～粘土と有機物層の互層からなる。特に最下層では、植物遺体や有機物がかなり多く含まれている。厚さは70cm～110cmを図り、大規模な河川の氾濫を想起させる堆積層である。第①～第③トレンチからは、ほとんど遺物が出土しなかったため時代特定が難しかったが、第④トレンチにおいて古墳時代初頭～前期の包含層であることが確認された。第④トレンチでは、この洪水砂を基盤とした遺構面が確認でき、墳丘墓・溝・ピット等を検出した。また、第⑤トレンチにおいては、下層に古墳時代前期の遺物が良好に残存し、上位には古墳時代後期の遺物が土砂とともに流入していた。

第Ⅳ層　（第12層～第16層）弥生時代の水田耕作層

黒色～黒褐色粘土を主体とする水田耕作土である。足跡や小畦畔を検出した。植物遺体・有機物を多量に含んでいる。尚、確認調査（その2）第②調査区の同等層からは、細片ではあるが弥生前期～中期所産の土器片が出土した。

第Ⅶ層　（第17層～第20層）縄文時代相当層（汽水域？）

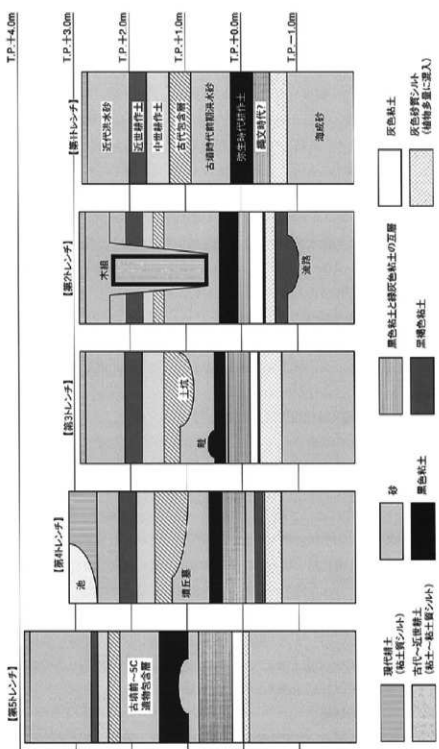
黒色粘土と緑灰色粘土の互層であり、トレンチにより各層の厚さや細分できうる層数は異なる。緑灰色粘土は水成層であり、湯の乾湿を示すものかと思われる。このうち第19層は、一部黒色味の強い粘土であり、河内平野一円で確認されている黒色粘土層（所謂「黒色バンド層」）にあたるものと考えられる。これは、1991年、大阪府教育委員会によって行われた「讃良郡条里遺跡」の調査において縄文晩期深鉢が出土した層と対応し、また、東大阪市の池島・福万寺遺跡において「第4黒色粘土層」と呼称される縄文時代後期後葉に属する遺物が出土した粘土層に相当する。しかし、今回の調査では、当該層からの遺物の出土はなかった。

第20層は、植物遺体を多量に含む氾濫堆積物であり、上・下2層の細分が可能である。上層は暗灰黄色（2.5Y4/2）～オリーブ黒色（5Y3/2）粘質シルトを主体に黄灰色（2.5Y5/1）粗砂～シルト混じり細砂と互層をなしている。下層は灰色（7.5Y6/1～N6/0）極粗砂～中砂を主体とする黒褐色（2.5Y3/2）粘質シルトとの互層であった。

第Ⅶ層　（第21層以下）　海成砂層

灰色細砂を主体とする細かい水平堆積の砂泥互層であり、海浜に生息する生物の巣穴を確認した。上面は流水による浸食を受けており、部分的に上層の粘質土塊を巻き込む状況が観察でき

る。上・下2層の細分が可能であり、上層は黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルトと灰オリーブ色（5Y4/2）細砂が互層をなし、下層では灰色（7.5Y4/1）極細砂と粘質シルトがより密に重なり合っている。間層に河成堆積物である暗緑灰色（7.5GY4/1）中砂～極細砂を挟み、盆域からの影響を受けやすい立地条件にあったことが窺える。即ち、干潟のような堆積環境が考えられ、当地が河内湾沿岸部に位置していたことを示しているといえる。第②トレンチでは蛇行する溝状の遺構を検出したが、海浜に注ぎ込む自然流路であると考えられる。



第44図　讃良郡条里遺跡（その3）　基本層序模式図

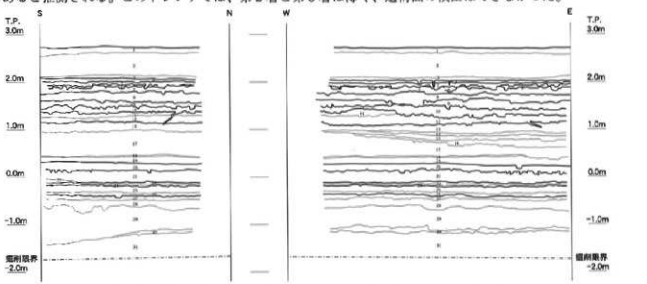
３．調査成果（第45～64図）

第①トレンチ

第①トレンチは、確認調査（その２）第③トレンチに近接した地点に設置したものである。現地表面の標高は、約T.P.2.6mを測り、今回の調査ではもっとも低地に位置する。近日まで水田耕作が営まれていた。

現代耕作土の床土を除去したところ、厚さ70cmを測る灰色粗粒砂の堆積が現れた（第１－２層）。これは、確認調査（その２）第③調査区では認められなかったものである。ラミナの観察から、流れの方向軸は北東方向からのものであることが推測され、氾濫河川は北方の濕良川であると推察される。この洪水砂の中には、中世から近代までの遺物が多く含まれていたが（第47図）、細片が多く、図化できるものが少なかった。第47図１は土師質の土製品である。側面と凸面に線刻状のスタンプを施す。平面は黒色を呈しており、鬼瓦や装飾瓦の一部である可能性を示している。第47図２は、近代の染付小鉢である。第47図３は、中世須恵器の捏鉢である。器壁が薄く良品であるが、焼成がやや甘いため断面はセピア色を呈する。

第１－２層を除去すると、軟質の灰色粘土が表れた（第２面）。遺物は出土しなかったが、タニシや二枚貝、またはこれらが溶解したカルシウム塊が多く含まれていた。上下層との関連から近世の水田であると推測される。このトレンチでは、第２層と第３層は薄く、遺構面の検出はできなかった。



1：第１面　5R3/1暗赤色　礫砂と粘砂～板状砂混じりシルト　上位に洪水の流着あり
2：　5Y4/2灰オリーブ色　粗砂～板状砂　7.5GY5/1緑灰色　礫砂
　上部は固い土壌化がみられる
　N3.0黒色～2.5Y7/1灰白色　粗砂と板状砂の互層　ラミナ調査
3：　10Y5/1灰色　礫砂　2.5GY5/1オリーブ灰色　板状砂混じり粘土
　5GY5/1オリーブ灰色　粘土
　本平面図の見届をなし、ラミナ調査
4：第２面　10Y5/1灰色　砂土　下面に若干板状砂が混入する
5：第３面　2.5Y5/1灰色　粘土　下層の５・７層を含み上げている
6：第４面　5Y4/1灰色　砂土　上層に巻き上げられでもりだりになっている
　4・5・6層平面にオンコ・二枚貝の貝殻が散在する
7：第５面　10Y3/1暗灰色　粘質シルト　植物遺体を多く含む
8：第６面　10Y5/1灰色　粘土　植物遺体を原型のまま多量に含む
9：第７面　7.5Y4/1灰色　小礫、まれに最大径６cm礫の流着あり
10：第８・９面　2.5GY8/1オリーブ灰色　粘土　10GY6/1緑灰色　粘土のオンブロックが混入する
11：貝殻層　5GY5/1オリーブ灰色　粘土
12：第11面　N3.0灰色　砂土　植物遺体を多く含む
13：　10BG3/1青灰色　均質シルト　植物砂が若干混入する　植物遺体を多く含む
14：　2.5GY5/1オリーブ灰色　植物砂混じり粘質シルト
　下部には植物砂のラミナみられる
15：　2.5GY4/1暗オリーブ灰色　粘質シルト　植物砂が若干混入する
16：　7.5Y3/1暗灰色　板礫砂～粘質シルト　植物遺体を多量に含む
17：　2.5Y6/1灰色　板礫砂～礫砂　7.5Y5/1灰色　礫砂　2.5Y4/1灰色
　礫砂混じり粘質シルト
　互層をなし、ラミナ調査　植物遺体を多く含む
18：　10Y3/1暗灰色　礫礫砂～シルト　植物遺体を多く含む
19：　10Y4/1灰色　板礫砂～礫砂　ラミナ調査
20：第12面　10Y3/1黒褐色　シルト～粘質シルト　植物砂が若干混入する
　植物遺体を多く含む
21：第13面　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト　上半部は斑状のCa分の流着みられる
22：　2.5Y3/1オリーブ黒色　粘土
23：第14面　5Y2/1黒色～5Y3/1オリーブ黒色　粘土　植物遺体を含む
24：第15面　5GY5/1緑灰色　粘質シルト
25：第16面　7.5Y5/1黒色　粘土　植物遺体を含む
　下半部の色調4/1,2/1,3/1オリーブ黒色に淡くなり、植物遺体を多く含まれる
26：第20面　2.5Y4/2暗灰黄色　粘質シルト～砂土　植物遺体を多く含む
　等高2.2,2.5Y5/2黒灰色　植物を含む
27：第21面　5Y3/2オリーブ黒色　粘質シルト　根方向の植物遺体を多量に含む
28：　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　粘質シルト　根方向の植物遺体を多量に含む
29：　10Y3/1暗灰色　砂土　10Y6/1灰色　中砂～礫砂　7.5Y7/1灰白色
　礫砂～中砂
　互層をなし、ラミナ調査　泥水が流れ込む状況での堆積、ラミナは大きくうねっている
30：　2.5Y4/2暗灰黄色　粘質シルト混じり礫礫砂　植物遺体、有機物を多く含む
　ラミナは残るが、固い土壌化がみられる下面に根跡有り
31：　10Y7/1灰白色　礫砂～中砂　5Y4/2灰オリーブ色　粘質シルト混じり板礫砂
　5Y3/2オリーブ黒色　粘質シルト混じり板礫砂　5Y5/1灰色　礫砂～板礫砂
　水平堆積の互層
　植物遺体、有機物を多く含む

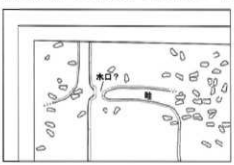
第45図　諸良郡条里遺跡（その３）　第①トレンチ断面図

第4層を除去すると、約10cmの厚さで堆積した、やや褐色を帯びた粘土質シルトを検出した（第5層）。葦類と思われる植物の地下茎を多く含んでおり、この辺りが湿地状であったことを窺わせる。確認調査（その2）第③調査区の調査成果から中世の水田もしくは湿地であると考えられる。また、直下の耕作土である第6層を除去したところ、正方位にのびる水田畦畔と足跡を検出した（第46図第7面）。

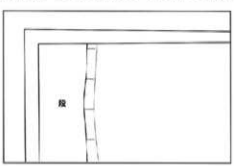
第7層を除去すると青灰色に鉄分が多く沈着した粘土層が現れた（第8～10層）。既往の調査では、古代の包含層と報告されている。人為的とみられる整地跡は検出したが、遺物の出土はなかった。

第10層を除去すると、古墳時代の洪水砂であると推測されている、厚さ1.2mを測る黄灰色砂層が現れた（第11層）。ラミナは多方向へと延びており、時期幅をもった堆積層であることが窺える。

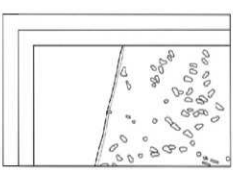
第11層を除去すると黒褐色の粘土質シルトが広がり（第12層）、この上面においてヒトの足跡を多く

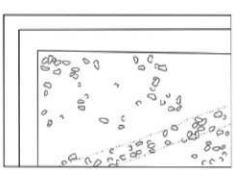


第7面

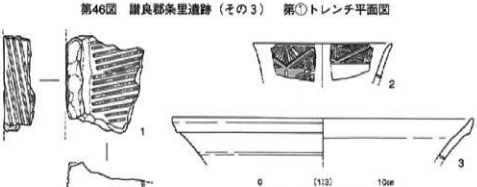


第8面


第12面


第16面

第46図　讃良郡条里遺跡（その3）　第①トレンチ平面図



第47図　讃良郡条里遺跡（その3）　第①トレンチ出土遺物実測図

検出した（第12面）。確認調査（その2）第①トレンチにおいて検出した弥生時代の水田面に連続するものと思われる。

また、弥生時代中期前葉相当層と推定される第14・15層を除去したところ、第16面においてトレンチ一面に広がるヒトの足跡が検出された。畦畔は検出できなかったが、水田跡である可能性が高い。遺物の出土はなかった。

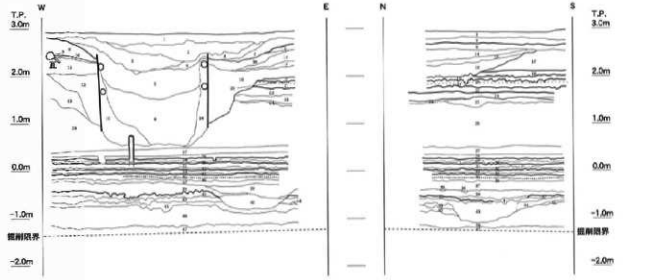
黒褐色粘土である第17層を除去すると、斑点状に集積する緑灰色粘土の薄い水成層が現れた。掘削は第22層まで行ったが、第17層以下は確認調査（その2）第①・第③調査区とほぼ同様の層序を示していた。

尚、今回の調査では、第16層以下からの遺物および遺構の検出は認められなかった。

第②トレンチ

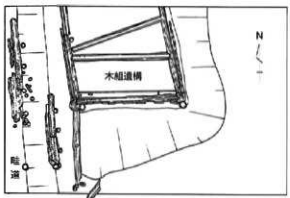
第②トレンチは、第①トレンチより50m北東へ隔てた地点に設置したトレンチである。第①トレンチ同様、現地表では近年まで水田耕作が営まれていた。地表面の標高はT.P.2.98mを測り、第④トレンチよりも約40cm程度高い。この第②トレンチは、調査前の鋼矢板打設段階において、その圧入が困難であった。このことから地下に埋納物（おそらく木等の軟らかいもの）があることが予想された。

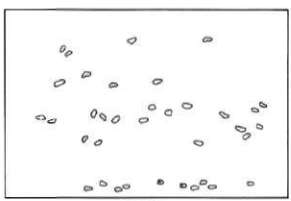
現代耕作土を除去すると、第①トレンチ同様、近代洪水砂が現れたが、トレンチ西側に杭列を伴った

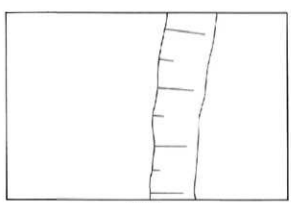


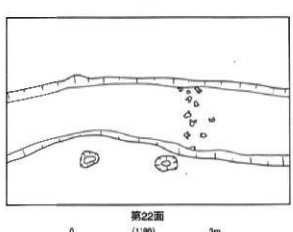
1：10YR/1オリーブ黒色　礫砂～中礫混ミリシルト
2：5GY8/1オリーブ灰色　植質シルト混ミリ礫砂～中砂　10GY8/1緑灰色　植土のブロック混入
3：5GY5/1オリーブ灰色　植土主7.5GY8/1緑灰色　植質シルト混ミリ礫砂のブロックが混在
4：7.5Y2/3オリーブ黒色　植質シルト　若干植物根を含む
5：10GY5/1緑灰色　礫砂～中砂　若干植質シルトを含む
6：2.5GY4/1明オリーブ灰色　植質シルト混ミリ礫細砂～中砂
7：5GY5/1緑灰色　植質シルト～植土混ミリ中砂
8：5Y3/2オリーブ黒色　礫細～中砂混ミリ植質シルト　2.5Y7/4浅黄色　植物珪酸を含む
9：5Y3/2オリーブ黒色～4/2明オリーブ色　礫砂混ミリ中砂　若干シルトを含む
10：10Y3/2オリーブ黒色　植質シルト～若干植細砂を含む
11：5Y3/1オリーブ黒色　植質シルトと5Y8/1灰色　植根跡のブロック
12：5Y4/1灰色　植質シルト混ミリ植根跡～中砂と植土のブロック
13：2.5Y4/1黄灰色　植砂質～中砂混ミリ植質シルト
14：2.5GY8/1オリーブ灰色　植細砂～礫質　若干植質シルトを含む
15：2.5GY3/1オリーブ黒色　粘質シルト　植物遺体と若干植細砂を含む
16：2.5GY5/1オリーブ灰色　植質シルト混ミリ植細砂～礫砂
17：7.5Y6/1灰色　植根跡と5GY6/1オリーブ灰色　明緑土植土の互層　ラミナみられる
18：5GY8/1オリーブ灰色　植土
19：2.5GY3/1オリーブ黒色植質シルト～植土　植物遺体を含む
下部に7.5GY5/1緑灰色植土のブロック混入
20：10Y8/1灰色　植土　植物遺体を横方向に含む
21：10Y4/1灰色　粘土　植物遺体を含む　CaCO3反応あり
22：2.5GY5/1オリーブ灰色　植土　鉄分がわずかに混有　若干植物遺体、炭化物細片を含む
23：10Y4/2オリーブ灰色　植土　礫砂を含む　鉄分の沈着あり
24：2.5GY4/1明オリーブ灰色　礫細混ミリ植土
25：7.5Y4/2オリーブ黒～4/1オリーブ灰色　礫砂～植細砂　上部に植物含む
26：7.5Y5/2灰色～7/2灰白色　粘砂・7.5Y4/1～4/1灰色　植細砂～シルト　炭化物を多く含む　ラミナ顕著
27：7.5Y7/2～7/1灰白色　植砂～細砂　木片を含む　鉄分斑状にみられる
28：5Y2/1オリーブ黒色～5/1灰色　植細砂～植質シルト　炭化物、木片を含む　植物神の十分解著
29：5Y3/1オリーブ黒色　粘土　炭化物細片、植物遺体を含む
30：5Y2/1黒色　植土　若干中砂を含む
31：7.5Y3/1黒色　粘土
32：7.5Y3/1黒色　粘土　5Y5/1灰色　粘土が薄らと混入
33：5Y2/1黒色　植土　若干植物遺体を含む
34：10GY6/1緑灰色　植質シルト　若干植細砂を含む
35：10Y2/1黒色　泥土　植物遺体を含む
36：7.5Y3/1オリーブ黒色　植質シルト～植土　上端に2.5GY6/1緑灰色　植質シルトの薄層を挟む
37：10Y3/1灰色　泥土　若干植細砂含む
38：2Y6/2オリーブ黄色　腐植質～中砂
39：2.5Y4/2灰オリーブ色　植質シルト　若干植細砂、多量の植物遺体を含む
40：5Y5/2灰オリーブ色　木層～中砂
41：2.5Y4/2明灰黄色　粘質シルト　若干植細砂含む
42：2.5Y2/1黒色　植質シルト～植土　植物遺体を多量に含む
43：2.5Y4/2オリーブ褐色　植細砂混じり植質シルト　植物遺体を多量に含む
44：5Y4/2灰オリーブ色　植細砂混じり植質シルト　植物遺体を含む
45：5Y4/1灰色　植砂～植細砂　植物遺体を多量に含む
46：7.5Y4/1灰色　礫砂～中砂　下部に5Y3/2オリーブ黒色植土のブロックありラミナはところどころ乱れにみられる
47：10Y4/1灰色　中砂～礫砂　植物遺体を含む　ラミナ顕著

第48図　讃良郡条里遺跡（その3）　第②トレンチ断面図

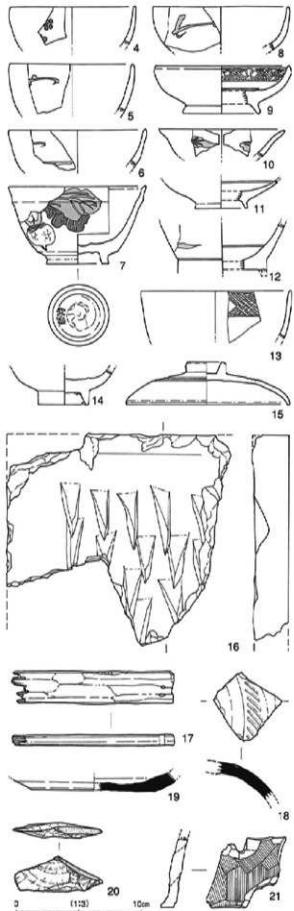








第49図　讃良郡条里遺跡（その３）
第②トレンチ平面図



第50図　讃良郡条里遺跡（その３）
第②トレンチ遺物実測図

畦が検出され、次いで北壁に接して幅30cm×厚さ3cm程度の板列が打ち込まれた木組遺構が現れた（第49図第1－2面）。この遺構は平面上で見ると、一辺2.5mの若干ゆがんだ四角形を呈している。四隅には二方面から4箇所のほぞ穴を穿った柱が打ち込まれており、先端にほぞを作り出した丸太を孔に挿し込んで組み合わせ、固定している。この木組の外側を板材が廻っており、発見当初はその構造から近代の井戸ではないかと考えていた。しかし、掘削を進めるうち、底面に2本の横木が渡されていたことがわかり、井戸ではない可能性が出てきた。

この時点で、近隣在住の古老から「この木組の南辺あたりが池であり、この池から上田（池水面より高い作付け面をもつ田の意）に水を入れるために足漕ぎのポンプ（水車）があった、と（親から）聞いたことがある。」とのご教示を得た。さらに「（自分が）子供の頃（昭和初期）には、そのポンプはすでになく、池の西側に畦道があった。」と教えてくださり、木組遺構と池および、西側において検出した杭列を伴う畦との相関関係が明らかとなった。即ち、大正期に灌漑を目的として掘り込んだ池の端に設置した脚踏水車（第51図参照）の設置木組は、洪水砂の流入によってほぼ埋没し、昭和初期には浅い池となって残った（この洪水が讃良川の氾濫によるものであることは、木組遺構が北東方向からの力によりゆがんだ形状で残存したことから推測できる）。その後、西側に護岸を施した畦道が作られ、水田から集落への通路として利用されたのであろうと解釈される。この一連の事象は、トレンチにおいて確認した層序断面とほぼ合致するものである。

この木組遺構の内部からは、染付碗・施釉陶器碗等が出土した（第50図）。第50図4～6・8～13は、近代の染付である。器種は碗・皿・小鉢等であり、絵柄は多種に及ぶ。第50図7・14・15は、施釉陶器碗である。7は近代のもので、外面に藁の絵付けがある。底部外面に「犬山」の押印があり、美濃・瀬戸産と思われる。14は、表面に小穂を付すため釉薬表面に凹凸ができている。15は土瓶の蓋であり、一般に黄瀬戸と称される製品である。第50図16は井戸瓦の一部である。1点のみの出土であり、磨滅の程度から木組遺構に伴うものであるとは考えにくい。第50図17は、端部に穿孔を施した木片である。側面に一部圧痕を残すが、用途不明品である。

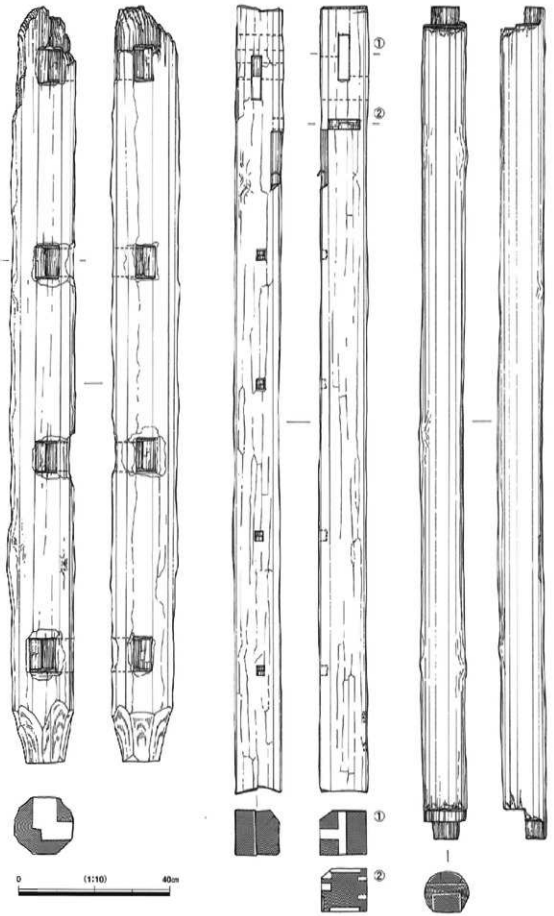
木組の掘方は直径5m以上に及ぶため、近世の耕作土はほとんどが削平され、確認できなかった。また、中世～古代包含層も、壁面では確認しえたが、残存面積が小さいため、平面における遺構検出はできなかった。木組の底面は、第11層を抉り込む位置まで達していた。

わずかに残った壁面において、第7層より須恵質の土器片が1点出土した（第50図18）。壺形土器の肩部にあたり、タタキ痕が一部に残存する。備前を所産とするものと推測される。

第11層は、厚く堆積する古墳時代の洪水砂層である。このトレンチでは、円筒埴輪の底部（第50図21）とサヌカイト剥片（第50図20）が1点出土した。

第12面の弥生水田面は良好に遺存していた。確認調査（その2）第①トレンチ同様、ヒトの足跡を検出したが、畦畔を見出すことはできなかった。第15層～19層までは、黒色粘土と灰色

第51図　讃良郡条里遺跡（その3）
民俗例にみる足踏水車の一例



第52図　讃良郡条里遺跡（その3）　木組遺構部材実測図

もしくは緑灰色粘土の互層であり、乾湿を繰り返した水辺の形跡をとどめる堆積である。

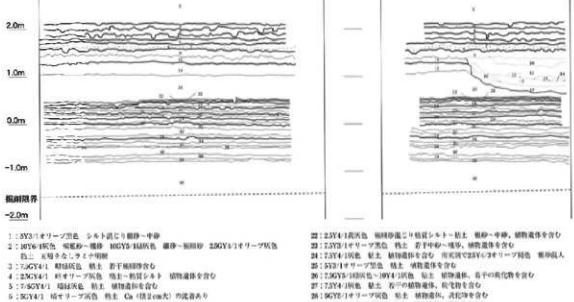
第20面では、植物遺体を多く含む黒色粘土の上面で、黄灰色の粗砂を埋土とする流路を検出した。また、海成砂である第22層上面において、東西に走る流路とピット状の落ち込みを検出した。この流路埋土上面では、足跡を検出したが、鳥や小型の偶蹄類によるものであった。遺物の出土は皆無であり、遺構を検出しえたものの、これが即ち人間の直接的な生活痕跡につながる可能性は低いと思われる。

第③トレンチ

第③トレンチは、第②トレンチより、東へほぼ50m離れた地点に設けたトレンチである。現地表面は、葦類が繁茂する荒地である。標高は、第②トレンチとほぼ同じ、T.P.2.9mを測る。現代耕作土を除去すると、近代洪水砂（1－2層）が現れ、続いて近世耕作土（第2層）が確認された。第2面では、ヒトやウシの足跡を検出した（第54図）。また、第3層からは、染付や陶器片が出土した。

第3層を除去すると、暗オリーブ粘土質シルトである中世耕作土層が現れた（第5～7層）。第5～7面では、畦畔等は検出できなかったが、ヒトやウシの足跡を検出した。

第7層からは、カルシウム塊や貝殻の破片に混じって瓦器椀片が3個体分出土した。第55図22は、口縁に段を持ち、内面横方向に暗文の痕跡を残す。大和型に分類される製品で、13世紀の所産である。第55図23は、やや尖った口縁部断面をもつ楠葉型の製品で、内面には横方向の暗文を密に施す。12世紀末期～13世紀初頭頃の製品である。第55図24は、大和型の製品で、内面口縁部および外面底部に暗



1：2.5Y3/1オリーブ黒色　シルト混じり細砂～中砂
2：10Y6/1灰色　極粗砂～礫砂　10GY5/1緑灰色　礫砂～細細砂　2.5GY4/1オリーブ灰色
色に　炭粒小さじ1ヶ中個体
3：7.5GY4/1　暗緑灰色　粘土　若干植細砂含む
4：2.5GY4/1　杜オリーブ灰色　粘土～粘質シルト　植物遺体を含む
5：7.5GY6/1　緑灰色　粘土　植物遺体を含む
6：5GY4/1　暗オリーブ灰色　粘土　Cu（径1cm大）の流着あり
7：N4/0灰色～2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　若干細砂を含む
8：N4/0灰色　粘土　灰化物を多く含む
9：5Y5/2灰オリーブ色　粘土　若干N2/75～1細灰色　粘土のブロック混入
10：2.5GY5/1オリーブ灰色　下方ほど細砂混じり
11：N4/0～10Y4/1灰色　極細砂～中砂混じり粘土
12：7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　ブロック状
13：5Y4/2灰オリーブ色～暗質シルト　植物遺体を多く含む
14：7.5Y4/1灰色　細細砂～中砂混じり粘土
15：2.5Y4/1青灰色　粘土　粗砂～中砂、多量の植物遺体を含む
16：N4/0灰色　極細砂～中砂混じり粘土
17：5Y4/1灰色　粘土　若干細砂含む　Cu（径1cm大）の流着あり　混合物は5Y5/1灰色のブロック混入
18：7.5GY6/1緑灰色　粘土　炭化物流着あり
19：7.5Y4/1灰色　粘土　炭化物を多く含む、下部ではN4/0
20：2.5Y5/1黄灰色　砂質シルト混じり細細砂　2.5Y6/2灰黄色　小礫～粗細砂　5Y5/1灰色　中砂～礫砂　5Y6/2オリーブ黄色　小礫～粗細砂　5Y3/1オリーブ黒色　細細砂
21：2.5Y4/2暗灰黄色　細細砂混じり植質シルト　植物遺体を多く含む
北東東で下部に2.5Y6/1灰色　細礫砂～中砂入り（足跡）
22：2.5Y4/1黄灰色　細細砂混じり植質シルト～粘土　細砂～中砂、植物遺体を含む
23：7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　若干中砂～礫岩、植物遺体を含む
24：7.5Y4/1灰色　粘土　植物遺体を含む　形状異で2.5Y4/3オリーブ褐色　断面個人
25：5Y3/1オリーブ黒色　粘土　植物遺体を含む
26：7.5GY5/1緑灰色～10Y4/1灰色　粘土　植物遺体、若干の灰化物を含む
27：2.5Y4/1灰色　粘土　若干の植物遺体、灰化物を含む
28：5GY5/1オリーブ灰色　粘土　植物遺体、灰化物を含む
29：10Y3/1オリーブ黒色　粘土　植物遺体、灰化物を含む
30：10GY6/1緑灰色　植質シルト　植物遺体、若干の灰化物を含む
31：上層　10Y5/1灰色植質シルト～粘土
中層　7.5Y2/1黒色　粘土　三部2GY5/1緑灰色　植質シルトを薄らに挟む
下層　7.5Y3/1オリーブ黒色　植質シルト～粘土　上部に5GY5/1オリーブ灰色植質シルトを挟む
32：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土　有機物を多く含む
33：7.5Y4/1灰色　粘土　植物遺体、有機物を多く含む
34：5Y2/1黒色　粘質シルト～粘土　植物遺体をかなり多く含む
35：2.5Y4/1青灰色　植質シルト　植物遺体をやや多く含む
36：5Y4/2灰オリーブ色　植質シルト　植細砂、植物遺体をやや多く含む
層中に7.5Y5/2灰オリーブ色植細砂（5cm厚や？）
37：5Y4/2灰オリーブ色　植細砂混じり植質シルト　植物遺体を多く含む
38：5Y4/1灰色　中砂～礫岩　植質シルト、植物遺体を含む
39：5Y5/1灰色　中砂～礫岩
40：上層　7.5Y4/1灰色　粘質シルト混じり細砂
下層　10Y4/1灰色　植細砂混じり植質シルト

第53図　讃良郡条里遺跡（その3）　第③トレンチ断面図

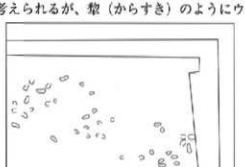
文を施す。12世紀後半の製品である。

第7層を除去すると、灰色粘土質シルトである第8層が現れた。第8層からは、須恵器が比較的多く出土した（第55図25～27・29）。第55図25～27は坏蓋であるが、25は焼き歪み、天井部が大きく凹んだ状態である。26は丸みを帯びたフォルムであり、27は平たく口径が広い。生産年代は、すべて6世紀末～7世紀前半までの範疇に含まれる。第55図29は、提瓶の肩部である。通常、提瓶の肩には輪状ないし鍵状の把手を取り付けるが、これは円形浮文状の粘土塊を付着させているに過ぎず、把手部分がすでに形骸化した段階のものである。7世紀前半期の製品における特徴として捉えられている。

尚、この第③トレンチからは、甕片の出土はほとんどなく、坏類の出土が多く見られた。

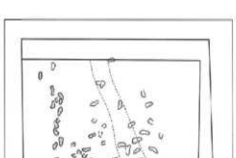
第8層を除去したところ、トレンチの東南隅に、土坑状の落ち込みを検出した（第54図第10面）。円形土坑であるならば、直径5mを測ると予想される。埋土は灰色粘土が主体で、やや黒味かかった粘土層の流れ込みが一部に見られる。明らかに人為的な遺構であるが、その性格は不明であるため敢えて土坑状遺構と呼称することとした。ここからは、6世紀末～7世紀初頭にかけて製作されたとみられる遺物が出土した。

土坑状遺構の堆積層序は大きく上下2層に分けられる。このうち上層から須恵器坏身片と木製鋤が出土した（第55図28・31）。31は、柄と身部を一木から削りだす、通常「一木鋤」と称されるものである。刃部は薄く尖っており、金属製の刃先を装着した痕跡が残る。しかし特異なのは、柄に側面から孔が1点穿たれていることである。この孔の存在により、組み合わせることを前提とした農耕具であることが考えられるが、犂（からすき）のようにウシやウマ（時には人間）に引かせる構造をもつものなら

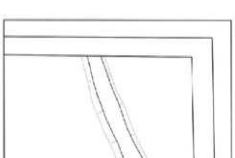


第2面

第10面



第12面



第13面

第54図　讃良郡条里遺跡（その3）　第③トレンチ平面図

ば、柄の正面から背面にかけて孔を設けるのが通常であり、その点において類を見ない製品である。

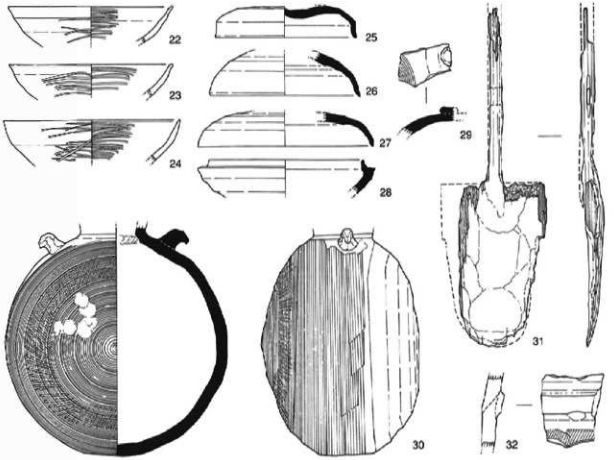
土坑状遺構の下層からの遺物出土は寡少であったが、底面まで掘削するに至り、須恵器の提瓶が横たわるような状態で出土した（第55図30）。口縁部を欠いてはいるが、残存状態は良好である。正面は一部に並行タタキの痕跡を残すものの、カキ目が密に施され、背面はヘラケズリ手法で調整されている。把手は小さく、わずかに外曲するのみであり、紐をかけた痕跡は認められず、形式化したものの一形態として捉えられる。これらの特徴から6世紀末頃の製品であると推定される。

土坑状遺構のベースとなる第10層を除去すると、古墳時代の洪水砂である第11層が現れた。このトレンチでは約70cmの厚さを測る。これを除去すると、弥生時代の水田面（第12面）が現れた。

第12面では、ヒトの足跡を検出した。この足跡には、粗砂で埋まった灰白色を呈するものと、茶褐色粘土で埋まったものの2種類が認められた。不可解に感じつつも、第12層（約10cm程度）を除去してみると、掘削段階において、トレンチのほぼ中央を北北西－南南東方向へのびる小畦を検出することができた（第13面）。即ち、第12面おいて検出された2種類の足跡の埋土の違いは、畦が機能していた時期（第13面）に踏込まれたものと、洪水堆没直前期（第12面）に踏込まれたものの差（小噪な時期差）であることがわかった。

第13層を除去すると、黒褐色粘土である第14層が現れ、以下、19層までは、他のトレンチと類似した堆積状況であった。しかし、海辺の水成層であろうと考えている緑灰色砂土層（第18層）が、このトレンチでは幾重にも分散し、黒褐色粘土との互層として確認された。これは干潟が乾湿を繰り返した結果とみることができる。

第20層は、植物遺体を多く含む暗灰黄色シルト層である。部分的に砂質化あるいは粘土質化してお



第55図　讃良郡条里遺跡（その3）　第③トレンチ出土遺物実測図（S=1/3）

り、不安定な水際の環境下における堆積層であることが窺える。

以下、第22層まで掘削をおこなったが、顕著な遺構の検出および遺物の出土はなかった。尚、出土層は明らかではないが、このトレンチから円筒埴輪が1点出土している（第55図32）。外面には断面台形のタガをめぐらせ、下部にはナナメ方向のハケ目を残す。焼成はやや甘いが、5世紀代にまで遡る可能性をもつ遺物である。

第④トレンチ

第④トレンチは、第③トレンチより北方へ約90m程隔てた地点に位置する。第①～③トレンチとは一線を画し、現在集落が営まれている微高地上にあたり、近年まで住宅用敷地として使用されていた地点である。

トレンチは、微高地の縁辺からなだらかに南へ落ちる地形の変化点に設置した。微高地の形成過程を辿ることを目的としたが、この落ちは、昭和初期に設けられた灌漑用の池の痕跡をとどめたものであることが、近隣住民からのご教示によって判明した。また、調査を進めるにつれて、近代以前には平坦地であったことが明らかとなった。

このトレンチには、一部において近代の耕作土（第1－1層）が残存し、機械掘削終了時点において足跡と池の北肩を検出した（第58図第1面）。池の岸には等間隔で杭が打ち込まれ、ある程度の護岸設備が施されていたようである。1－1層からは、染付片が出土した（第57図33～37）。第57図33と37は、鉢である。33は外面に増瘤状の絵付があり、37の外面には唐草、内面には松枝の絵柄が大胆な筆遣いで描かれている。ともに近代の製品である。第57図34は、碗であるが、見込部に蛇の目釉剥を残す。近世の製品である。第1－1層を除去すると近代洪水砂（第1－2層）が現れた。微高地上に位置するためか、洪水砂の堆積はこれまでのトレンチに比べ、40cm程度と薄く、微砂の割合が高い。

第1－2層を除去すると、近世の水田面が現れた（第58図第2面）。

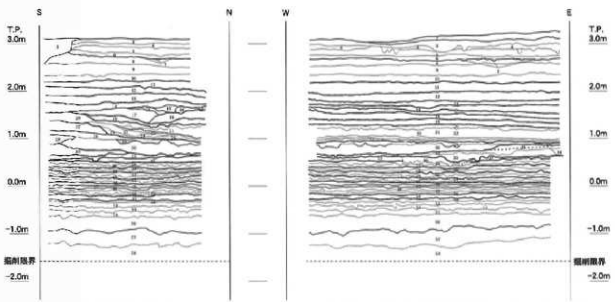
第2層を除去すると、中世耕作土である第5層が現れた。第③トレンチと酷似した暗オリーブ灰色粘土質シルトで、わずかに粗砂と植物遺体を含む。第5面では、若干東方向へ振るものの、ほぼ正方位に設けられた水田畦畔とヒトやウシの足跡を検出した。尚、既往調査区の第3層・第4層に相当する耕作土層は確認できなかった。

灰色粘土である第6層を除去すると、同じく灰色粘土である第7層の上面において、細砂を埋土とした小溝を検出した。この溝を掘り進めると、下層へと潜る様相を示し、第7層以下の遺構に属するものであることが危惧された。そこで、第7層を除去し、第8面を精査したところ、幅50cm～150cmを測る溝を検出した。即ち、第7面において検出した小溝は、この溝の上層縁辺にあたる。溝底面の標高差から、水は東から西へと流れたようであるが、人為的な遺構であるかどうかは不明である。この第8面は、第③トレンチにおいて土坑状遺構を検出した7世紀初頭の遺構面と対応するが、溝以外の明確な遺構は検出されなかった。第8層を除去すると、暗灰色粘土である第10層が現れた。この層内より土師器甕片や須恵器坏蓋（第57図38）が出土した。この坏蓋は、6世紀前半期の製品である。

第10面では北へ落ちる段を検出し、現地表面の落ち方向が逆転する地形が確認された。また、この時点で、トレンチ南西隅において下位の砂層（第11－1層）が顔を覗かせており、11層上面には起伏を伴う遺構が存在することを予想させた。

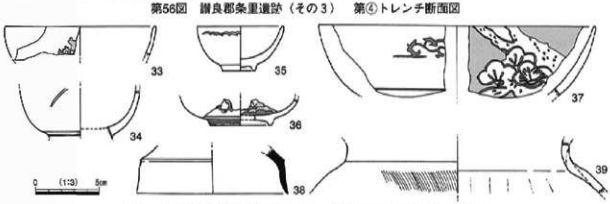
第10層を除去すると、古墳時代前期洪水層と思しき第11層が現れた。しかし、これまでとは違い、砂質がしまり、部分的にシルト化していることが認められた。さらに、これまではラミナを残す厚い一

連の砂の堆積であったものが、このトレンチにおいては土質や色調から細分できることが、断面観察より明らかとなった。即ち、暗灰色粘土まじり砂質シルトである第11－1層と灰色細砂まじり粘土質シルトおよびオリーブ褐色粗砂である第11－2層、オリーブ黒色粗砂まじり粘土質シルトである第11－3層、暗オリーブ灰色シルトまじり粗砂～微砂である第11－4層の計4層である。各々、手にとると粘土質であったり、シルト質であったりとその土質は異なるが、多分に粗砂～中砂を多く含む。各層の



1：10BG3/1暗青灰色　粘土　若干植細砂、小礫を含む
2：5B2/1青黒色　植粗砂～中砂混じりシルト
3：5BG3/1暗青灰色　小礫～中砂　若干シルト含む
4：5B4/1暗青灰色　粗砂～細砂混じり粘質シルト
5：5G4/1暗緑灰色　小礫～中砂混じり植細砂～シルト　若干小礫含む
6：10GY4/1暗緑灰色　小礫～中砂混じり植細砂～シルト
7：5Y5/2灰オリーブ色　植粗砂～細砂
8：5GY5/1オリーブ灰色　細砂～植細砂
9：5GY4/1暗オリーブ灰色　植細砂　5Y6/1灰色　植粗砂～粗砂　瓦層をなし、サミナ混ぎ
10：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　5GY5/1オリーブ灰色　細砂～植細砂　瓦層をなし、サミナ混ぎ
11：10G4/1暗緑灰色　小礫～中砂混じり粘質シルト
12：7.5Y4/1灰オリーブ色～10BG4/1暗青灰色　シルト～粘質シルト　粗砂～細砂を含む
13：5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土　若干粗砂～中砂を含む
14：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　粘質シルト～粘土　若干中砂～細砂を含む　土器片出土層
15：5Y6/4オリーブ灰色　中砂と5BG4/1暗青灰色　細砂混じり粘質シルトの瓦層　サミナは不明瞭
16：5B4/1暗青灰色　粘質シルト　若干粗砂を含む　土器片出土層
17：5F3/4暗青灰色　粘土　上層に5PB5/1青灰色　粘土が縞を巻くようにみられる
18：5G4/1暗緑灰色　粘質シルト～粘土　細砂～中砂を含む　鉄分の流着みられる
19：N4/0灰色　粘土　若干粗砂～中砂を含む
20：N3/0暗灰色　粘土　若干細砂を含み、高層は上多く含む
21：7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　有機物を多く含む
22：7.5Y4/1灰色　中砂～細細砂　若干粘質シルトを含む
23：10Y3/1オリーブ黒色　粘質シルト混じり植粗砂～細砂・2.5Y4/3オリーブ褐色植細砂～粗砂
24：5Y4/1灰色　粘質シルト　粗砂～中砂、植物遺体を含む
25：7.5Y4/1灰色　植細砂～細砂
26：5Y5/2灰オリーブ色　植細砂～粗砂
27：10Y3/1オリーブ黒色　粘質シルト混じり植粗砂～中砂
28：10Y4/1灰粗砂～中砂混じり粘質シルト　上部に鉄分の流着がわずかにみられる
29：7.5Y3/2オリーブ黒色　植粗砂～粗砂　若干粘質シルト含む
　10Y3/1オリーブ黒色　植細砂混じり粘質シルトのブロック混入
30：5GY4/1暗オリーブ灰色　粗砂～細砂混じり粘質シルト・5Y4/2灰オリーブ色　小礫～粗砂
31：7.5Y3/2オリーブ黒色　粗砂～細砂混じり粘質シルト
32：2.5GY3/1暗オリーブ灰色　粘質シルト混じり粗砂～細砂
33：2.5GY3/1暗オリーブ灰色　植粗砂～細砂混じり粘質シルト
34：10Y4/1灰色　シルト～粘質シルト　植細砂と若干の粗砂含む
35：7.5Y4/1灰色～7.5Y4/2灰オリーブ色　小礫～粗砂
36：7.5Y2/1黒色　粘質シルト　若干植細砂含む
37：5Y3/1オリーブ黒色　粘土　上部に若干粗砂混入　層み込みあり
38：5Y2/1黒色　粘土
39：10Y4/2オリーブ灰色　粘土　底に5Y2/1黒色　粘土ブロック混入
40：5Y2/1黒色　粘土
41：10Y4/2オリーブ灰色　粘土　底に5Y2/1黒色　粘土ブロック混入
42：5Y2/1黒色　粘土
43：10Y4/2オリーブ灰色　粘土　底に5Y2/1黒色　粘土ブロック混入
44：5Y2/1黒色　粘土
45：10Y3/2オリーブ黒色　粘土
46：10Y2/1オリーブ黒色　粘土　植物遺体含む
47：10Y4/1灰色　粘土　若干植細砂含む
48：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土　若干植細砂含む
49：5GY4/1暗オリーブ灰色　粘質シルト　若干植細砂含む
50：2.5GY3/1暗オリーブ灰色　粘質シルト　若干植細砂含む
51：10Y2/1オリーブ黒色　粘質シルト　若干植細砂含む
52：5Y3/1オリーブ黒色　粘土　植物遺体を多量に含む
53：2.5Y4/3オリーブ黒色　粘質シルト　若干の植細砂と多量の植物遺体を含む
54：2.5Y4/2暗灰黄色　植細砂混じり粘質シルト　植物遺体を多量に含む
55：5Y4/2灰オリーブ色　粗砂～中砂混じり粘質シルト　植物遺体を多量に含む
56：2.5Y4/1黄灰色　植細砂～中砂混じり植細砂～シルト　植物遺体含む
57：7.5Y4/1灰色　植細砂混じりシルト　中砂をブロック状に含む　有機物、植物遺体を含む
58：5Y4/1灰色　シルト混じり植細砂

第56図　讃良郡条里遺跡（その3）　第④トレンチ断面図



第57図　讃良郡条里遺跡（その3）　第④トレンチ出土遺物実測図

上面には、何らかの遺構らしき掘り込みや起伏の存在が認められたため、1層ずつ除去して遺構検出をおこなうこととした。その結果、計4枚の遺構面を確認することができた。

第11－1面は、部分的に暗灰色粘土を含む砂層の上面である。トレンチ東南部に北東－南西方向にのびる畦状遺構を検出した。砂の一部がシルト質となり、やや高まりをもったかたちで現れた遺構である。耕作に伴う畦と考えるには、土壌があまりに砂質であることから畦状遺構と呼称した。また、トレンチ南西隅において、若干の砂の盛り上がりが確認できた。

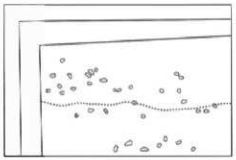
第11－1層を除去すると、この盛り上がりが盛土状遺構の投影であることがわかった。即ち、第11－2面では、トレンチ南西隅において砂まじり粘土質シルトが高さ25cmにわたって盛られた盛土状の遺構と、これを取り巻くように滞留したオリーブ黒色粘土質シルト層が検出された。さらに、この盛土の東側より、土師器蓋付短頸壺が1セットと甕一個体分がまとまって出土した（第60図右上出土状況図）。この遺物2点は、盛土を構成する砂まじり粘土質シルト層上面の延長上に位置し、オリーブ黒色粘土質シルト層によって埋もれた形で検出された。2点ともに破砕した状況下での出土であったが、完全復元が可能であるほど各片の遺存状態は良好であった。盛土遺構は、上端から斜面にかけて砂粒が崩れ落ちた形跡があり、2点の遺物も本来盛土上に据え置かれていたものが転落した可能性があると思われた。

この2点の土器は、第59図に掲げた。41が土師器短頸壺、40がその蓋である。両者ともに精良な胎土と灰黄褐色の色調をもち、セットとして製作されたことは間違いない。41の器形は、直径3cm足らずの小さな底部から大きく開き、丸みをもって胴部を形作り、そのまま内傾して口縁を短く外反させる。口縁の付け根には、蓋を固定するための2点の孔が焼成前に設けられている。外面調整は、全面にわたって縦方向の緊密なミガキが施されており、胴の上部に一部横方向のミガキが認められる。これは内面も同様である。注目されることは、焼成後に穿たれたとみられる孔が、胴部下位の2箇所に認められることである。遺物接合時、41は、全体復元が可能であったにもかかわらず、胴部下位に径4cm程度の隙間が2箇所開いた状態であった。この器蓋の懐れ口を観察したところ、内面から外面にかけて力を加え、焼成後に設けられた孔であることがわかった。これは、主に祭祀や葬送儀礼に使用された土器にみられる特徴のひとつである。

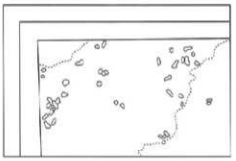
40は、一部口縁を欠くが、残存状態もよく、復元も容易であった。やや窪みをもった円柱状の摘部から、口縁に向けて笠状に開く器形を持つ。外面には、放射線状にミガキが施されており、口縁端部のみ横方向のミガキが残る。内面はハケメを施した後、指ナデによって器面を整えている。口縁端部より1.5cmのところに径4mmを測る孔があり、これは短頸壺における口縁直下の孔と位置的に呼応する。

第59図42は、甕である。一部口縁を除き、全体復元が可能である。41に比べ、弥生土器的様相を色濃く残す製品である。厚い底部から最大径を測る胴部にかけて開き、頸部へむかって器壁を内湾させながらすぼめた後、短く屈曲させて口縁とする。外面の調整は、体部全般にわたって縦方向のハケメが顕著であるが、頸部と底部には、指ナデが施されている。内面はヘラ状工具でのナデ上げが認められる。外面・内面ともに煤や炭化物が多く付着し、甕として煮沸に用いられたものであることは確かである。

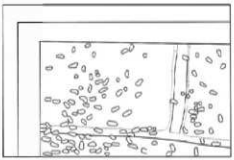
第11－2面において検出した盛土状遺構をどう捉えるかであるが、今回の調査成果からは、古墳時代前期頃に築造された墳丘墓の一角である可能性が濃厚であると判断した。即ち、出土した遺物が所謂「供献土器」と称されるセット関係を示す土器一式であること、また砂質盛土の周囲に黒色粘質土が滞留した様相が他の事例（近年では八尾市久宝寺遺跡など）において検出された墳丘墓と類似すること等



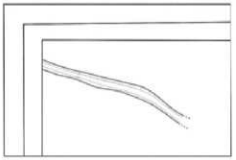
第１面



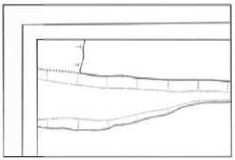
第１－２面



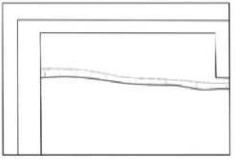
第２面



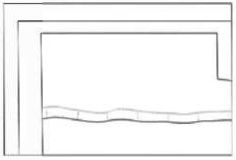
第７面



第８面



第10面



第11面

第11－２面

第58図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ平面図（１）

がその根拠である。この結論を断定化するには、このトレンチに連続する地区における今後の発掘調査を待たねばならないが、今回の調査では、方形墳丘墓の一端を検出した可能性があるという結論をここで述べておきたい。

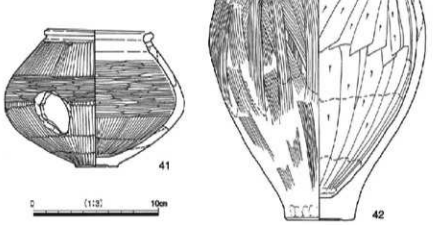
墳丘墓盛土と滞留土壌化層（第11－2層）を除去すると、オリーブ黒色粗砂まじり粘土質シルトである第11－3層があらわれ、さらにこれを除去したところ、暗オリーブ灰色シルトまじり粗砂～微砂である第11－4層の上面が現れた。この面では、溝群とこれに切られるピット群を検出した（第11－4面）。作図の都合上、第11－4（1）面・第11－4（2）面の2図に分割して、第60図に示した。

第11－4（1）面では、トレンチを北西－南東方向へとのびる5本の溝（溝1～5）と、これを切る屈曲した小溝（溝6）を検出した。溝6は浅形が甘く、その痕跡しか検出できなかったが、溝42～5は灰白色砂の上を濃灰色粘土質シルトの混土が弧を描きながら走る様が明確であった。このうち溝5は、上面の墳丘墓盛土を剥いだ時点で確認した遺構である。

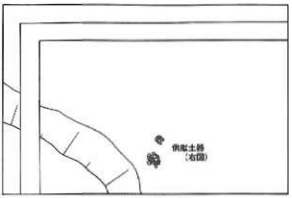
第11－4（2）面のピット群は、一部、上記の溝群の検出と同時に確認していたため同時期の遺構であろうと考えていたが、ピット1・3等、断面観察において溝との切りあい関係が明らかとなったことから、溝群に先行する遺構群であると推察した。これらピットの埋土は褐ねシルト質であり、砂質土壌上面に置いては検出が比較的容易であった。ピットの位置関係からは建物の柱列推定復元は困難であったが、断ち割り状況からは明らかに柱痕と思われる掘り込み（ピット8・9等）が観察できた。このことから、これらのピット群は建物を構成する柱列と考えることができる。溝やピットからの遺物出土はなかった。

第11－4層を除去すると、上面に大きな起伏を持つ遺構面（第11－5面）があらわれた。精査を行ったところ、トレンチ南西隅と北東隅に高さ15～20cm程度の盛土状遺構を確認した。トレンチ北南西隅の盛土状遺構は、上面において検出した墳丘墓の直下であり、これに影響をうけた土質変化ではないか、との危惧を抱いたが、トレンチ北東隅においても同様の遺構を検出したことから、改めて遺構として認識した次第である。出土遺物はなく、上面と同様の墳丘墓である確証は欠くが、その可能性を示唆する遺構として掲げておきたい。

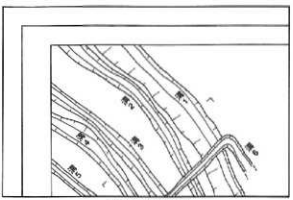
以上、第11層内における細分各層の堆積状況と遺構について既述したが、これらの変遷を追うと、



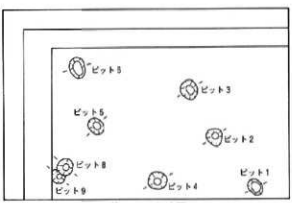
第59図　讃良郡条里遺跡（その3）　第④トレンチ　第11－2面出土遺物実測図



第11-２面

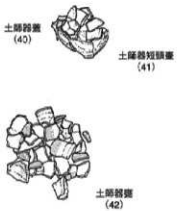


第11－４（１）面

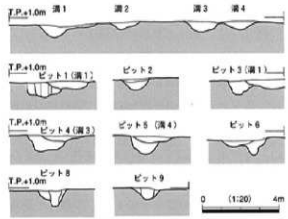


第11－４（２）面

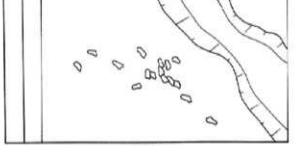
第11－５面



供献土器　出土状況図



ピット１　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）7.5Y3/1　オリーブ黒色　粘土質シルトまじり微～中砂
ピット２　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）10Y3/1　オリーブ黒色　中砂まじり粘土質シルト
ピット３　1）7.5Y3/1　黒色　砂まじりシルト
2）7.5Y3/1　オリーブ黒色　明砂まじりシルトに粘土ブロック混入
3）7.5Y3/1　オリーブ黒色　上層よりも強固でしまりが悪い
4）10Y3/1　オリーブ黒色　砂まじり粘土質シルト
ピット４　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂まじり粘土質シルト
ピット５　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　粘土質シルトまじり微～中砂
ピット６　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　粘土質シルトまじり微～中砂
ピット８　1）2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　粘土質シルトまじり微～中砂
2）7.5Y3/1　オリーブ黒色　粘土質シルトまじり粗～中砂
ピット９　1）10Y3/1　オリーブ黒色　微～中砂まじり粘土質シルト
2）7.5Y3/1　オリーブ黒色　粘土質シルトまじり微～中砂
ピット10　1）2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　粘土質シルトまじり微～中砂



第12面

0　(1:80)　3m

第60図　讃良郡条里遺跡（その３）　第④トレンチ平面図（２）

「盛土状遺構（墳丘墓？）築造→埋没→建物建築→溝群形成（不安定な土壌環境）→洪水砂による埋没→墳丘墓の築造→墳丘墓露土が除々に崩落・周辺土壌化→洪水砂により再び埋没」といった一連の過程が、古墳時代前期を通して展開されたと推理される。

第11－5層を除去すると、他トレンチでも見慣れた黒褐色粘土層があらわれた（第12面）。弥生時代と推定する水田畔作面である。この面では、トレンチ北東側を北から南東方向へ向かって流れる溝とヒトの足跡を検出した。

第14層～第19層では、黒色粘土層と、緑灰色もしくはオリーブ灰色を呈する匪点状の粘土質シルトを含む薄層の重なりを検出した。第3－③トレンチと類似した堆積状況である。

第20層は植物遺体を多く含む粘土質シルト層であり、その下は灰色粗砂の海成層となる。この第④トレンチにおいては、第14面以下での遺構の検出はなかった。

第⑤トレンチ

第⑤トレンチは、第④トレンチから北東方向へ約70m離れた地点に設置したトレンチである。今回の調査では、もっとも東に位置するトレンチであり、讃良郡条里遺跡（確認その1）調査時に設置したトレンチともっとも近接する。

この付近は、国道170号線の沿線にあたることもあり、近年大幅な盛土を行う地盤の引き上げが著しい。第⑤トレンチの設置地点も、昭和初期の地図においては水田耕作地であったが、近年では住宅地として使用されていた区画にあたることから、大きく盛土をして住宅を建てたことが推測された。このため、鋼矢板を打設する前に重機を用いて地下の様相を探ることを試みた。結果、現地盤の下には厚さ2.3mに及ぶ盛土と産業廃棄物（住宅建設時の基礎・土管等）が存在することが明らかとなった。このため、あらかじめ盛土を除去して旧耕作土を検出し、その後、鋼矢板の巨入をおこなうこととした。旧耕作土上面の標高はT.P.2.7m程度であり、これは、第④トレンチと大差ない値である。

尚、第⑤トレンチは、他のトレンチとは異なり、古代から後の堆積層が薄く、削平をうけたものが多い。このため、一部共通層名を用いず、独自の層番を付番したものがある。これについては、文中において他トレンチのどの層に相当するかを明記した。

旧耕土（第1－1層）を除去すると、近代洪水砂が現れた（第1－2層）。第⑤トレンチでは、この洪水砂は他のトレンチよりも厚く堆積し、約1.1mを測る。また、ラミナの起伏が激しく、径2cm程度の礫の流入層もあることから、この地点が激しい水流に見舞われたことがうかがえる。これは、他のトレンチよりも氾濫河川である讃良川にもっとも接近しているためであろう。

第1－2層を除去すると、近世耕作土（第2層）が現れた。軟質の灰色粘土であり、層内からは陶器片が1点出土した。この第2層上面において、ヒトとウシの足跡を検出した。主に、南北方向への歩行を繰り返していることが観察できる（第62図第2面）。

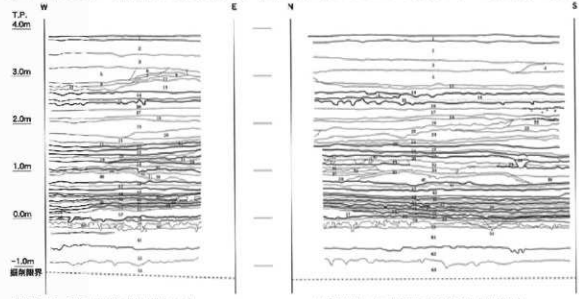
第2層を除去すると、暗緑灰色粘土の上面に同色の微砂を被った層（第3層・他トレンチでは第5～6層相当層）があらわれた。中世の小規模な洪水砂および耕作土であると思われる。この層内より瓦器椀片が2点出土した（第63図）。第63図43は浅い器形をもち、内面にのみ横方向のまばらな暗文を施す。14世紀大和型の製品である。第63図44も同様に内面にのみ暗文を施すが、13世紀後半期の楠葉型の製品である。第3層を除去すると、東西方向に並ぶ小溝を3本検出した（第62図第4面）。幅15～20cm、深さは5～8cmを測る。13～14世紀頃の耕作に伴うものと思われる。

第4層は、暗オリーブ灰色を呈する粘土層（他トレンチでは8～10層相当層）である。古代の耕作

上層であると考えているが、この年代決定は、出土遺物（第63図45・46）に依拠するものである。即ち45・46は、奈良時代後半期から平安時代初頭にかけて使用されたと考えられる製塩土器の一部であると思われる。胎土は粗く、厚手で椀形の器形を持つ。外面内面ともに調整は指オサエしくは指オサエのみである。類例は、平城京跡や長岡京跡からの出土品に多い。しかし、それらに比べて45・46は、口縁部が広く開く傾向にあることが特徴的である。

第4層を除去したところ、トレンチの南半部に東西方向へと流れる浅い溝を検出した。最大幅2m、深さ10cmを測る。この遺構からの遺物の出土はなかった。第4層の下には、厚さ60～80cmを測る砂層の堆積が認められた。これを第5層としたが、この層はこれまで第11層と呼称してきた古墳時代の洪水砂に相当するものである。第5層は、土質によって計4層に細分できる（第5－1・5－2・5－3・5－4層）。

第5－1層は、オリーブ黒色を呈する粗砂まじりシルトである。トレンチ全面において、ほぼ均一の厚さ（約10cm）で確認された。遺物を多く含むが、そのほとんどが細片であった。遺物の時期帰は6



1：7.5Y3/1オリーブ黒色　粗砂～中砂混じり植根砂～シルト
2：2.5GY3/1オリーブ黒色　シルト混じり植根～細砂　小礫（径1～3cm大）を含む
3：7.5Y7/1灰白色　礫（径3cm大以下）～中砂と7.5GY5/1緑灰色　植根砂の互層
4：5GY3/1オリーブ黒色　植根砂～シルト混じり礫～粗砂
5：10Y5/1灰色　植根砂～礫砂　小粒に礫を多く含む　ラミナ状に堆積
6：2.5GY4/1暗オリーブ灰色　植根砂混じり粘質シルト　礫～小粒を含む
7：7.5Y4/2灰オリーブ色　礫砂～中砂　若干シルトを含む
8：10Y3/2オリーブ黒色　植根砂混じり粘土　上部に植物遺体の濃縮あり
9：5Y5/2灰オリーブ色　植根砂～中砂　3色ブロック状に含む
10：2.5GY5/1オリーブ灰色　植根砂～シルトのブロックと7.5Y5/1灰色植根砂～礫砂
11：7.5Y4/1灰色　細砂層～粗砂混じり粘土　上部に植物遺体の濃縮あり　また同一層
12：10Y4/1オリーブ灰色　植根砂混じり粘土　上部に植物遺体の濃縮あり　また同一層
13：7.5Y5/1灰色～5Y5/2灰オリーブ色　小礫～植根砂
14：5GY5/1緑灰色～オリーブ灰色　粘土　中砂～植根砂を含む
15：7.5GY4/1暗緑灰色　粘土混じり植根～中砂　2.5GY5/1オリーブ灰色　植根砂～粗砂
16：10GY4/1暗緑灰色　粘質シルト　若干の砂を含む
17：5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土　上部に炭混あり
18：10Y3/2オリーブ黒色　粗砂混じりシルト　上部4層が多く混入
19：2.5GY5/1緑オリーブ灰色　植根混じり粘質シルト　径3cm未満の礫含む
20：7.5Y7/3灰黄色～5/1灰白色　植根砂じりシルト
21：10GY5/1緑灰色～5GY4/1暗緑色　粘土　若干植根含む
22：7.5Y4/3暗オリーブ色　植質シルト
23：10Y4/1灰色　粗砂～植根混じり粘質シルト
24：7.5GY4/2暗オリーブ色　植根　上部同一土壌色
25：7.5Y4/1灰色　粘土　下部では砂を含まより上は土まとまって赤土
26：7.5Y3/1黒色～5.2Y5/4オリーブ色　植根
27：5Y2/1黒色～4/1灰色　粘土　有機物を本平方向に供む
28：5Y3/1オリーブ黒色　粘土　若干植根、植物遺体を含む
29：5Y3/1オリーブ黒色　細砂混じり粘土～5Y4/2灰色オリーブ灰色　粗砂
　5.2Y5/4ラミナがみられる
30：5Y2/1オリーブ黒色～4/1灰色　粘砂混じり植質シルト　ビット埋土か？
31：5Y2/2オリーブ黒色　植砂混じり粘土　20～30層中に3層程片多く混入
32：5Y2/2オリーブ黒色～5/2灰オリーブ色　粘砂混じりシルト　遺構埋土
33：5Y2/1黒色　粘土　若干植物含む　5Y4/1灰色　粘土ブロック混入
34：7.5Y3/1黒色　粘土　若干の植物と植物遺体含む　上面に足跡あり
35：10Y3/1オリーブ黒色　粘砂混じり粘土
36：10Y3/1オリーブ黒色～4/1灰色　粘土
37：5Y3/1オリーブ黒色　粘土
38：10Y4/1灰色　粘土　10Y3/1オリーブ黒色　粘土ブロック混入
39：10Y4/1灰色　粘土　植物含む　30.2.6（ゲムだ色調
40：5Y2/2オリーブ黒色～5Y4/1灰オリーブ色　植砂
41：10Y5/2黄褐色　粘土
42：10Y3/1オリーブ黒色　粘土
43：2.5Y2/1黒色　植質シルト
44：5Y3/1オリーブ黒色　植砂質シルト
45：10Y3/2黒色　粘質シルト　若干植細砂含む
46：10Y3/1オリーブ黒色　粘質シルト　若干植細砂含む
47：10Y3/1オリーブ黒色　シルト～粘質シルト　植細砂含む
48：2.5Y4/1黄色　植細砂混じり粘質シルト
49：2.5Y5/1黄色　粘質シルト混じり植細砂～粗砂
50：5Y3/1オリーブ黒色　粘質シルト　植細砂含む
51：5GY4/1暗オリーブ灰色　植細砂混じり粘質シルト
52：7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　若干植細砂含む
53：7.5Y6/1灰色　粘質シルト　若干植細砂、有機物を含む
54：10Y4/1オリーブ灰色　粘質シルト　若干植細砂、有機物を含む
55：7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　若干植細砂含む
56：10Y3/1オリーブ灰色　植細砂混じり粘質シルト
57：5Y4/2灰オリーブ色　植粗砂～中砂　2.5GY4/1暗オリーブ灰色　植細砂混じり粘土
　植物遺体を多量に含む
58：10Y3/1オリーブ黒色　粘質シルト　植細砂　若干植砂含む　2Y5/3灰オリーブ色
　シルトを層中に挟む
59：5Y4/2灰オリーブ色　シルト～粘質シルト　植細砂、植物遺体含む
60：2.5Y4/1暗灰色　植細砂混じりシルト～粘質シルト　植物遺体を多量に含む
61：7.5Y4/1灰色　植細砂混じりシルト～粘質シルト　5Y4/1灰色
　植細砂（古山状？）を塊中に挟む
62：5Y4/1灰色　粘質シルト混じり植細砂　植物遺体を多く含む
　土ずれと考えこの様のラミナみられる
63：10Y4/1灰色　植細砂　植細砂～細砂、粘質シルトを含む

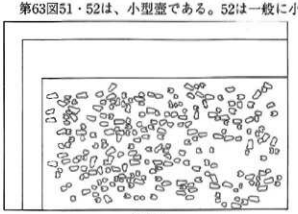
第61図　讃良郡条里遺跡（その3）　第⑤トレンチ断面図

世紀前半代の須恵器を下限とする。図化しうるものを第63図に掲げた（第63図48～58）。

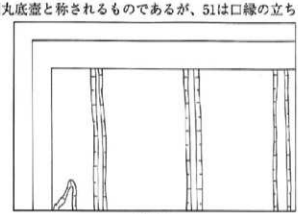
第42図47は、土師器甑の把手部分である。断面は、上面がやや凹んだ円形を呈する。古墳時代後期の製品である。48は、須恵器坏蓋である。天井部外面にはケズリ、他の部分には回転ナデを施す。天井部外面に一部ヘラ記号を有するが、残存部位は小さく、判読は困難であった。49は、須恵器坏身である。精緻な製品であるが、底部に大きな焼き歪みを持つ。48・49ともに6世紀初頭頃の製品である。

第63図50は、土師器壺の口縁部である。口縁外面はナナメ方向にハケメを施した後、指ナデによって整形する。口縁端部は、なでて端面を作り出した後、押圧して付文を施している。口縁内面は、ナナメ方向と横方向の細かいミガキが密になされている。胎土はにぶい褐色であり、中河内からの搬入品と見られる。多分に弥生土器の製作手法を用いてはいるが、生内期初頭の製品である。

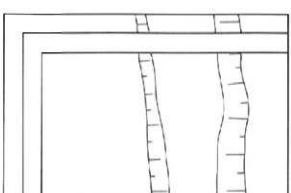
第63図51・52は、小型壺である。52は一般に小型丸底壺と称されるものであるが、51は口縁の立ち



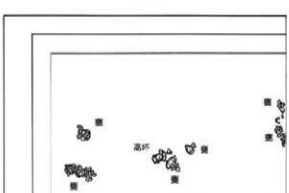
第2面



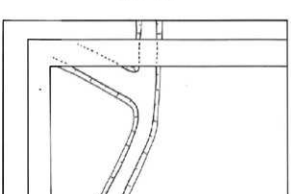
第4面



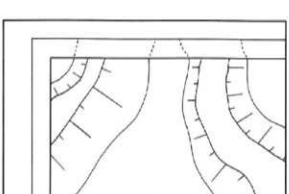
第5－1面



第5－3面



第9面



第11面

第62図　讃良郡条里遺跡（その3）　第⑤トレンチ平面図

上がりを観察する限りは、小型の短頸壺の類に属する製品である。52の口縁部には、ミガキの痕跡が内外面ともに残る。胴部1箇所に穿孔が認められる。ともに布留Ⅳ式期の製品であると思われる。

第63図53～58は、土師器の甕類である。器壁が薄く、細片での出土である為、全体復元できるものは少ない。53は一部にタタキ痕を残す庄内期の製品である。口縁部の内外面に、横方向のハケメを残す。54～58は、すべて布留式の特徴を備えた甕である。54・56・58は、口縁内面へのスリナデとつまみ上げによって、口縁端部にわずかな立ち上がりを作る。57は、口縁端部を丸く仕上げている。55は、トレンチ東南隅より、一固体分の土器片がまとまって出土したものである。器形は球形に近く、肩から胴にかけて最大径を測る。中央を窪ませた平底を持つ。その直径は4cm余と小さく、かろうじて自立はするものの、大変不安定である。調整は、体部に細かいハケメを施す。

5－1層を除去すると、ラミナが顕著に見られる砂層が現れた（第5－2層）。灰色～暗オリーブ灰色の粗粒砂が主体であり、厚さは30～60cmを測る。トレンチの北東から南西へ向かって、粘土ブロックおよび礫層が、大きくうねりながら筋状に滑り込む様相がトレンチ四方の壁断面において観察できた。洪水によって大量の土砂が流れ込んだことを示している。この層から出土した遺物の量は少なく、図化できたものは、第63図59・60のみである。ともに土師器甕の口縁であり、古墳時代前期の製品である。59は磨滅を受けているが、60は外面内面ともにヘラナデ調整を施した痕が明瞭に残る。

第5－2層を除去すると、暗緑灰色の粘土と粗砂の互層が現れた（第5－3層）。この層より、古墳時代前期の土師器が多く出土した（第64図）。個々の土器片は大きく、あまり磨滅を受けていない。

第64図61は、弥生土器の壺口縁部である。口縁端部に平面を作り出し、沈線を3条めぐらせる。外面には一部ハケメが残るものの、大半を横方向のナデによって擦り消している。内面には、粘土帯の接合痕が残る。胎土は褐灰色を呈する。弥生時代末期の製品である。

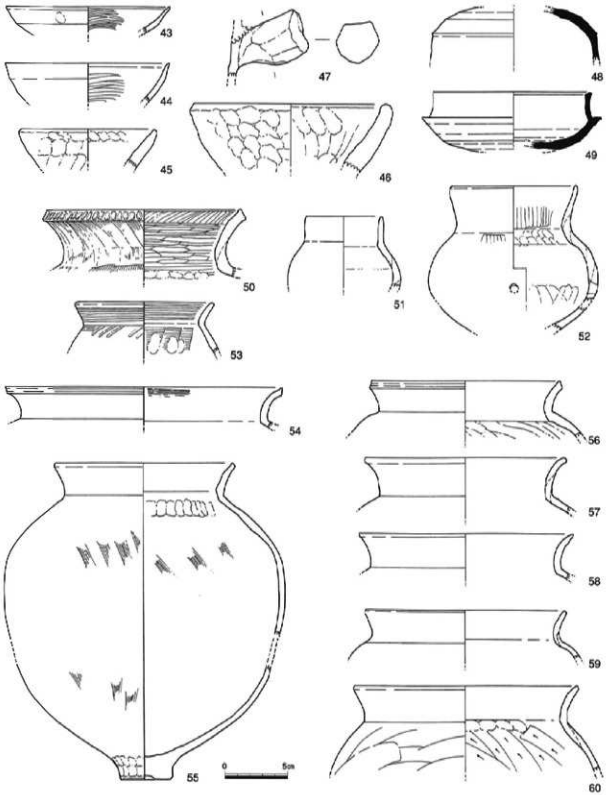
第64図63は、土師器二重口縁壺の頸部である。広口壺に口縁を付加した器形を持ち、多分に加飾を施す。大きく外反した口縁部には、原体幅1cm程度の工具による波状文が1条描かれている。頸部突帯は、断面三角形であり、表面に4点1セットの刻み目をめぐらせる。この突帯直下にも波状文が認められる。表面調整は縦方向の磨きであり、内外とも密に施されている。庄内式初期の製品である。

第64図64は、高坏坏部である。頻出するものに比べて坏の開きが小さく、傾斜が強い。口縁部は、強くなでて鋭角断面を作り出す。外面には縦方向、内面にはナナメ横方向のハケメを施す。66・76と並んで出土した。

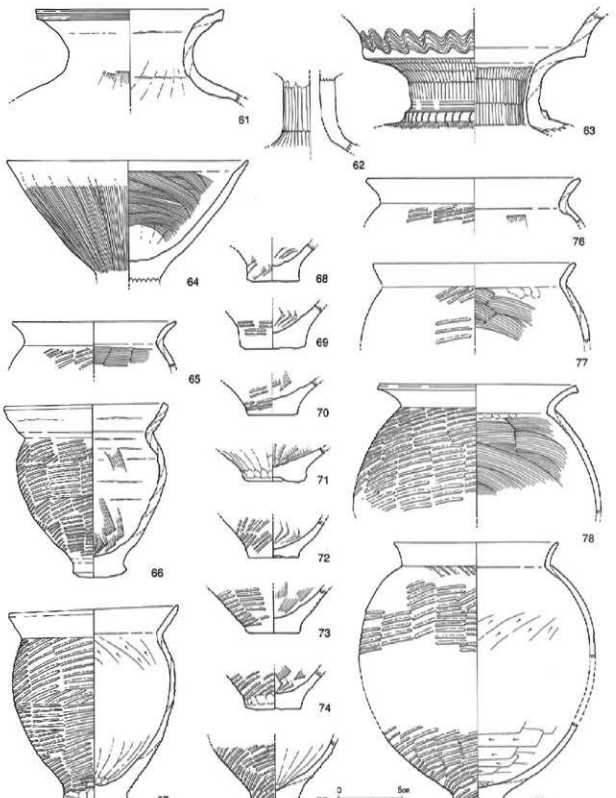
第64図65～79は、土師器甕である。小型で肩部に最大径を持つもの（66・67・75）と、中型で胴部に最大径を持ち、球形に近い体形を持つもの（65・70・76～79）とに大別できる。前者は弥生土器に近く、後者は土師器（庄内式）の特徴を備える。

第64図66は、ほぼ完形で出土した。小さな底部に比べて大きく開いた口縁を持つ。口縁端部は断面四角形、底部は平底であるが凹凸があるため安定が悪い。外面における調整は、右肩上がり方向の並行タタキを全体に施した後、肩部にのみほぼ水平方向のタタキ痕を残す。内面はハケ状工具でのナデ上げである。粘土の接合痕が随所に残るため、粗雑な印象を受ける。頸部外面に、煤が付着していた。第64図67も66と同様の体形を持つ甕であるが、やや大きく、器壁が薄い。底部は平底であるが、焼き歪みが大きいため自立は難しい。外面調整はやはりタタキである。内面は、ヘラ工具でのナデ上げである。

第64図65～78は、総じて外面にタタキ、内面に斜め乃至横方向のハケメを施す。75は、他に比べて小型である。78は、口縁部の開きが大きく、端部に面を持つ。79は、細片による図化復元である。外



第63図　陽良郡条里遺跡（その3）　第⑤トレンチ出土遺物実測図



第64図　讃良郡条里遺跡（その３）　第⑤トレンチ　第５－３層出土遺物実測図

面は前者同様並行タタキ、内面はヘラ工具での横ナデと斜め右上方向へのナデ上げが認められる。これらの製品の製作時期は、概ね古墳時代初頭～前期である。

第5－3層の下には灰オリーブ色粗砂が部分的に堆積していた（第5－4層）。水平方向のラミナが認められる。遺物の出土はなかった。

第5層を除去すると、有機物を多く含んだ黒褐色粗砂が現れ、この下にオリーブ黒色粘土層（第8層）を確認した。この層は、他トレンチにおいて弥生時代の水田面と推定している「第12層」に相当する。第8面では、トレンチ北半部において小畦畔を検出したが、足跡は確認できなかった。

第8層の下には、これに類似した黒色粘土が認められ、粗砂の混入度や土色の差異によって細分化しえたが（第9・11層）、各面において遺構の検出はできなかった。

第11層を除去すると、薄い灰色粘土層があり、この下に大畔状の遺構を検出した（第12面）。この遺構は、粗砂まじりの黒色粘土を主体とし、トレンチの真辺から北西・南西方向へと湾曲してのびている。最大幅は2m、高さは20cmを測る。足跡および遺物の検出はなかった。

第12層より以下は黒色粘土とオリーブ色黒色粘土の互層である。T.P.0m付近より以下に植物を多く含むシルト層であり、その下は水平方向のラミナを伴う砂層が堆積していた。このトレンチの掘削深度は、海成砂と推定される層までは達しなかった。

4．まとめ

以上、調査成果を述べた。今回の確認調査は、6m×4mという限られた面積における調査であったが、予測した以上の遺構数の検出と、遺物量の出土があった。

以下、時代を追いながら、調査地全体の遺構の変遷を若干の考察を交えながら述べて、この報告のまとめとする。

縄文時代

今回の調査では、縄文土器の出土および遺構の検出はなかった。また、縄文海進時に相当すると推定される土層堆積は、植物遺体を多く含む砂層・水生土壌・粘土と微砂の互層などであった。これらのことから、縄文時代における調査地周辺は海域もしくは海浜であり、陸からの河成堆積物が及ぶような、汀線に近い干潟の環境下にあったと推測される。

その後、海水面の低下と土砂の流入によって地形の上昇があり、黒色粘土が形成される湿地帯として陸地化したと考えられる。

尚、既往の調査において縄文土器が出土したトレンチは、現在の国道170号線（外環状線）より以東に限られている。即ち、今回調査した第⑤トレンチから確認調査（その1）の第⑦調査区までの約200mの間に、地形の変化線があったものと予測される。即ち、これより西地帯は、縄文人の起居に適さない湿潤な土地であったと思われる。

弥生時代

当地に人間が介入した最初の痕跡が認められるのは、弥生時代前期の段階である。局所的な洪水砂層が（その2）調査区で認められたように、自然地形の発達が顕著であった時期である。砂堆は徹高地化して居住域となり、低湿地においては水田耕作が営まれはじめたと考えられる。

弥生時代中期前半頃には、北東から南西へ下降する自然地形を利用した水田跡が、広い範囲にわたっ

て展開されていたものと考えられる。当然、これを耕作した人間の居住した集落も近隣に営まれていたものと予測される。

また、今回の調査では、弥生時代後期に相当する遺物が確認できなかった。このことから前期に開拓された水田が弥生後期まで存続したとは考えにくい。第④トレンチにおいて、水田面直上の洪水層から古墳時代初頭の遺構が検出されたことを考えると、弥生時代後期～末期頃にはすでに洪水砂の流入があり、耕作面は埋没していたと考えることも可能である。

古墳時代前期

弥生時代水田面を覆った洪水堆積層が、古墳時代前期包含層に相当する。しかし、今回の調査では、トレンチによって、この砂層の堆積状況に大きな差異が見られた。即ち、第④トレンチ以東では明確な遺構と遺物の出土が見られたのに対して、これより以西では、ラミナを伴った砂が厚く堆積するばかりで、遺物の混入すらほとんどなかったのである。これは、第④トレンチと第③トレンチの距離間（約80m）に、当該期における地形の変化線があったことを示している。

第④トレンチ・第⑤トレンチからは、主に庄内併行期（古墳時代初頭期）に属する遺物が多く出土した。特に、第④トレンチからは、供献土器を伴う墳丘墓とこれに先行する溝群・ピット群等の遺構を検出し、人間の直接関与を示す資料となった。また、第⑤トレンチでは河川堆土を掘り抜き、良好な残存状態を保つ土器の出土が相次いだ。これまでの讃良郡条里遺跡のイメージを一新する発見である。今後、近接する遺跡との比較検討を行うことによって、古墳時代前期におけるこの遺跡の性格を位置付けることができる貴重な資料である。

古墳時代後期

洪水砂の堆積によってきらなる地表の上昇を経たものの、再び湿潤な土壌の堆積が見られる時期である。しかし、その粘質土の中に確実に遺物が包含されており、人間の関与が認められる様相をみせる。

今回の調査では、第③・④・⑤トレンチから、6世紀～7世紀所産と考えられる遺物が出土した。特に第③トレンチでは大型の土坑状遺構を検出し、その埋没年代が6世紀末～7世紀初頭に求められることを明らかにした。この土坑状遺構がどのような性格を備えたものであったかが問題であるが、この時代の明確な遺構が検出されたことの意義は大きい。遺物の出土範囲から、第③トレンチより以東に遺構群が広がる可能性が高く、今後の調査が期待される。

奈良～平安時代

今回の調査では、古代に属する遺物の出土は希薄であった。第⑤トレンチからは、奈良時代後半から平安時代初頭に製作された遺物が若干出土したが、これより西側では遺物を伴う遺構は検出されなかった。

中世

今回、すべての調査区から、中世に属する遺物が出土した。中でも13世紀に所産時期を求められるものが多く、この時期には近隣において集落が展開されていた可能性がある。

また、第①トレンチ、第③トレンチでは、正方位に準ずる水田区画が検出され、条里地割の例として掲げることができる。しかし換言すれば、13～14世紀を遡る条里区画跡を確認することはできなかったのであり、その初源を古代条里制に求めることは難しいと言える。

いずれにせよ、周辺河川の整備や付け替えの歴史も含め、条里地割に関する歴史的考察には、周辺のさらなる調査成果を待つ必要がある。

掲載番号	トレンチ 層遺構	器種 器形	製作時期	法量 口径	胴径	底径	器高	最大厚	色調	施土 焼成	特徴
1	1Tr. 1層	瓦？	？					2.6	外：(10YR6/2)灰黄褐 内：(10YR4/1)褐灰 断：(10YR6/3)にぶい黄橙	× ×	側面・表面にスタンプ有。 鬼瓦か？
2	1Tr. 1層	染付 鉢	近代	11.0			(2.7)	(0.5)	釉：白 絵：藍 断：白	○ ○	
3	1Tr. 1層	須恵器 擂鉢	中世	24.0			(3.3)	(0.5)	外：(10YR5/1)褐灰 内：(N6/0)灰 断：(7.5YR5/1)褐灰	○ ×	
4	2Tr. 1層	染付 碗	近代	10.0			(3.0)	(0.4)	釉：白 絵：(5GY4/1)オリーブ灰 断：白	○ ○	外面に梅花の絵付。 釉内に気泡多くみられる。
5	2Tr. 1層	染付 碗	近代	10.0			(3.8)	(0.5)	釉：灰白 絵：藍・茶 断：白	○ ○	胎土中に細かい黒粒有。
6	2Tr. 1層	染付 碗	近代	11.0			(2.8)	(0.5)	釉：青白 絵：青 断：白	○ ○	胎土中に細かい黒粒有。
7	2Tr. 1層	施釉陶器 碗	近代以降	11.0		4.8	6.0	1.0	釉：(N7/0)灰白 絵：藍・緑灰 断：(2.5Y7/2)灰黄	◎ ○	外面体部に藍絵付。 底部外面に「犬山」施印。
8	2Tr. 1層	染付 碗	近世	11.0			(3.3)		釉：(2.5GY8/1)灰白 絵：藍 断：(N8/0)白	○ ○	口縁外面に灰色の色絵。 胎土中に細かい黒粒有。
9	2Tr. 1層	染付 皿	近世	11.0		6.0	3.7	1.1	外：(2.5GY6/1)オリーブ灰 内：(2.5Y8/1)灰白 断：(5Y7/1)灰白	○ ○	外面のみ灰色釉塗布。 肥前系（波佐見）産。
10	2Tr. 1層	染付 皿	近代	(10.0)			(2.0)	(0.4)	釉：灰白 絵：藍～群青 断：白灰	◎ ○	内外面に松の絵付。
11	2Tr. 1層	染付 皿	近世			4.0	(2.0)	(0.4)	外：(10GY8/1)明緑灰 内：(7.5Y8/1)明緑灰 断：白	◎ ○	外面のみ濃明緑灰色釉。 器壁薄い。
12	2Tr. 1層	染付 鉢	近代			7.0	(3.5)	(0.8)	外：(5GY8/1)灰白 内：(5GY8/1)灰白 断：(N7/0)灰白	○ ○	外面に笹葉状の絵付。
13	2Tr. 1層	染付 碗	近世	12.0			(3.9)	(0.4)	外：(2.5GY7/1)明オリーブ灰 内：灰白 断：灰白	△ ○	肥前系（波佐見）産。
14	2Tr. 1層	施釉陶器 碗	近世			4.0	(2.5)	1.1	外：(5Y8/1)灰白 内：(7.5YR7/2)明褐灰 断：(7.5YR7/3)にぶい橙	△ ×	見込・高台際に離れ砂付着。 釉内気泡多く凹凸有。 信楽産？
15	2Tr. 1層	施釉陶器 土瓶蓋	近世	13.0			3.3	0.5	外：(2.5Y7/3)浅黄 内：(2.5Y7/3)浅黄 断：(5Y8/2)灰白	○ ○	瀬戸産。
16	2Tr. 1層	瓦 井戸瓦	近代					2.8	外：黒灰 内：黒灰 断：灰白	△ ×	表面に三角形スタンプ。
17	2Tr. 1層	板状木器	近代？					0.8		—	孔2点有。
18	2Tr. 7-2層	須恵器 壺	中世？				(2.2)	(1.0)	外：(2.5Y6/1)黄灰 内：(2.5Y7/1)灰白 断：(2.5Y7/1)灰白	○ ○	肩に並行タタキ残る。 備前産？信楽産？
19	2Tr. 1層	須恵器 坏？	古墳後			10.0	(0.8)	1.0	外：(N5/0)灰 内：(N6/0)灰 断：(N7/0)灰白	△ ○	
20	2Tr. 11-1層	サヌカイト 剥片	縄文？	長辺7.0×短辺2.8				1.25			一部自然面残存。
21	2Tr. 11-1層	円筒埴輪	5C後～ 6C初				(5.3)	(0.7)	外：(10YR7/4～7.5YR6/4) にぶい黄橙～橙 内：(10YR7/4～7.5YR6/4) にぶい黄橙～橙	△ △	輪積み、感覚技法。 外面にハケメ残存。

第3表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（1）

掲載番号	トレンチ 層遺構	器種 器形	製作時期	法量 口径	胴径	底径	器高	最大厚	色調	胎土 焼成	特徴
22	3Tr. 7層	瓦器 椀	13C半	(13.5)			(2.7)	(0.4)	外：黒灰 内：黒灰 断：白灰	○ ○	口縁端部に段有。 内外ともにまばらな暗文。大和型。
23	3Tr. 7層	瓦器 椀	12C後	13.0			2.5	(0.4)	外：黒灰 内：黒灰 断：白灰	○ ○	口縁端部に段有。 大和型。
24	3Tr. 7層	瓦器 椀	12C半	14.0			(3.3)	(0.4)	外：黒灰 内：黒灰 断：白灰	○ ○	内面密な暗文。 楠葉型。
25	3Tr. 土坑1	須恵器 坏蓋	7C初	11.0			2.5	0.7	外：灰白 内：灰白 断：灰白	○ △	径1mmの灰色粒混入。 焼き歪み大きい。
26	1Tr. 1層	須恵器 坏蓋	7C初	12.0			(3.5)	(0.7)	外：灰白 内：灰白 断：灰白	△ ○	径2mmの白色礫混入。
27	2Tr. 1層	須恵器 坏蓋	6C末	14.0			(2.7)	(0.6)	外：灰白 内：灰白 断：灰白	○ ○	頂部に線刻（一部）有。
28	2Tr. 11-1層	須恵器 坏身	7C前後	(12.0)			(2.5)	(0.5)	外：青灰白 内：灰 断：(2.5YR4/1)赤灰	× ×	径2mmの長石粒混入。
29	3Tr. 7層	須恵器 提瓶	7C前	(40.0×3.0)				(0.6)	外：(2.5GY3/1)暗オリーブ灰 内：(2.5GY3/1)暗オリーブ灰 断：灰白	○ △	把手部、浮文貼付。
30	3Tr. 土坑1	須恵器 提瓶	6C末	5.3	17.5		(18.0)	(0.8)	外：灰 内：灰 断：(10R6/1)赤灰	△ △	ほぼ完形で残存。 把手部、形骸化。
31	3Tr. 土坑1	一木 勘	6C～7C	身部残存幅13.7×残存厚3.2 柄部1.8×2.5							柄部に孔有。「窓」か？ 金属製刃部、装着痕残存。
32	3Tr. 残土内	円筒埴輪	5C	残存法量　4.9×5.8				1.8	外：(10YR7/3)にぶい黄橙 内：(10YR6/2)灰黄褐 断：(10YR5/1)褐灰	△ △	タガ残存。
33	4Tr. 1層	染付 鉢	近世	12.0			(2.3)	(0.3)	釉：(7.5Y7/2)灰白 絵：藍 断：白	○ ○	外面に扉草の絵付。
34	4Tr. 1層	染付 鉢	近世			5.0	(3.5)	(0.7)	外：(7.5GY8/1)明緑灰 内：(5B8/1)明青灰 断：灰白	○ ○	胎土中に細かい黒粒有。
35	4Tr. 1層	染付 杯	近世	7.0		2.4	3.5	0.7	釉：灰白 絵：藍内 断：白	○ ○	外面に波状の絵付。
36	4Tr. 1層	染付 皿	近世			(5.0)	(2.0)	(0.5)	外：灰白 内：青白 断：(N8/0)灰白	○ ○	胎土の灰色味が強い。 内面に雲、外面に葛の絵付。
37	4Tr. 機械層	染付 鉢	近代	(22.0)			(5.5)	(0.5)	外：白 内：藍 断：白	○ ○	内面に松、外面に唐草の絵付。 量産品。
38	4Tr. 10層	須恵器 坏蓋	6C前	12.0			(3.5)	(0.5)	外：青灰白 内：青灰白 断：青灰白	△ ○	径0.5mmの白粒多く混入。
39	4Tr. 10層	土師器 甕	古墳前	19.5					外：(2.5Y6/3)にぶい黄 内：(2.5Y6/2)灰黄 断：(2.5Y5/2)暗灰黄	× △	弥生系布留型甕。
40	4Tr. 11-2面	土師器 甕？	庄内古	9.3		11.4	3.1	1.0	外：(10YR6/6)明黄褐 内：(10YR6/6)明黄褐 断：(10YR6/2)灰黄褐	△ ○	供献土器（62とセット）。 細孔2点有。 径1mmの灰白礫少量混入。
41	4Tr. 11-2面	土師器 短頸壺	庄内古	(9.0)	14.5	3.4	11.0	0.7	外：(10YR6/6)明黄褐 内：(10YR6/6)明黄褐 断：(10YR6/2)灰黄褐	△ ○	供献土器（62とセット）。 2方向からの穿孔有。 径1mmの灰白礫少量混入。
42	4Tr. 11-2面	土師器 甕	弥生末～庄内初	12.0	17.0	5.6	23.5	0.8	外：(2.5Y5/2)暗灰黄 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y5/1)黄灰	△ △	供献土器。 外面に煤付着。 径2mm乳色礫多く混入。

第4表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（2）

掲載番号	トレンチ層遺構	器種器形	製作時期	法量 口径	胴径	底径	器高	最大厚	色調	胎土 焼成	特徴
43	5Tr. 側溝	瓦器 椀	14C	(13.0)			(2.2)	(0.4)	外：黒灰 内：灰 断：灰白	○ △	内面のみ、まばらな暗文。大和型。
44	5Tr. 側溝	瓦器 椀	13C後	13.0			(3.0)	(0.4)	外：灰白 内：灰白 断：灰白	○ ○	内面にやや太めの暗文。楠葉型。
45	5Tr. 5-1層	製塩土器	奈良？	(11.0)			(3.0)	(1.0)	外：(10YR5/3)にぶい黄褐 内：(10YR5/3)にぶい黄褐 断：(10YR3/1)黒褐	× ×	内面剥離。
46	5Tr. 5-1層	製塩土器	奈良後～平安	16.0			(5.3)	(1.5)	外：(2.5Y7/2)灰黄 内：(7.5YR6/2)灰褐 断：(7.5YR6/2)灰褐	× ○	椀型。
47	5Tr. 5-1層	土師器 甑	古墳後					3.3	外：(5YR6/8)橙 内：(2.5YR6/8)橙 断：(10YR4/3)にぶい黄褐	○ △	把手部。
48	5Tr. 5-1層	須恵器 坏蓋	6C前	(13.5)			(4.1)	(0.7)	外：灰白 内：灰白 断：灰白	◎ ○	
49	5Tr. 側溝	須恵器 坏身	6C前	12.0			(4.5)	(0.7)	外：灰白 内：灰白 断：灰白	◎ ○	焼き歪み有。
50	5Tr. 側溝	土師器 甕	弥生末～庄内	(16.0)			(5.5)	(0.9)	外：(2.5Y6/2)灰黄 内：(5.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y6/3)にぶい黄	△ ○	径２mm未満の白色礫混入。中河内からの搬入品か？
51	5Tr. 5-1層	土師器 小型鉢？	布留Ⅳ？	(6.0)	(9.0)		(5.5)	(0.5)	外：(10YR6/4)にぶい黄橙 内：(7.5YR6/4)にぶい橙 断：(10YR6/3)にぶい黄橙	△ ×	径１mm未満の白色礫多く混入。 くびれ屈曲が甘い。小型の長頸壺？
52	5Tr. 5-1層	土師器 小型壺	布留Ⅳ	(10.2)	(13.4)		(11.5)	(0.7)	外：(2.5Y6/2)灰黄 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y5/3)黄褐	△ △	径３mm未満の灰白色礫混入。 口縁に黒斑有。内面からの穿孔１点有。
53	5Tr. 5-1層	土師器 甕	古墳前	(11.0)			(3.8)	(0.5)	外：(2.5Y6/3)にぶい黄 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y6/3)にぶい黄	× △	径３mm未満の白色礫多く混入。
54	5Tr. 5-1層	土師器 甕	古墳前	(22.0)			(3.0)	(0.5)	外：(10YR7/4)にぶい黄橙 内：(10YR7/4)にぶい黄橙 断：(10YR7/4)にぶい黄橙	× △	径５mm未満の白色礫多く混入。
55	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳前 布留	14.0	22.0	4.2	(25.0)	(0.7)	外：(10YR6/4)にぶい黄橙 内：(5YR6/6)橙 断：(5YR6/6)橙	× △	断片による図上接合。 布留甕。
56	5Tr. 5-1層	土師器 甕	古墳前 布留	15.0			(4.5)	(0.7)	外：(5YR6/4)にぶい橙 内：(10YR4/1)褐灰 断：(10YR7/2)にぶい黄橙	△ △	径５mm未満の白色礫多く混入。
57	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳前 布留	(16.0)			(4.0)	(0.5)	外：(10YR6/3)にぶい黄橙 内：(10YR6/3)にぶい黄橙 断：(10YR4/1)褐灰	△ △	
58	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳前 布留	(17.0)			(3.5)	(0.5)	外：(5YR6/4)にぶい橙 内：(10YR5/3)にぶい黄橙 断：(5YR6/6)橙	× △	径１mm未満の灰白色礫混入。
59	5Tr. 5-2層	土師器 甕	古墳前	(16.0)			(3.5)	(0.4)	外：(2.5Y7/2)灰黄 内：(2.5Y7/2)灰黄 断：(2.5Y7/2)灰黄	× △	径２mmの灰・白色礫多く混入。
60	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳前	18.0			(6.5)	(0.7)	外：(7.5YR5/4)にぶい褐 内：(7.5YR5/6)明褐 断：(7.5YR5/4)にぶい褐	× ○	
61	5Tr. 側溝	弥生土器 壺		13.0			(5.0)	(0.9)	外：(2.5Y6/2)灰黄 内：(2.5Y6/1)黄灰 断：(2.5Y7/2)灰黄	○ △	径１mm未満の白色礫混入。 断片による図上復元。
62	5Tr. 側溝	土師器 高坏	古墳初		(4.0)		(5.2)	(1.2)	外：(2.5Y6/3)にぶい黄 内：(10YR6/3)にぶい黄橙 断：(2.5Y5/2)暗灰黄	△ △	径0.5mm未満の白色礫多く混入。
63	5Tr. 5-3層	土師器 二重口縁 壺	古墳初	10.2			(8.0)	(1.1)	外：(10YR6/4)にぶい黄橙 内：(10YR7/3)にぶい黄橙 断：(10YR5/1)褐灰	× △	装飾、施文多い。 径１～２mm未満の白色礫多く混入。

第５表　讃良郡条里遺跡（その３）　出土遺物一覧（３）

掲載番号	トレンチ 層遺構	器種 器形	製作時期	法量 口径	法量 胴径	法量 底径	法量 器高	法量 最大厚	色調	胎土 焼成	特徴
64	5Tr. 5－3層	土師器 高坏	古墳初	19.4			(9.5)	(1.2)	外：(10YR6/2)灰黄褐 内：(10YR6/2)灰黄褐 断：(10YR5/2)褐灰	○ ○	坏部の傾斜がきつく、特殊。
65	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初	(13.0)			(3.5)	(0.5)	外：(2.5Y7/2)灰黄 内：(2.5Y7/2)灰黄 断：(10YR5/3)にぶい黄褐	△ ○	径2mm未満の白色礫混入。
66	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初	13.0	12.0	4.2	13.5	1.6	外：(2.5Y6/2)灰黄 内：(10YR5/3)にぶい黄褐 断：(10YR6/4)にぶい黄橙	△ △	粘土の継目が目立ち、粗製。 径1mm未満の白色粒混入。 ほぼ完形で出土。
67	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初	13.6	13.2	4.9	15.8	(1.5)	外：(10YR8/3)浅黄橙 内：(10YR7/1)灰白 断：(10YR8/4)浅黄橙	△ △	内面一部黒斑有。
68	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初			4.0	(3.0)	(1.3)	外：(10YR6/3)にぶい黄橙 内：(10YR5/1)褐灰 断：(10YR6/2)灰黄褐	○ ○	径1mmの白砂、僅かに混入。 内面一部に煤付着。
69	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初	(5.0)			(3.0)	(1.3)	外：(10YR6/3)にぶい黄橙 内：(10YR5/1)褐灰 断：(10YR6/2)灰黄褐	× ×	径1mm未満の砂粒多く混入。
70	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初			(4.0)	(2.5)	(1.2)	外：(5YR5/4)にぶい赤褐 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y6/3)にぶい黄	× ×	径2mm未満の白色礫多く混入。
71	5Tr. 側溝	土師器 壺	古墳初			5.0	(2.5)	(1.5)	外：(10YR6/4)にぶい黄橙 内：(10YR6/4)にぶい黄橙 断：(7.5YR5/4)にぶい褐	△ ○	径2mm未満の白色礫多く混入。 丁寧な整形。
72	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初			4.0	(3.5)	(0.6)	外：(10YR6/3)にぶい黄橙 内：(10YR5/1)褐灰 断：(10YR6/2)灰黄褐	△ ×	径3mm未満の白色礫多く混入。
73	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初			4.2	(3.2)	(1.3)	外：(2.5Y6/3)にぶい黄 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y6/3)にぶい黄	× ○	径4mm未満の白色礫多く混入。
74	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳初			4.5	(2.8)	1.2	外：(7.5YR6/4)にぶい橙 内：(10YR6/4)にぶい黄橙 断：(10YR6/3)にぶい黄橙	△ △	径1～2mm未満の乳白色礫多く混入。
75	5Tr. 5－2層	土師器 甕	古墳初			3.6	(4.8)	(0.9)	外：(10YR5/3)にぶい黄褐 内：(2.5Y6/3)にぶい黄 断：(2.5Y6/3)にぶい黄	× △	径4mmの褐･白色礫多く混入。
76	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初 庄内	(17.0)			(3.5)	(0.6)	外：(10YR5/3)にぶい黄褐 内：(2.5Y6/2)灰黄 断：(2.5Y6/2)灰黄	× △	径3mm未満の灰白･褐色礫多く混入。 器壁薄いが粗製。
77	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初 庄内	(16.0)			(6.2)	(0.6)	外：(7.5YR6/6)橙 内：(7.5YR6/4)にぶい橙 断：(7.5YR7/6)橙	△ ×	径2mmの灰白色礫混入。
78	5Tr. 5－3層	土師器 甕	古墳初 庄内	(16.0)	(19.0)		(10.0)	(0.5)	外：(2.5Y6/2)灰黄 内：(2.5Y6/2)灰黄 断：(10YR6/3)にぶい黄橙	△ ○	器壁薄く焼成良好。 庄内甕。
79	5Tr. 側溝	土師器 甕	古墳初 庄内	13.0	(18.5)	4.0	(20.5)	(0.5)	外：(10YR5/2)灰黄褐 内：(2.5Y6/2)灰黄 断：(2.5Y6/2)灰黄	△ △	径1mm未満の白色礫混入。

第6表　讃良郡条里遺跡（その3）　出土遺物一覧（4）

トレンチ名	X	Y	L	トレンチ名	X	Y	L
第2－1調査区（北西点）	-139252.133	-33877.162	3.175	第3－2トレンチ（南西点）	-139149.780	-33752.144	3.639
第2－1調査区（北東点）	-139252.197	-33871.107	3.164	第3－2トレンチ（北西点）	-139149.022	-33752.275	3.625
第2－1調査区（南東点）	-139256.237	-33871.150	3.124	第3－2トレンチ（北東点）	-139145.719	-33746.507	3.602
第2－2調査区（北東点）	-138280.548	-33859.508	2.823	第3－3トレンチ（南西点）	-130151.160	-33710.614	3.647
第2－2調査区（南東点）	-139284.600	-33859.723	2.860	第3－3トレンチ（北西点）	-139147.417	-33710.419	3.613
第2－2調査区（南西点）	-139284.289	-33865.576	2.868	第3－3トレンチ（北東点）	-139147.752	-33704.604	3.612
第2－3調査区（北東点）	-139224.496	-33820.308	3.102	第3－4トレンチ（北西点）	-139072.080	-33665.604	4.314
第2－3調査区（南東点）	-139248.564	-33820.731	3.100	第3－4トレンチ（南西点）	-139075.775	-33665.617	4.294
第2－3調査区（南西点）	-139247.955	-33826.595	3.059	第3－4トレンチ（北東点）	-139071.744	-33660.194	4.349
第3－1トレンチ（南西点）	-139196.748	-33804.704	3.281	第3－5トレンチ（南西点）	-139036.901	-33603.201	4.134
第3－1トレンチ（北西点）	-139193.065	-33804.926	3.247	第3－5トレンチ（北西点）	-139031.155	-33603.211	4.148
第3－1トレンチ（北東点）	-139192.754	-33799.216	3.265	第3－5トレンチ（北東点）	-139031.248	-33599.518	4.140

第7表　讃良郡条里遺跡（その2・3）　トレンチ単点一覧

近世

今回の調査では、近世に属する遺物は豊富に出土したが、近代の洪水砂に含まれるものも多く、北側の新家集落内からの廃棄物が流入したものかと思われる。調査地内では、全面的に水田が営まれていたことが明らかとなった。

近代

今回の調査では、大規模な洪水によって、水田が一時埋没したことが確認できた。また、近代の木組遺構の出土は、発掘調査が民具学分野にも貢献できることの証左として、報告できるものである。

（黒須）

＜参考文献＞

i　大阪府教育委員会　2001『大阪府文化財分布図』

ii　大阪府教育委員会　1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』

iii　㈱ジャパン通信情報センター　2001『文化財発掘出土情報』9月号

iv　大阪府教育委員会　1989『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅰ』
1991『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ』
1992『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅲ』

v　寝屋川市教育委員会　1993『長保寺遺跡』

vi　寝屋川市教育委員会　1987『高宮八丁遺跡』
1992『高宮八丁遺跡Ⅱ』

vii　㈶大阪市文化財協会　1995『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』
㈶大阪府文化財調査研究センター　2000『恩智・福万寺遺跡Ⅰ』
大阪府教育委員会　1991『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ』

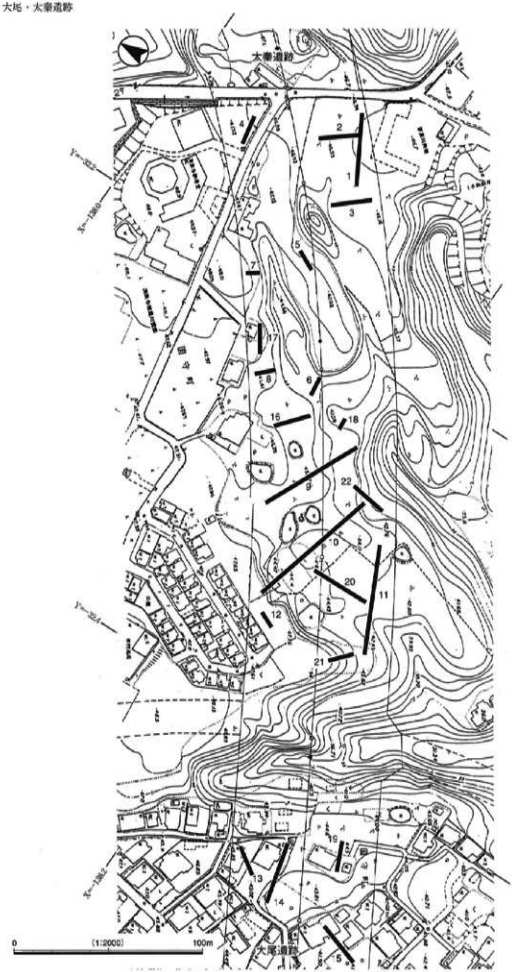
第3節　大尾・太秦遺跡

1．調査に至る経緯と調査方法（第65・66図）

本調査は一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設に先立つ埋蔵文化財の確認調査である。調査地は寝屋川市国守町に所在する幅約75m、延長約450mの範囲であり、尾根筋とそれに伴う谷筋とが複雑に入り組む、起伏に富んだ地形を呈する。その大半は現在竹林と化しているが、一部には20年程前まで営まれていた水田の痕跡が明瞭に残る。また谷の一部には近年の埋め立てにより、本来の地形を窺うことができない箇所もある。調査地の東側と西側に接する地域は、既に平成13年度に当センターによって大尾遺跡と太秦遺跡の発掘調査が実施されており、大尾遺跡では弥生時代中期後半の方形周溝墓群をはじめ、7世紀から8世紀の集落跡や中世の墓地が、太秦遺跡では前方後円墳と円墳がそれぞれ1基ずつと、方墳11基が確認されている。したがってこの両遺跡の範囲がさらに当調査地内に広がることが十分予想された。平成12年度には小路遺跡として、調査地内のうちの大尾遺跡寄りに位置する深い谷部についての確認調査が既に実施されているが、特に顕著な遺構が確認されなかったため、今回はその谷部を除く箇所を対象に、大尾遺跡と太秦遺跡の範囲がさらにどこまで広がるか、また遺構が検出された場合にはその深度を確認する目的で、地形に則し22箇所の調査区を設定して確認調査を実施した。現地調査期間は平成14年3月から同年6月まで、調査面積は1,023㎡である。

調査はまず竹林等の伐開からはじめ、重機にて表土・盛土を除去した後、人力にて包含層を除去し遺構検出を行った。なお、各調査区の幅は2mを基本としたが、壁面の安全勾配を考慮し、遺構面までが深いと予想される場合には、あらかじめ幅を広げて掘削した。

第65図　大尾・太秦遺跡　調査地位置図



第66図　大尾・太秦遺跡　調査区配置図

2．調査成果

22箇所の調査区のうち、1～12・16～18・20～22トレンチの18箇所は太秦遺跡側に、13～15・19トレンチの4箇所は大尾遺跡側に設定した（第66図）。

太秦遺跡側（第67～72・74～77図）

1～3トレンチ

太秦遺跡側から延びる尾根上のもっとも太秦遺跡寄りに位置する。1トレンチは道路予定地の南辺に沿って南西―北東方向に、2トレンチは1トレンチの北側に1トレンチとT字に接するように、3トレンチは1トレンチ西端から約7m隔て南東－北西方向に、それぞれ2.6m×40m、2.6m×21m、2.7m×22mの調査区を設定した。いずれも約20～30cmの竹林表土層を除去した面が直ちに地山（遺構面）となるため、機械掘削を終了した段階で黒色の古墳周溝が明瞭に確認できる。

精査によって周溝は1トレンチで6条（周溝3～8）、2トレンチで2条（周溝1・2）、3トレンチで1条（周溝9）を検出した。周溝1は幅約1～1.5m、深さ30cmを測り、南端が東にL字に屈曲し周溝2となる。周溝2は幅約2.5m、深さ56cm、周溝3は幅約1.6～2.5m、深さ16cmを測る。周溝4は1トレンチ南壁際に一部がかかっているだけであり、全体規模は不明。周溝5は幅約1.4m、深さ18cmで、北端が東にL字に屈曲する。周溝6は幅約1.7～2.2m、深さ58cm、周溝7は幅約1m、深さ23cmを測る。周溝8は1トレンチ北壁際に一部がかかっているだけであり、全体規模は不明であるが、おそらく周溝2の延長部と思われる。周溝9は幅約35cm、深さ約10cmと他の周溝に比べ非常に細いが、平面的な位置関係から1トレンチ周溝3の延長部と思われる。周溝3も他の周溝に比べ浅くなっていることから、おそらく周溝の上部が削平され、底部のみが残ったものと思われる。この周溝9内から土師器甕が出土した。供献土器の可能性がある。それぞれの周溝には基本的に下から黄褐色の地山ブロック土、黒色砂質シルト、黄褐色砂質土が凹レンズ状に堆積する。

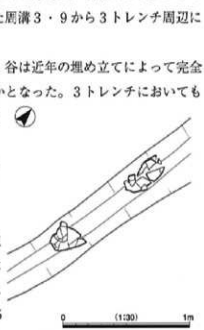
以上9条の周溝のうち、周溝1・2・8から方墳1が、周溝5・6から方墳2が復原でき、少なくとも1・2トレンチ周辺に2基の方墳が存在したことが判明する。また周溝3・9から3トレンチ周辺にもさらに1基の方墳があったことが推定できる。

なお、2トレンチ北端部では、北側の谷に向かう斜面を検出した。谷は近年の埋め立てによって完全に埋没しているが、これによって古墳が立地する尾根の輪郭が明らかとなった。3トレンチにおいても北端部で緩やかな斜面を検出したが、2トレンチの斜面に対応するような急勾配な谷斜面は、調査区の北側からとなる。

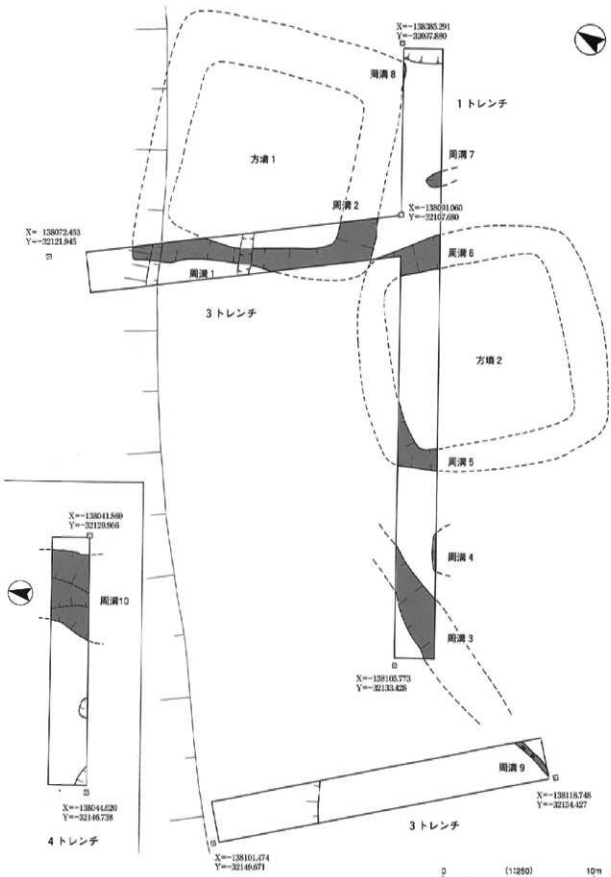
2トレンチの周溝1から5世紀後半の須恵器蓋坏（第74図1・2）が出土した。

4トレンチ

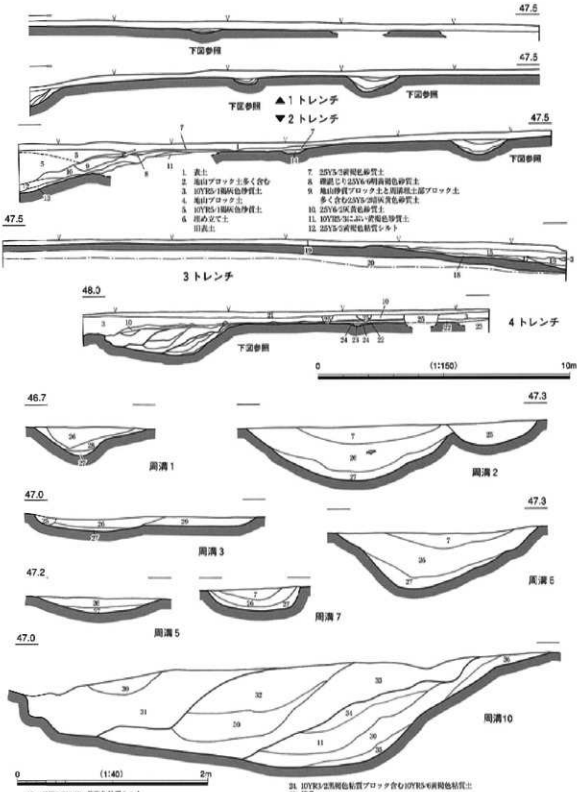
このトレンチも太秦遺跡に隣接するが、1～3トレンチとは現在埋め立てられている谷を1つ隔てた北側の尾根上にあたる。現在は清風寺の駐車場として利用されており、その一画に東西方向に2.5m×16mの調査区を設定した。層序は上から駐車場の砕石が約15～20cm、地山ブロック土の盛土が約20cmから東端のもっとも厚い



第67図　大尾・太秦遺跡
3トレンチ周溝9出土土師器



第68図　大尾・太秦遺跡　１～４トレンチ平面図



第69図　大尾・太秦遺跡　1～4トレンチ断面及び周溝断面図

部分で約70cmあり、その下に古墳時代の包含層と思われる灰黄褐色粘質シルト（1層）が約10cm堆積し、地山（遺構面）となる。また盛土と1層との間には部分的に灰黄色砂質土が薄く広がる。

地山の上面で調査区を横断する古墳の周溝を3条（まとめて周溝10）と土坑状の遺構を2箇所で検出した。周溝10は幅4.65～5.6m、深さ1.15mを測り、断面観察によって、この中に3条の周溝が重なり合っていることが明らかとなった。それぞれの埋土には1～3トレンチの古墳周溝埋土と酷似した黒褐色粘質シルトが多く含まれており、周溝1～9同様に遺構検出は容易である。この重なりが古墳の切り合いによるものなのか、周溝の掘り直しによるものなのかは判然としない。土坑状の遺構は両者とも調査区南壁際に一部がかかっているだけであり、平面形や全体規模は不明である。埋土が黒褐色の粘質土であることから、これらの遺構も古墳の周溝の一部であった可能性が高い。

1層と周溝10から土師器小片が出土した。

5トレンチ

1～3トレンチが立地する尾根と4トレンチが立地する尾根との間の大きな谷筋上に位置する。ここは近年に埋め立てられており、現在では逆に尾根状の地形を呈している。この尾根状に延びた埋め立て土の上に、本来の谷の深さを確認する目的で、2.8m×12m、南西－北東方向のトレンチを設定し重機掘削を行った。しかしG.L－約4.5mまで掘削しても地山を検出することは出来なかったため、写真撮影・図面作成の後、危険回避のため直ちに埋め戻した。谷の復原は第77図に示した。

6トレンチ

5トレンチ南西の尾根斜面に位置する。5トレンチ側から尾根状に延びる谷の埋め立て土の先端にもあたり、現地形は本来の尾根斜面と埋め立て土の斜面とによって挟まれた浅いU字状を呈している。尾根斜面の等高線と直交するように2.45m×11mの調査区を東西方向に設定した。調査区西半は東側に向けて下がる尾根斜面であり、約15～20cmの表土層と、部分的に堆積する約10～20cmの灰黄色砂質土を除去した面が地山となる。特に顕著な遺構は検出できなかった。この地山の斜面は若干勾配を急にしてそのまま調査区東半にもつづき谷底へと至るが、上記のとおり東半は表土層から地山までの間がすべて埋め立て土であることが確認された。なお遺物は出土しなかった。

7トレンチ

5トレンチの西北、4トレンチが位置する尾根上のもっとも谷寄りの斜面際に位置する。谷の斜面に直交するように2.3m×7mの調査区を南東―北西方向に設定した。層序は砕石、浅黄色中砂など現代の盛土の下に旧表土層と、近世以降の盛土と思われる黒褐色粘質シルトが合わせて約50cm全体に堆積する。調査区南半は南の谷に向けて緩やかな斜面となっており、その下にはさらに地山ブロック土を多く含む暗青灰色粘質シルトが約20～30cmと、部分的に礫層や暗灰黄色砂質土、明褐色粘質土などの盛土層が約15～20cmあり、地山（遺構面）となる。調査区北半は黒褐色粘質シルト層の下に近世以降の遺物包含層と思われるにぶい黄色砂質土が6～8cmと、地山小ブロック土と炭を少量含む灰黄褐色粘質シルトが約12cm堆積し、地山となる。調査の段階ではこの地山上面で遺構検出を行ったが、断面観察の結果、灰黄褐色粘質シルト層は遺構埋土であり、実際の遺構面は灰黄褐色粘質シルト層上面であることが判明した。

検出した遺構には溝、土坑（土坑1ほか）、ピット等がある。溝は調査区を横断するように延び、溝より北側が一段高くなる。この一段高い北側には上記の灰黄褐色粘質シルトが堆積し、同じ土が溝内にも堆積する。灰黄褐色粘質シルト層除去後の面でピット6基を検出していること、また溝の壁がほぼ垂

直に落ちることなどから、溝から北側が竪穴住居址であった可能性が考えられる。この溝の南側には溝を切るように大型の土坑1や、小土坑、ピット等がある。これらの遺構の上面には薄い炭層が認められ、土坑には上面が赤く焼けたものがある。竪穴住居址が切り合っていた可能性も考えておきたい。

溝や土坑1の上層からは中期後半の弥生土器片（第74図3）のほか、サヌカイト剥片（図版44－61）が出土した。

8トレンチ

6トレンチの北に位置する。7トレンチ同様に尾根上のもっとも谷寄りに2.5m×11m、南東－北西方向の調査区を設定した。かつての水田区画の段が現地形にかすかに残っており、15～25cmの表土層を除去すると、東西方向に延びる段がさらに明瞭となった。層序は北端の上段側には、表土層の下に近世以降の遺物包含層である暗灰黄色砂質土が6cmと、黄褐色粘質シルト（1層）が8～12cm、下段側にはにぶい黄褐色砂質土が約10cm堆積し、地山（遺構面）となる。

段周辺の地山上面でピット5基を検出した。うち3基は柱痕跡を残しており、掘立柱建物跡の柱穴であった可能性が高い。また調査区南端部には谷の斜面が一部かかる。斜面は水田造成の際に地山を削った土で盛られていたことがわかる。なお、水田区画の段は高低差が約40cmあり、段の裾には段と並行する溝を設けている。

1層から施釉陶器碗（第74図4）が1点出土した。釉薬は天目に酷似するが、中世の天目茶碗独特のプロポーションでなく、おそらく近世以降のものと思われる。

9トレンチ

6・8トレンチの南西に位置する。周辺には溜池が点在し、かつての水田区画の段が現地形に明瞭に残る。水田造成によって平坦となっている尾根上から東の谷斜面に向けて、2.3m×57m、南東－北西方向の調査区を設定した。調査区内には上、中、下の3段の平坦部が認められ、中段と下段とは高低差約1.2mの大きな段差となる。層序は上段では約20cmの表土層の下に灰黄褐色粘質シルトが約10～25cmと、礫と褐灰色粘質土を含む明黄褐色砂質土が約10cm堆積し、地山（遺構面）となるが、中段では約25cmの表土層と約5～10cmの弥生時代中期後半から7世紀の遺物包含層である褐灰色砂質土（1層）の下が地山（遺構面）となる。下段のもっとも中段寄りには水田耕作に伴う幅約4mの大きな溝があるため、周辺の層序が乱れる。包含層は残っておらず、G.L.-30～45cmで地山に達する。調査区東端は谷の斜面にあたっており、地山は東端に向かうにつれて徐々に下がる。この斜面には約30cmの表土層の下に水田造成時の盛土が約10cmあり、その下には近世以降の遺物包含層である灰黄色砂質土（2層）が約60cm、弥生時代中期から古代の遺物包含層と思われる暗褐色粘質シルトが約15cm、自然堆積層と思われる礫を多く含む灰黄色細砂が約40cm堆積する。

地山上面で竪穴住居址2棟（竪穴1・2）、溝（溝1）、土坑2基（土坑1・2）、ピット等を検出した。竪穴1・2は中段で検出した。両者とも平面形は隅丸方形を呈するが、一部のみの検出であったため、全体規模は不明である。水田造成によって上面を削平されているため、竪穴1は深さ6cm程度しか残っていない。溝1は竪穴住居址の西側で検出した。東西方向の溝で、水田耕作に伴う溝によって一部を切られる。幅約2.7m、深さ30cm以上（底未確認）を測り、埋土には下層に明褐色砂質土、上層に灰黄褐色砂質シルトが堆積する。土坑1・2は下段の谷へ落ちる斜面際で検出した。これにより尾根上に広がる遺構が尾根の斜面際まで遺存していることが確認された。土坑1はその形状から隅丸方形を呈する竪穴住居址の一部とも考えられるが、埋土は竪穴1・2とは若干異なる礫を含む暗灰黄色粘質土で

ある。ピットは上段から中段にかけて検出した。いずれも直径15～40cm程度の小規模なものである。時期は特定できないが、おそらく古代の遺構と思われる。

1層からは中期後半の弥生土器とともに6世紀から7世紀の土師器（6）、須恵器（5・7）が出土した。（6）は土師器甑である。溝1からは多くの弥生土器（9～16）とともにサヌカイト製の石槍（17）が1点出土した。弥生土器のほとんどは中期後半であるが、（10・11・13・14）など中期中葉のものも数点含まれる。主に溝下層の上面から下層に食い込む状態で出土している。土坑2からは弥生時代中期中葉の甕（8）が出土した。これらの遺物から当トレンチで検出した遺構の多くが弥生時代中期中葉から後半の遺構と判明する。なお、谷斜面の2層は確実に陶磁器類が含まれている（第74図）。

10トレンチ

9トレンチの南に位置する。調査地の中では水田だった頃の景観がもっともよく残る地点であり、現地形にも水田区画の段が数段残る。水田造成によって平坦となっている尾根上から東の谷斜面側に向けて、2.7m×73m、東西方向の調査区を、遺路予定地を斜めに横断するように設定した。なお調査区西端部には、近年の谷埋め立て土が逆に尾根状に張り出している箇所があり、調査区はこの埋め立て土上にも一部及んだ。層序は水田造成によって平坦となっている箇所では、基本的に約20cmの表土層（旧水田耕土層）を除去した面が直ちに地山（遺構面）となるが、もっとも東寄りの最下段では、表土層の下に褐灰色砂質土、地山ブロック土、灰色砂質土、黄灰色砂質土などの水田造成時の盛土が約35～40cmあり、さらにその下に近世以降の遺物包含層である灰黄色砂質土が約10～20cmと、弥生時代中期後半から古代の遺物を包含する暗褐色粘質シルトが約23cm堆積し、地山（遺構面）となる。このことから、尾根上では包含層や遺構面を削平し、尾根端では逆に包含層上に盛土をして水田造成を行ったことがうかがえる。各段の地山上面で溝や土坑（土坑1）、ピット等を多数検出したが、段の裾付近では遺構が希薄となる。このことからも段造成によって遺構面が削平されたことがわかる。なお西端の最上段には、上記のとおり近年の埋め立て土が約3mの高さに盛られているが、調査の結果、この埋め立て土は旧表土層（旧水田耕土層）上に盛られたものであり、旧表土層の下には地山が水平に広がっていること、またこの地山上面にはピット等の遺構が良好に遺存していることが確認された。

検出したピットには直径30cm前後の円形のものと、一辺が60cm前後の隅丸方形を呈するものの2者がある。両者ともに柱痕跡が確認できるが、後者は特にそれが顕著に認められる。前者の中には隅丸方形の柱掘方を検出しきれず、掘方内の柱痕跡のみの検出にとどまったものが含まれているかもしれない。なお、後者に断面観察によって深さ50cm以上におよぶことが確認できる。確実に掘立柱建物跡として認識できるものは少ないが、一列に並ぶピットなどは、その一部であった可能性が高い。溝は3条を検出したが、いずれも幅10～20cm程度の細溝である。包含層が残っていないために出土遺物が少なく、これらの遺構の時期を特定することが難しいが、周辺の調査区から7世紀前半から8世紀の遺物が出土していることから、おそらくその頃の遺構と推定できる。なお調査区東半で検出した土坑1については、南壁際で一部を検出しただけであるため断定はできないものの、その形状から隅丸方形を呈する竪穴住居址であった可能性が高い。

水田耕作に伴う溝からは陶磁器類が出土しているが、遺構の時期を特定できる遺物は出土していない。地山上面から7世紀代のものと思われる須恵器坏小片と甕体部片が合わせて3点出土した。

11トレンチ

10トレンチのさらに南に位置する。道路予定地南辺に沿うように2.55m×60mの調査区を南西―北

東方向に設定した。調査区西半には10トレンチ西端からつづく埋め立て土が広がり、調査区中央部には調査区を横断する狭い谷筋が1条あることが現地形からも判断できる。層序はこの谷筋より東側では、約20cmの表土層と近世以降の遺物包含層と思われるにぶい黄色砂質土（1層）を約10cm除去した面が直ちに地山となるが、谷の西側には上記のとおり厚さ約90cmに及ぶ埋め立て土があり、その下の褐色砂質土、あるいは黄褐色粘質土を約10cm除去した面がようやく地山（遺構面）となる。また中央の谷部には、最下層に礫を多く含む黄褐色砂質土があり、その上には一見地山と誤認するにぶい黄色粘質シルトが堆積する。このにぶい黄色粘質シルト層の上面で古代の遺構を検出していることから、この層は谷が一旦埋まりかけた段階での整地層と考えられる。しかしこの整地は谷を完全に埋めて平坦にするものではなく、谷の中心を幅3.5～4mほど残している。この残された谷が黄褐色粘質シルト（谷最下層）で完全に埋没した後、遺構面を覆うように、弥生時代中期後半から古代の遺物包含層である黒褐色粘質シルト（谷最下層）、灰褐色粘質シルト（谷下層）、灰黄褐色シルト（谷上層）が約1.2mに堆積し、最終的には上記の1層によってパックされる。なお、この谷が埋没した後の窪みには、近世以降に排水のための溝（溝1）が1条設けられている。谷のもっとも深い部分はG.L.－2.9mまで掘り下げたが、底を確認することができなかった。

この谷筋のほかに溝3条（溝2～4）とピット2基を検出した。谷筋は調査地の南から北に向かって入り込んでおり、本来は幅38m程度の規模をもっていたが、上記のとおり古代の整地によって狭められ、古代の段階では幅3.5～4mの小規模なものとなる。溝2と4はこの谷筋を挟んで、その両岸に位置する。共ににぶい黄色粘質シルト層上面で検出した。溝2は幅約80～90cm、深さ約25cmを測る。溝4は幅約30～45cmで、溝1に一部切られる。溝3は調査区西半の礫を多く含む黄褐色砂質土層の上面で検出した。ただし、調査ではこの層を谷埋土と掘削したため、平面的な検出ができていない。礫を多く含む黄褐色砂質土層除去後に、調査区の両壁に溝の断面がかかっていることが確認され、その段階ではじめて調査区を横断する溝があること、また礫を多く含む黄褐色砂質土層は谷の埋土ではあるが、一旦この層の上面が遺構面となることが判明した。幅約50cm、深さ27cmを測り、埋土は褐灰色砂質シルトである。なお、溝は3条とも南北方向にほぼ向きをそろえ、並行する。ピットは谷の東側の礫を多く含む黄褐色砂質土層上面と、西端の地山上面で検出した。後者によって、埋め立て土の下にも遺構が広がることが確認された。

1層からは土師器、須恵器とともに13世紀前半の東播系こね鉢（47）や瓦質土器足釜の脚部が出土した。陶磁器類は出土していないが、他の調査区の対応する層からは陶磁器類が出土していることから、おそらく近世以降の遺物包含層と思われる。谷上層から谷最下層までの各層には、弥生時代中期後半から8世紀までの遺物（48～59）が包含され、明確な時期差は認められない。総体的に7世紀代の土師器・須恵器の割合が多く、確実に8世紀といえるものは少ない。なお、谷上層から瓦器碗の小片が1点出土したが、おそらく1層からの混入と思われる。特筆すべきものとして、谷上層（溝2上面）出土の須恵器長頸壺（54）＜7世紀前半＞、同じく高台付きの坏（49）＜8世紀＞、谷下層出土の石庖丁（52）・大型の凸基式石鏃（53）＜弥生時代中期＞、同じく須恵器坏蓋宝珠つまみ（50）＜8世紀＞、谷最下層出土の内面に暗文が施された土師器坏（57）＜7世紀前半＞などがある。なお、溝2から7世紀後半のものと思われる土師器甕（60）が、溝3から土師器小片が出土している（第76図）。

12トレンチ

10トレンチの南西側に近接する。10トレンチ西端において近年の埋め立て土の下で確認した遺構面

がさらに広がるかを確認するため、埋め立て土上に3m×10m、南北方向のトレンチを設定し、重機掘削を行った。10トレンチ西端ではT.P.45m付近で遺構面を検出していることから、当トレンチでもG.L.－2.4m前後で遺構面が検出されることが予想された。しかし重機のバケットがとどく限界であるG.L.－約2.8m＝T.P.44.6mまで掘削したが遺構面を確認出来なかった。旧地形図とみると、10トレンチの西側には本来大きな谷が1条延びていたことがわかる。おそらく10トレンチの西端からこの谷に向かって遺構面が徐々に下がっているものと推測される。なお、G.L.－約2.8m付近から青灰色シルト層へと変わっていることから、遺構面まであと僅かで達したものと思われる（第77図）。

16トレンチ

6トレンチから斜面を上がった西側の平坦地に位置する。8トレンチと9トレンチとのちょうど中間にあたり、周辺には溜池が点在する。水田区画の段も明瞭に残る。8・9トレンチと並行するように2.5m×20mの調査区を南東―北西方向に設定した。調査区内には南北方向に段があり、層序は上段と下段で異なる。上段側では約20～30cmの表土層下に近世以降の遺物包含層である褐色砂質土が8cmと、同じく暗灰黄色砂質土が約10～20cm堆積して地山（遺構面）となる。下段側には段裾に水田耕作に伴う2条の溝があり、その付近では約25cmの表土層直下が直ちに地山（遺構面）となるが、地山が南に向けてわずかに傾斜しているため、調査区南端では表土層の下に地山ブロック土の盛土が約16cmと、近世以降の遺物包含層であるにぶい黄褐色砂質土が約8cm、弥生時代中期後半から古代の遺物を包含する灰褐色粘質シルト（1層）が約10cm堆積する。

地山上面で竪穴住居址5棟（竪穴1～5）のほかピット、溝（溝1）等を検出した。竪穴1は調査区南端で検出した。一部のみの検出であったため、全体規模は不明。竪穴2は竪穴1の北側で検出した。平面形は隅丸の方形であったことがうかがえるが、こちらも一部分の検出であったため、全体規模は不明である。竪穴3は調査区中央で検出した。調査区の北側で竪穴2と切り合うが、調査区内ではその切り合い関係を確認できない。平面形は隅丸の方形であるが、一辺2.8mと他の竪穴住居址に比べてやや小さい。竪穴4と5は調査区北半で検出した。両者とも一辺が4m強の隅丸の方形を呈すると思われるが、ちょうど水田耕作に伴う溝と重複するため、輪郭や切り合い関係など不明瞭な点が多い。なお、竪穴4・5の内側では焼土ピットを合わせて3基検出したが、竪穴住居址に伴うものかどうかは確認できなかった。竪穴住居址の埋土はすべて炭と地山ブロック土を含む灰褐色粘質土である。出土遺物から、これら5棟は弥生時代中期後半の遺構であることが判明する。溝1は竪穴3と切り合う。平面精査によって竪穴3を切る遺構であることが確認されたが、詳細な時期は不明である。幅約20～30cmで、弧を描く。溝の東側は調査の段階で一部掘りすぎてしまったが、そのままつづいて大きな環状にめぐると推測される。

1層からは中期後半の弥生土器のほか土師器が数点出土した。また竪穴4以外の竪穴住居址からは中期後半の弥生土器（第74図18～20）が出土した。

17トレンチ

7トレンチと8トレンチとの中間の尾根上の平坦部に位置する。2.7m×16.4mの調査区を南西－北東方向に設定した。遺構面までは極めて浅く、調査区北壁際では約15cmの表土層直下が直ちに地山（遺構面）となる。南壁際では若干谷に向けて遺構面が下がっているため、表土層の下に近世以降の遺物包含層である黄褐色砂質土が約5cmと、弥生時代から古代の遺物包含層である地山小ブロック土を含む灰黄褐色粘質シルト（1層）が約5～10cm堆積する。

地山上面で竪穴住居址1棟（竪穴1）のほか、ピット、土坑など多数検出した。竪穴1は弥生時代中期後半の遺構である。上面の削平が著しく、輪郭を完全に検出できなかったが、約2.7m×3mの隅丸長方形の平面形であったことが復原できる。ピットは多数検出したが、なかには柱痕跡をもつものや一列に並ぶものなどが認められ、掘立柱建物跡の存在をうかがわせる。竪穴1とは時期を異にする古代の遺構と思われる。土坑には直径約70～80cmの円形を呈するもののほか、溝状に延びるものなど多種がある。

1層からは僅かであるが土師器片、弥生土器片が出土した。竪穴1の上面からは弥生土器小片のほか、サヌカイトの小剥片（図版44－62）が多数出土した。

18トレンチ

6・16トレンチ南の尾根斜面に位置する。7－8－6トレンチとつながる尾根の輪郭の延長部を確認するため、等高線と直交するように2.5m×6mの調査区を東西方向に設定した。

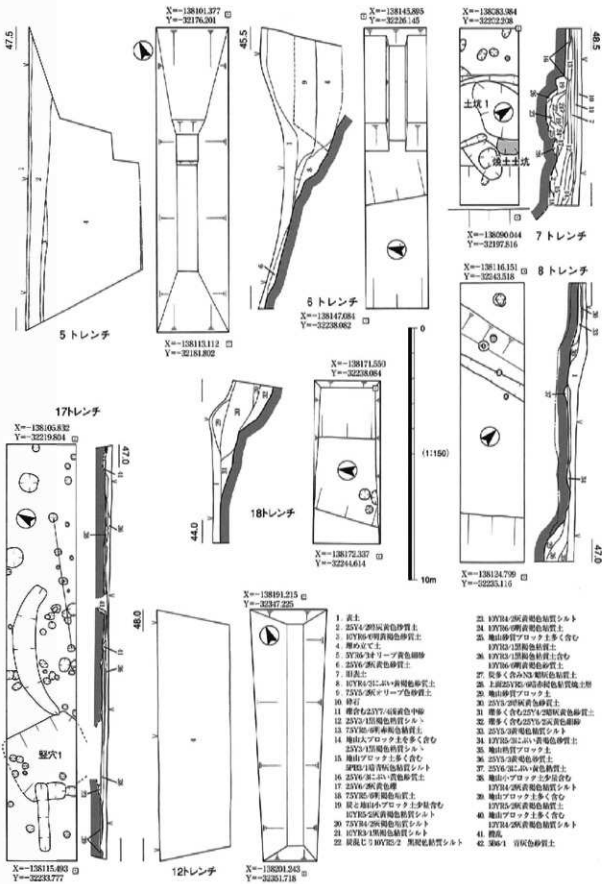
調査区西端は約30cmの竹林表土層を除去すると直ちに平坦な地山が確認できるが、西端から約1m付近から急勾配の斜面が始まり、谷に向けて暗灰黄色砂質土、灰褐色砂質シルト、礫多く含む灰黄色細砂が合わせて約1.5m堆積する。

傾斜変換部付近で直径約30～50cmのピットを3基検出した。これにより遺構は尾根の斜面際まで遺存していることが確認された。このピットからは弥生土器小片が出土している。

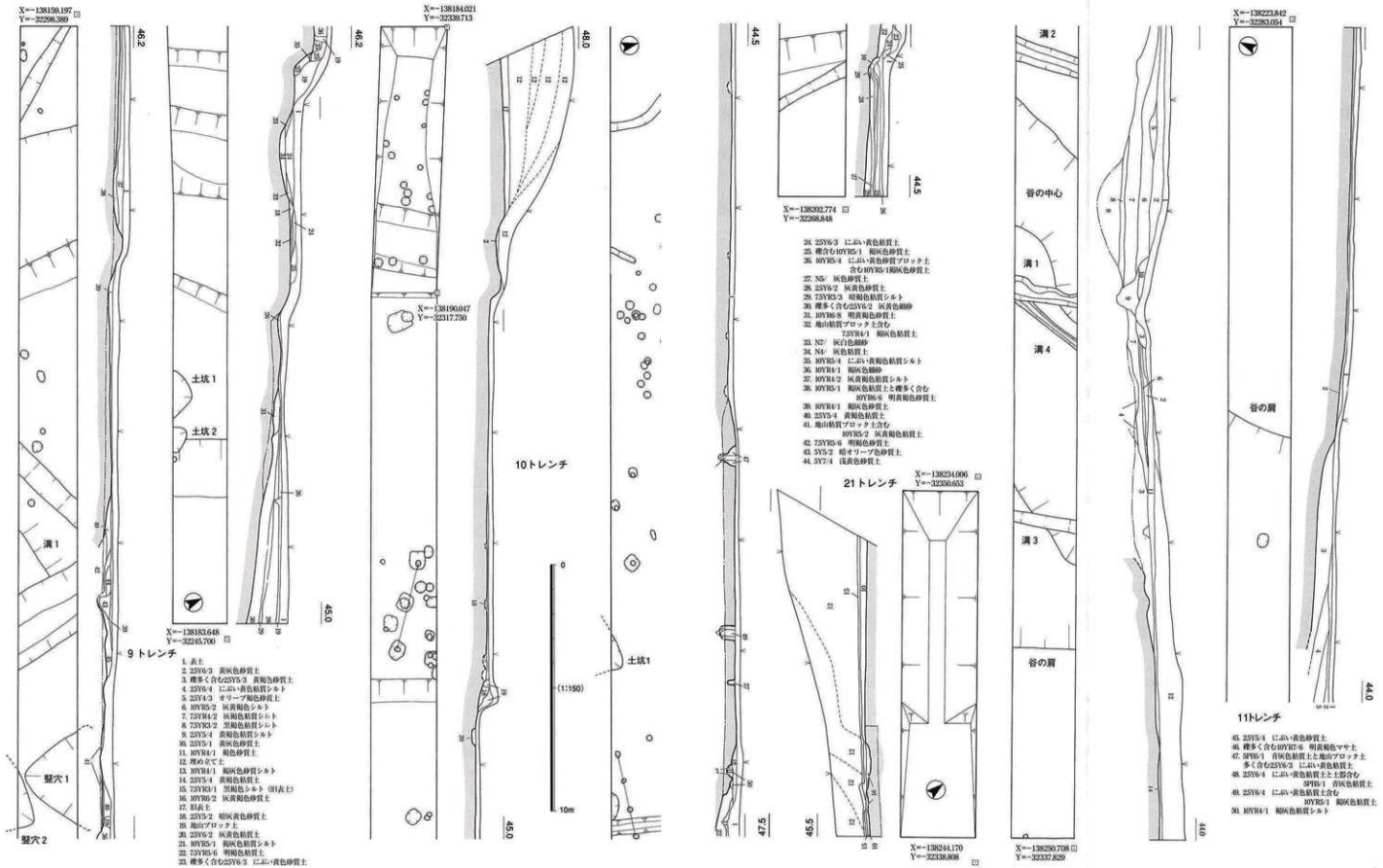
20トレンチ

10トレンチと11トレンチとの中間に位置する。3m×32m、南北方向の調査区を、両トレンチの中央部を結ぶように設定した。現地形には10トレンチ東端からつづく水田区画の大きな段が調査区南半にあり、11トレンチ側が約1.3m低くなる。層序はもっとも10トレンチよりでは10～15cmの表土層と、その下の地山ブロック土（1層）、灰黄色細砂などの水田造成時の盛土、および近世の遺物包含層である黄褐色砂質土を合わせて約15～25cm除去した面が地山（遺構面）となるが、地山が11トレンチ側に向けて傾斜しているため、上段の11トレンチ寄りでは、約15cmの表土層下に、にぶい黄褐色砂質土、地山ブロック土などの盛土が約45～50cmと厚くなる。さらにその下には近世以降の遺物包含層である黄褐色砂質土とにぶい黄色砂質土（2層）が約30cmと、弥生時代中期後半から古代の遺物を包含する黄褐色砂質土、および灰黄褐色砂質土～灰褐色粘質シルト（3層）が約35～40cm堆積し、G.L.－1.2～1.3mでようやく地山（遺構面）となる。下段のもっとも11トレンチ寄りでは、10～12cmの表土層下に近世以降の遺物包含層である黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、にぶい黄色砂質土などが合わせて約1mと、弥生時代中期後半から古代の遺物を包含する灰褐色粘質シルト（谷上層）、および礫を含む黒褐色粘質シルト（谷下層）が約70～75cm堆積し、にぶい黄色粘質シルトの遺構面となる。なお、このにぶい黄色粘質シルトは11トレンチの調査によって、地山ではなく古代の整地層であることが判明しているが、当トレンチではどこからこの整地層が堆積し始めるのかを確認できなかった。

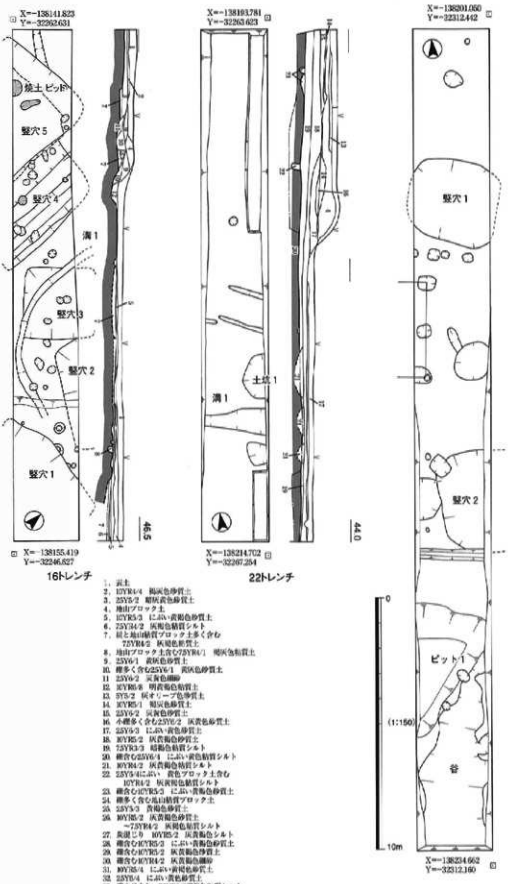
検出した主な遺構は竪穴住居址2棟（竪穴1・2）のほか、ピット、土坑、谷筋などである。竪穴住居址は共に弥生時代中期後半の遺構である。竪穴1は調査区北半で検出した。平面形は一辺約3.2mの隅丸方形を呈し、埋土は炭混じりの灰黄褐色シルトである。竪穴2は中央で検出した。こちらも平面形は隅丸方形で、規模は竪穴1よりも一回り大きい一辺約4mを測る。埋土は灰褐色粘質シルトで、遺構の輪郭が明瞭に検出できる。ピットの多くは古代の遺構と思われるが、下段で検出したピット1は出土遺物から弥生時代中期後半の遺構であることが確実である。ピットの平面形は円形の小さなものもある



第70図　大尾・太華遺跡　5～8、12、17、18トレンチ平・断面図



第71図　大尾・太秦遺跡　9～11、21トレンチ平・断面図



1、表土
2、10YR4/4　褐灰色砂質土
3、25Y5/2　暗灰黄色砂質土
4、地山ブロック土
5、10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
6、25Y3/4/2　灰褐色粘質シルト
7、炭と地山粘質ブロック土多く含む
　7.5YR4/2　灰褐色粘質土
8、地山ブロック土含む7.5YR4/1　褐灰色粘質土
9、25Y6/1　黄灰色砂質土
10、礫多く含む25Y6/1　黄灰色砂質土
11　25Y6/2　灰黄色礫砂
12、10YR6/8　明黄褐色粘質土
13、5Y5/2　灰オリーブ色砂質土
14、10YR5/1　褐灰色砂質土
15、25Y6/2　灰黄色砂質土
16、小礫多く含む25Y6/2　灰黄色砂質土
17、25Y5/3　にぶい黄色砂質土
18、10YR5/2　灰黄褐色砂質土
19、7.5YR3/3　暗褐色粘質シルト
20、礫含む25Y6/4　にぶい黄色粘質シルト
21、10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト
22、25Y5/4にぶい　黄色ブロック土含む
　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト
23、礫含む10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
24、礫多く含む地山粘質ブロック土
25、25Y5/3　黄褐色砂質土
26、10YR5/2　灰黄褐色砂質土
　~7.5YR4/2　灰褐色粘質シルト
27、炭混じり　10YR5/2　灰黄褐色シルト
28、礫含む10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土
29、礫含む10YR5/2　灰黄褐色砂質土
30、礫含む10YR4/2　灰黄褐色礫砂
31、10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土
32、25Y6/4　にぶい黄色砂質土
33、礫少量含む　7.5YR3/2黒褐色粘質シルト

第72図　大尾・太秦遺跡　16、20、22トレンチ平・断面図

が、隅丸方形の大型のものが主である。特に竪穴1と2との間で検出したピットは大型であり、また一列に並んでいることから掘立柱建物跡の一部であった可能性が高い。土坑には竪穴住居址に切られるものと、切るものとの両者があることから、弥生時代のものと古代のものとに分けられる。谷筋は調査区の南端で検出した。11トレンチで検出した谷筋の先端にあたる。

1・2層からは弥生土器、土師器、須恵器（25）のほかに瓦や陶磁器類が多数出土した。3層および遺構面直上からは中期後半の弥生土器、7世紀の土師器、須恵器のほか、弥生時代中期のサヌカイト製凹基式石鏃（26）が出土しているが、竪穴住居址の上面や周辺では弥生土器やサヌカイト剥片が多くなる。竪穴2からは中期後半に位置する弥生土器（40・41・43～46）とともにサヌカイト製の不定形刃器や剥片（図版44－63）が、竪穴1からもサヌカイト剥片（図版44－64）が出土した。なお、上記のピット1からは弥生時代中期後半の高坏（42）が出土している。下段側の谷上層からは中期後半の弥生土器（28～31）とともに6世紀末の鉢（32）や7世紀代と思われる土師器羽釜（27）が出土した。谷下層からも中期後半の弥生土器（36～39）に混じって6世紀末から8世紀初頭にかけての須恵器（33～35）が出土しており、11トレンチと同じく谷の上層と下層とでは明確な時期差は認められない（第75図）。

21トレンチ

11トレンチの西端北側に位置する。11トレンチ西端で埋め立て土の下から遺構が確認されたため、12トレンチで行ったのと同様に、遺構面の広がりを確認する目的で、埋め立て土上に3m×14m、南東―北西方向の調査区を設定した。層序は約1.1mからもっとも厚い部分で3.3mある埋め立て土の下に、全体に旧表土層と思われる黒褐色シルトが8cmと、黄灰色砂質土が10～28cmあり、南半には灰黄褐色砂質土が部分的に6～20cm堆積して地山となる。地山の面は北半では完全な水平であるが、南端で若干下がる。特に顕著な遺構は確認できなかったが、南半の灰黄褐色砂質土層から中期後半に位置する弥生土器片が数点出土した。

22トレンチ

10トレンチの東端に約1.5m層て近接する。10トレンチ東端の平坦部からさらに一段下の平坦部に向けて、南北方向に2.6m×20mの調査区を設定した。上段側の層序は約20～30cmの表土層下に、水田造成時の盛土である灰オリーブ色砂質土、地山ブロック土（1層）、褐灰色砂質土や、近世以降の遺物包含層と思われる灰黄色砂質土（2層）などが合わせて約70cmあり、その下に主に弥生時代中期後半の遺物を包含する灰黄褐色砂質土や黒褐色粘質シルト（3層）が合わせて約60cm堆積し、にぶい黄色粘質シルトの地山（遺構面）に達する。下段側には表土層下ににぶい黄色砂質土が約6cmと、上段側からつづく灰黄褐色砂質土が10～20cm、黒褐色粘質シルトが5～10cm堆積し、地山（遺構面）となる。

遺構は主に南半で検出した。溝（溝1ほか）、土坑（土坑1ほか）、ピットなどがある。溝1は調査区を横断する東西方向の溝で、幅約0.4～1mを測る。埋土は締まった灰黄褐色粘質シルトである。このほか溝1とは方位が異なる並行する2条の細溝も検出した。土坑1は東壁際で検出した不整形な土坑である。直径は約1.8mを測り、埋土は溝1と同じ締まった灰黄褐色粘質シルトである。

1・2層からは弥生土器、土師器、須恵器のほかに陶磁器類が多数出土した。3層からは中期後半の弥生土器片（第74図21～24）が多数出土したが、1点のみ7世紀前半の須恵器坏蓋が含まれていた。混入したものかどうかは判断できない。なお溝1、土坑1からも弥生土器小片が出土している。

大尾遺跡側（第73・77図）

13トレンチ

大尾遺跡側のトレンチの中ではもっとも北寄りの尾根上に位置する。南西―北東方向に2.3m×17mの調査区を設定した。層序は約20～30cmの住宅解体後の整地土層を除去した面が直ちに明赤褐色の地山（遺構面）となるが、住宅解体に伴う遺構面の撹乱が著しい。

地山上面で直径20cm程度の小ピットを4基（東壁面検出のピット含む）検出した。建物跡としてまとまるものではないが、これによって当調査区周辺にも遺構が広がっていることが確実となった。なお、遺物は確認できなかった。

14トレンチ

13トレンチの南側に位置する。東西方向に2.4m×35mの調査区を設定した。層序は約40～60cmの現代整地土層の下に、調査区の東側約1/4には近世以降の遺物包含層と思われる地山ブロック土を含む黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土が両者合わせて約15cm、中央北壁寄りで同じく黄褐色粘質シルト、明黄褐色粘質土がそれぞれ約10cm堆積し、地山（遺構面）に達する。なお調査区の西側約3/4は南側に向かっての撹乱が著しく、中央付近では溜池も確認した。

遺構は主に撹乱が少ない東側約1/4の地山上面で検出したが、西端部でも溝状の遺構を検出しており、本来は調査区全体に遺構が広がっていたことがわかる。東側ではピットを多数検出したが、中には一辺約60cmの隅丸方形を呈するものも含まれており、掘立柱建物跡として復原できるかもしれない。なお、遺物は確認できなかった。

15トレンチ

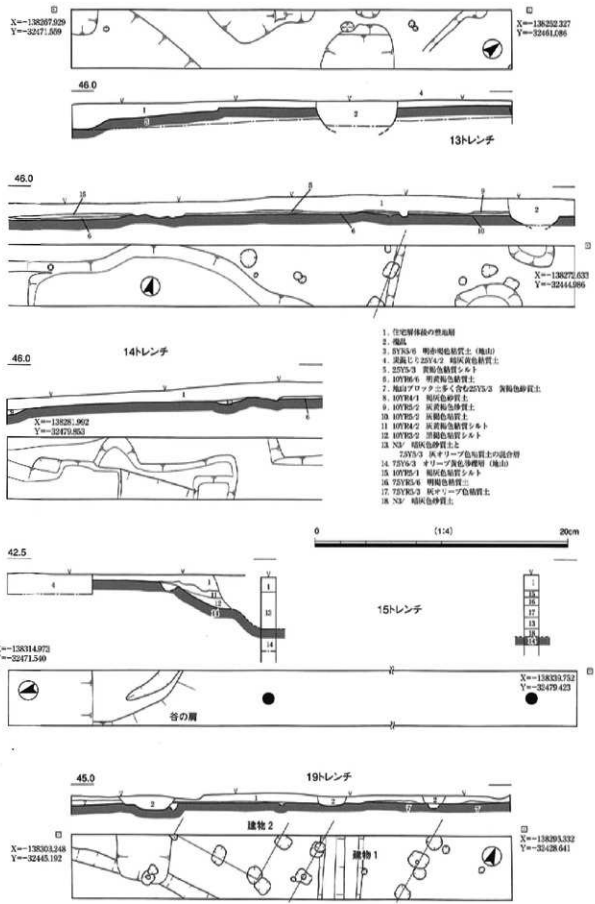
14トレンチの南側に位置する。大尾遺跡側のトレンチの中では一段低い谷筋上にあたり、ここは大尾遺跡調査中にも近隣の方々から、かなりの埋め立てが行われたことを指摘されていた場所であった。南北方向に2.15m×25mの調査区を設定し、南端から機械掘削を開始したが、調査区南半部は指摘されていたとおり、2m以上に及ぶ埋め立てが行われていたことが明らかとなったため、危険回避のため、地山までの深度を確認・記録の後、直ちに埋め戻すこととした。地山までの深度は、南端部ではG.L.－約2.4m、南端から約15m付近ではG.L.－約2mを測る。この地山上には包含層はなく、地山直上まで新しい埋め立て土であることから、埋め立ての際には遺構面が削平されていたと考えられる。調査区北半では地山が急激に上がり、約20cmの現代整地土層下で谷の肩が確認できる。ただしそれでも13トレンチの遺構面からは約3.7m低い。この谷の肩部で溝1条を検出した。最大幅約60cmを測る。南の谷に向かう斜面には、下層から黒褐色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルト（1層）が堆積しており、この部分は埋め立ての際に削平を受けなかったことがわかる。なお、調査区北端は住宅解体時の撹乱により、遺構は遺存しない。

1層から須恵器甕体部小片が1点出土した。

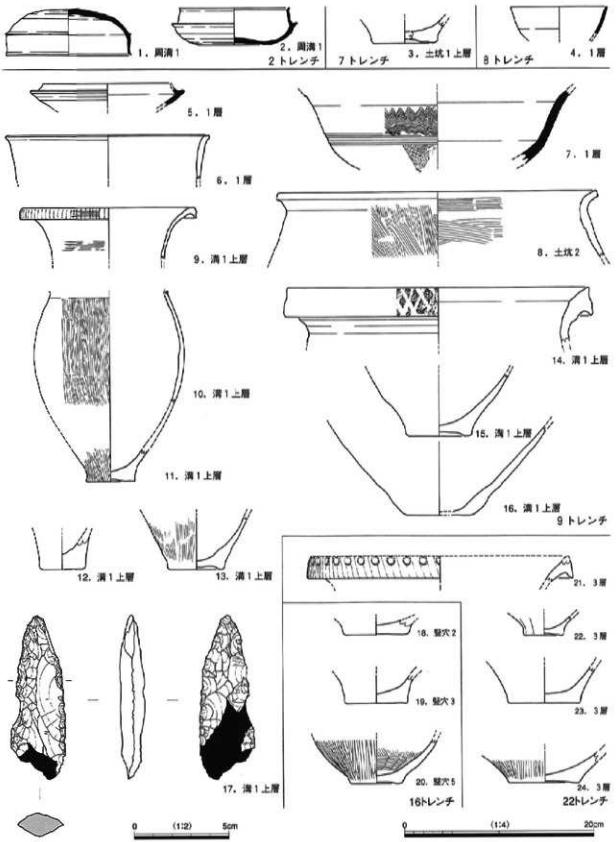
19トレンチ

15トレンチ南東の尾根頂部に位置する。2.5m×17mの調査区を東西方向に設定した。層序は約20～30cmの現代整地土層の下に近世以降の遺物包含層である地山ブロック土を含む黄褐色砂質土（1層）が約5～10cm堆積し、地山（遺構面）となるが、一部には整地土層除去後の面が直ちに地山となる箇所もある。

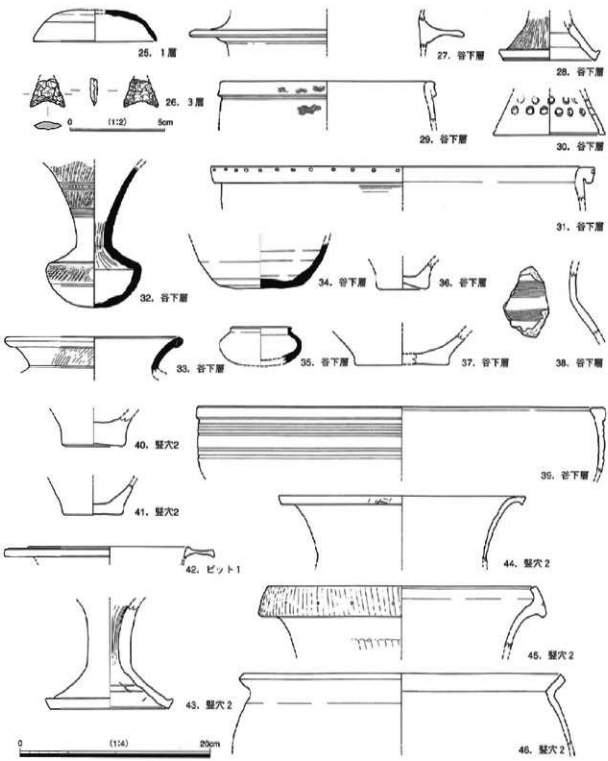
地山上面で掘立柱建物跡2棟（遠物1・2）を検出した。柱掘方は概ね一辺約60cmの隅丸方形を呈



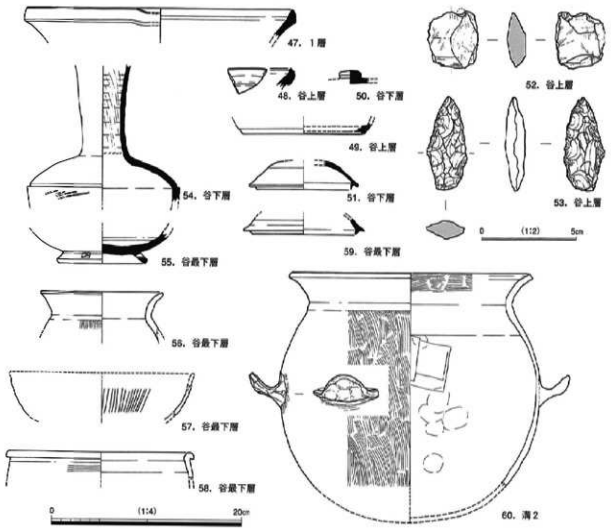
第73図　大尾・太秦遺跡　13～15、19トレンチ平・断面図



第74図　大尾・太秦遺跡　2、7～9、16、22トレンチ出土遺物



第75図　大尾・太秦遺跡　20トレンチ出土遺物



第76図　大尾・太秦遺跡　11トレンチ出土遺物

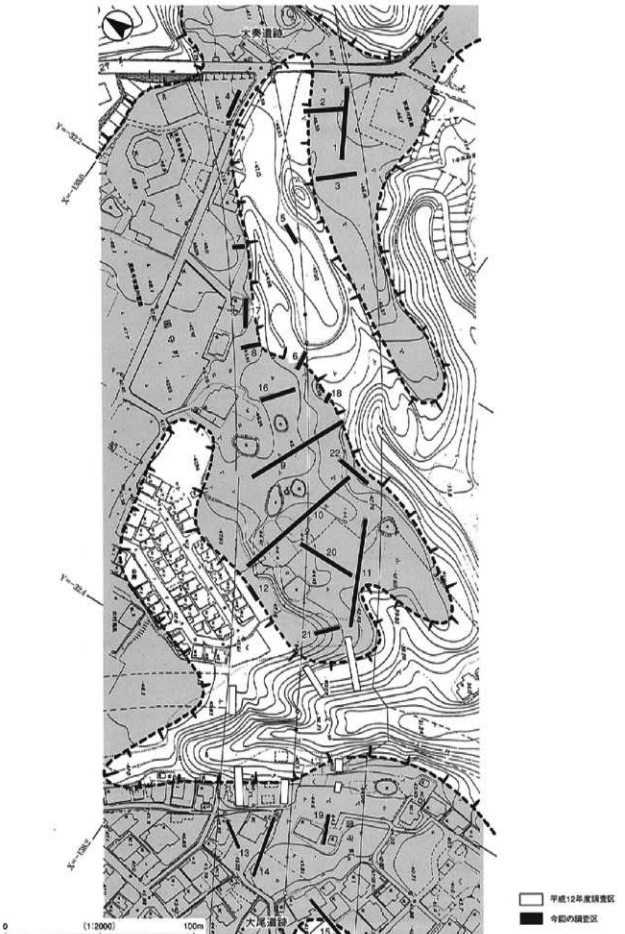
し、柱痕跡を残すものもある。建物1は梁間2間、桁行3間以上の南北棟で、主軸はほぼ真北に向く。建物2は建物の南東隅部のみの検出であるが、おそらく建物1と同規模であったと推定される。建物の振れも建物1と同じくする。この2棟に伴わないピットも数基検出しており、周辺には同規模の建物跡が広がっていたことがうかがえる。

1層からは土師器片に混じって磁器片が数点出土している。

3．まとめ

1～4トレンチからは5世紀後半に築造された古墳の周溝を合計10条検出した。これらの平面的な位置関係から、1～3トレンチ側には少なくとも2基、ないしは3基の方墳が残っていること、また4トレンチで検出した周溝は断面観察によって3条の周溝が重複していることが明らかとなった。1～3トレンチと4トレンチとは谷を1つ隔てて異なった尾根上に位置するが、古墳は平成13年度に調査した太秦遺跡群からこの両方の尾根上に広がっていることが確実となった。

尾根を分ける谷は、近年の埋め立て造成によって、本来の地形が不明瞭となっているが、2トレンチ



第77図　大尾・太衆遺跡　調査及び旧地形図から復原できる尾根と谷

北端でこの谷の斜面を検出し、1～3トレンチ側の尾根の輪郭を確定することができた。なお、4トレンチ側の谷の斜面は、現在の道路下あたりに位置していることが旧地形図から読み取ることができる（第77図参照）。

成果のまとめ（第77図）

7・9・10・16・17・20トレンチで弥生時代中期後半の竪穴住居址を検出したほか、周辺のトレンチからも同時期の遺構を多数検出した。これにより平成13年度に調査した大尾遺跡から谷を1つ隔てた東側の尾根上には、この時期の大規模な集落が広がっていたことが明らかとなった。大尾遺跡には同じ時期の方形周溝墓群が広がっていることが確認されているが、集落跡はまったく確認されていなかった。今回明らかとなった集落は、大尾遺跡に墓を築いた人々の集落であった可能性が高く、その関係が注目される。なお、出土した弥生土器は大半が中期後半に位置するものであるが、その中に数点中期中葉と思われるものが含まれていた。集落の存続時期を考える上で注意しておきたい。

弥生時代の遺構や遺物包含層から、サヌカイトの製品とともに剥片が多く出土していることが注目される。特に17トレンチで検出した竪穴住居址には多数の剥片が散在していた。遺構の性格を考える上でも重要な資料である。

これら弥生時代の遺構の検出面では、同時に古代の掘立柱建物跡や溝等の遺構を確認した。その範囲も弥生時代の集落とほぼ重なる。遺構の時期は出土遺物から7世紀前半から8世紀に位置づけることができ、大尾遺跡と同時期に太秦遺跡側の尾根にも集落が築かれていたことが明らかとなった。

以上の弥生時代から古代の遺構は、4トレンチ側から11トレンチに向けて延びる尾根上に広がる。また、7・9・18トレンチではそれらの遺構が谷の斜面際まで残っていることも確認された。今回の調査成果や旧地形図から、この尾根の輪郭をほぼ把握することができた（第77図参照）。そのラインは4トレンチ南側の道路下から7トレンチ南際→8トレンチ南端部→6トレンチ→18トレンチ→9トレンチ南端部と結び、22トレンチの東側に至る。以上が尾根の東側輪郭線である。尾根の南先端は11トレンチ付近で若干北に入り込むが、大きくは11トレンチの西側に位置する平成12年度の確認調査区を通る。尾根の西辺付近は近年の谷埋め立て土が逆に旧地表面よりも高く盛り上がっているため、現地形から旧地形の復原は難しいが、旧地形図から12トレンチの西側が大きな谷にあたっていることが読み取れ、ここに尾根の西側輪郭線が通るであろうことが推定できる。これは12トレンチにおいて埋め立て土の下で遺構面を確認できなかったことからも裏付けられる。なお、10トレンチ西端や11トレンチ西半、および21トレンチでは、この盛り上がった埋め立て土の下に削平されることなく遺構面が水平につづいていることが確認できた。

大尾遺跡側に設定した13～15・19トレンチの全ての調査区においてピットや溝等の遺構を検出した。特にもっとも東の谷寄りに位置する19トレンチでは、大型の掘立柱建物跡が2棟まとまることが確認されており、14トレンチの東半部でも同規模の建物跡の存在が推定された。遺物が出土せず、遺構の時期を特定できなかったが、明らかに大尾遺跡検出の7世紀前半から8世紀の掘立柱建物群と共通するものであり、大尾遺跡がさらに東側の広範囲に広がることは間違いない。なお15トレンチでは南北に入り込む谷の肩を確認することができた。この谷の中に遺構が残っているかの確認はできなかったが、谷の斜面際まで遺構が残っていることが明らかとなった。（伊藤）

第4節　打上・寝屋南遺跡

1．調査地の位置と環境（第78図）

寝屋南遺跡は、寝屋川市に位置する周知の遺跡である。寝屋川市は、淀川左岸に位置する、いわゆる「北河内」と称される地域にあたり、その市域は東に横臥する生駒山より連なる丘陵地と、西を流れる淀川周辺の低湿地から構成される。

今回の調査対象地は、寝屋川市の東部丘陵とその縁辺地にあたる。この丘陵は、枚方台地または香里丘陵とも称されるものであり、西の低地へ向かってゆるやかにのび、叉状に流出する小河川が羽状地形を形成する。このため、旧集落は小河川に沿った丘陵の裾野に点在し、わずかな平地を利用して耕作を営んできた。現在では、開発のため地形の改変が著しいが、道路には勾配が目立ち、旧地形の起伏を今に伝えている。

今回の調査地は、寝屋南地区に位置する寝屋南遺跡範囲内の一角と、南接する打上地区の一部において実施した。寝屋南遺跡は、早くから遺物の散布地として著名であり、特に旧石器・縄文時代の石器およびサヌカイト剥片などの採集が容易であったと伝えられている。これまで遺跡内における調査の事例は報告されていないが、周辺地において確認されている遺跡の報告から、埋蔵文化財の存在を窺うことができる。

タチ川を隔てて寝屋南遺跡の北側に位置する寝屋長者屋敷遺跡は、早くから石器の採集地として知られていたが、これまでに旧石器時代に属する国府型ナイフ形石器の出土が報告されている。また、1982年におこなわれた寝屋川市教育委員会の発掘調査では、中世包含層の下位から凹基無茎式の縄文時代に比定できる石鏃が8点出土した。

寝屋南遺跡の北西に位置する寝屋遺跡では、1972年に弥生時代後期に属する長頸壺が採集された。また、北谷川をはさんで寝屋遺跡の対岸に位置する池の瀬遺跡では、1984年に実施された発掘調査において、弥生時代の包含層から畿内第Ⅴ様式の甕・甕・高坏等の土器類が出土した。池の瀬遺跡は香里丘陵の南縁に位置しており、寝屋川水系に属する弥生高地性集落群の存在を予想させる報告である。

寝屋南遺跡の東方へ1km隔てた地点に広がる太秦遺跡（太秦古墳群）は、古墳時代中期～後期にかけて形成された古墳群として著名である。早くからの開発によって消滅してきたものが多い中、太秦高塚古墳（トノ山古墳）は原形を留めるもののひとつとして挙げられる。これは、深さ1mを測る周溝をめぐらせる円墳であり、自然地形を利用した直径35m・高さ6mの墳丘を持つ。3段築成の手法が用いられ、多くの円筒・形象埴輪が出土した。昨年度の市教育委員会による調査では、木棺直葬の主体部が確認されている。

寝屋南遺跡の南方400mの地点には、横穴式石室を有する寝屋古墳が位置している。打上川北岸の丘陵斜面に立地する後期古墳であり、現在は府史跡に指定されている。1978～1992年の間に計3回行われた調査から、幅3mの周溝を有する直径22mの円墳であることが確認された。石室には巨大な花崗岩が使用されており、6世紀後半期における有力者の墓所であると考えられている。

寝屋古墳の南に位置する打上遺跡では、1977年に実施された大阪府教育委員会による発掘調査において、奈良時代の掘立柱建物14棟と溝状遺構が検出された。

また、寝屋南遺跡の東方500mの地点に位置する太秦北遺跡では、1979年に行われた調査において、

須恵器の坏・長頸壺・平瓶が出土した。これらは8世紀中～後期にあたる平城Ⅳ～Ⅴ期に該当する特色を備えている。この南西には奈良時代の瓦の散布地である熱田神社が知られており、これを古代寺院である太秦廃寺に比定する声がある。太秦北遺跡においては明確な遺構が検出されていないが、上記遺物の出土は、当該期における古代集落の存在を予想させる資料として有効であろう。

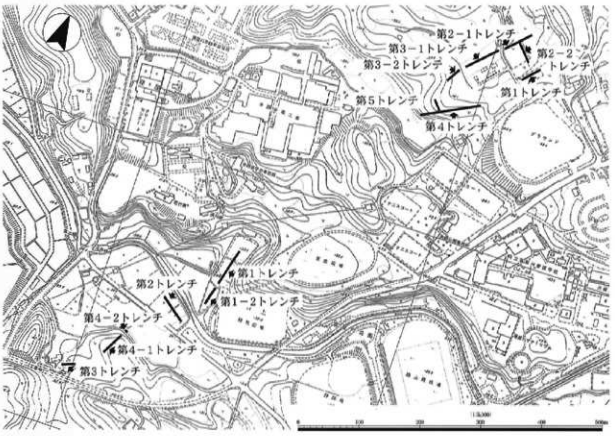
以上、概略ではあるが、今回の調査地周辺に位置する遺跡の調査成果を述べた。そのデータや調査地の立地条件を鑑みる限り、今回の調査においても良好な遺構の検出と遺物の出土が予想された。

第78図　打上・寝屋南遺跡　調査位置と周辺の遺跡

２．調査区の設定と調査の方法（第79図）

今回の調査では、寝屋南地区と隣接する打上地区の間、約800mの距離に合計13本の調査区を設置した。寝屋南地区には、寝屋山東麓の丘陵地に７本（寝屋南第１・第２－１・第２－２・第３－１・第３－２・第４・第５トレンチ）、打上地区には太秦山北傾裾部の丘陵地に２本（打上第３・第４－１トレンチ）と打上川両岸に残る旧耕作地内に３本の調査区（打上第１－１・第１－２・第４－２）を設置した。はじめ、寝屋南地区のトレンチは５本の予定であったが、旧地形の傾斜を確認するために第２－２トレンチを新設した。また、第３トレンチは当初長さ80mの調査区を予定していたが、65mの地点に溜池（撹乱に溜水したもの）が確認されたため、これを避けて新たに第３－２トレンチを設置した。また、打上地区では、当初４本のトレンチを計画していたが、第１トレンチ内に大型の撹乱が確認されたため、調査区を分轄して第１－２トレンチとした。また第４トレンチには、当初のトレンチ設置予定地点に産業廃棄物が山積していたため、トレンチの位置と方向軸の変更を行った。

調査方法は、調査不要土層に限り重機を用いて掘削をおこない、その後順次人力掘削を行った。しかし、寝屋南地区の第３－２・第４・第５トレンチと打上地区の第１－１・第１－２トレンチについては、重機の搬入が困難であったため、すべて人力による掘削を行った。包含層の掘削は、堆積土の変化を考慮して数回に分けて行ったが、地山が確認された場合と明確な遺構が確認された時点で掘削を中止し、遺構埋土の除去は行わなかった。また、掘削深度の限界を超えたため、地山の確認を行わずに掘削を中止したトレンチもある。



第79図　打上・寝屋南遺跡　トレンチ設置位置図

3．基本層序（第80図）

今回の確認調査では、各々のトレンチにおいて確認した包含層について付番したため、必ずしも層の名称は全体的に共通のものではない。しかし、丘陵上に設置した調査区（打上地区第2トレンチ以外の調査区すべて）では、比較的類似した堆積層序が確認されたため、大別して上位堆積より付番した。以下、模式図（第80図）に示し、解説を加えることとする。

第Ⅰ層（現代耕土・表土・腐葉土・撹乱土）

昭和期以降に開墾された畑作地とこれに伴う整地盛土、人家立ち退き後の撹乱埋土、竹林内傾斜地に堆積する腐葉土等がこれにあたる。すべて調査対象には含まれない層であり、寝屋南地区第1・第2－1・第2－2・第3－1・打上地区第4－1トレンチでは重機による掘削除去をおこなった。

寝屋南第2－1・2－2・3－1トレンチでは、この第Ⅰ層を除去した時点で、地山（後述の第Ⅴ層）を確認したため、調査を終了した。

第Ⅱ層（近代整地盛土・タケノコ栽培用土）

主としてにぶい黄橙色～黄褐色を呈する砂質シルト層であり、径1～5cm程度の円礫が混入する。寝屋南地区第3－2・第4・第5・打上地区第1－1・第3・第4－1トレンチ等、丘陵の傾斜地に設置した調査区で確認した。寝屋南第3－2・第4トレンチでは、最大厚1.5mを測り、小山状に凹凸を作る。

これはタケノコ栽培に際する搬入土であろうと推測される。寝屋川市東部丘陵では、耕作不適な丘陵地を段状に整地して、タケノコの栽培を行ってきた。その初源は、19世紀に遡る。即ち、寛政年間に九州より孟宗竹を太秦地区へ移植したとされる記録が初見であり、これが周辺へ広まったものと考えられている。

この層からは、若干ではあるが、近世～近代の遺物が出土した。

寝屋南地区第5・打上地区第1－2・3・4－1トレンチでは、この第Ⅱ層を除去した段階で、地山上面を確認した。

第Ⅲ層（中世遺物包含層）

寝屋南第3－2・打上第2トレンチでのみ確認した遺物包含層である。

寝屋南第3－2トレンチでは、傾斜地直下の落込みに堆積するシルト層であり、打上第2トレンチでは洪水砂と水田耕土として利用された粘土層（第4層・第5層）がこれに相当する。

寝屋南第3－2トレンチでは、この層は明確な遺構面を伴っておらず、傾斜地を転落した遺物が、その下端に留積した結果、包含層として形成されたと考えられる。

打上地区第2トレンチでは、この層を除去した面において畦畔を備えた水田面を検出したが、旧河川敷に位置することを考えると、川上から流されてきた遺物が耕作土中に巻き込まれたものであろうことは充分に考えられる。

尚、寝屋南第3－2トレンチでは、この下に古墳時代の包含層を確認したが、打上第2トレンチでは、この層を除去した時点において掘削深度が限界に達したため調査を終了しており、以下の堆積状況は不明である。

第Ⅳ層（古墳時代後期包含層）

寝屋南第３－２トレンチでのみ確認した遺物包含層である。

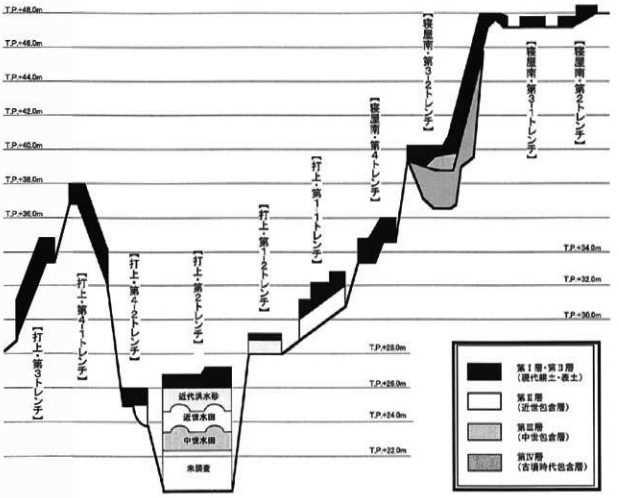
径５cmまでの礫を多く含む灰黄褐色～黄褐色シルト層と炭化物を多く含む暗褐色シルト層があり、６世紀頃の須恵器片および埴輪片を包含する。この層の直下において部分的に地山上面を確認した。

また、打上第２トレンチでも第Ⅲ層内から古墳時代後期のものと推測される須恵器片が出土しており、下層に相当層が存在するものと予想される。

第Ⅴ層（地山）

砂礫まじり橙色シルトおよび灰白色～黄色粘土で構成される無遺物層（地山）で、地質学的には高位段丘礫層（中期洪積層）に属する。調査地頬斜面では砂礫層と粘土層が薄い互層を成し、平坦地では粘土状を呈する。

近隣のボーリング調査データによると、寝屋川水源地地点（海抜41.7m）では、地表よりマイナス２m地点に黄色粘土があり、この下には小礫を含む橙色粘土層が確認されている。また、丘陵地と平坦地の境にある寝屋川市立東小学校（太秦地区・海抜8.5m）の調査では、丘陵からの土砂流入が多く、地下８m付近まで粘土質シルト・シルト混じり粗砂～細砂の互層が認められ、安定した堆積が認められるのは、地下10m以下からであると報告されている。



第80図　打上・寝屋南遺跡　基本層序模式図

4．調査成果

寝屋南地区（第81～86図）

今回の調査では、はじめに寝屋南地区に設定したトレンチに着手し、その後、打上地区の調査へと移行した。以下、トレンチ番号に則して、調査の成果を記述する。

①寝屋南地区・第1トレンチ

丘陵上の平坦地に設けた幅2m×長さ40m＝80m²のトレンチである。機械掘削を開始したところ、全面にわたって撹乱が認められた。ここは谷地を埋め立てて住宅を建設した跡地であり、撹乱の深さは地表下2mに及んだ。包含層および遺構の残存は絶望視されたため、人力掘削は行わず調査を終了した。

②寝屋南地区・第2－1トレンチ

第1トレンチ同様、丘陵上の平坦地に設けた幅2m×長さ50m＝100m²のトレンチである（第81図）。第1トレンチの北西約50mの地点に平行して設置した。ここは近年まで畑作地であり、葉野菜や芋類などの商品作物が栽培されていた。周辺の地形は、北東の尾根筋から里道の通る南西方向へむかって緩やかに下がる。耕作地内には段と排水溝が設けられており、開墾に伴って整地が行われたようである。

層序は、現代耕作土である第1層が確認できたのみである。第1層は、灰オリーブ～黒オリーブ色シルトを呈し、概ね均質であり、耕作用土として他所より搬入されたものである。これを除去したところ、橙色砂礫混じりシルトである地山を確認した。地山面において落ち込み・溝・畝群等を検出したが、すべて近現代の遺構である。

落込み1　南西隅に位置し、アスファルト塊が混入することから里道造設の際に掘削されたものであると思われる。現代の撹乱であるが、近世～近代の遺物が出土した。

第81図4は染付皿である。見込部に蛇の目釉剥が認められる。絵付は底部内面に2羽1対の千鳥を3箇所に配する。第81図2は、染付碗である。外面に梅枝、内面に松枝をモチーフとした絵付がある。

溝2　トレンチ南西端より30m地点で検出した。耕作に伴う排水溝である。遺物の出土はなかった。

畝群　現代地表面からの耕作によって地山面が削られたために生じた畝状の高まりである。場所によっては畝と同方向の小溝として、その形態をとどめる。遺物の出土はなかった。

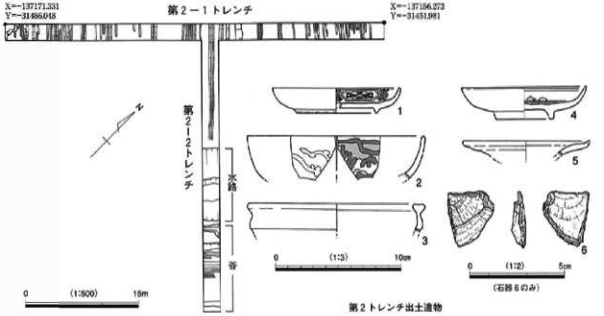
③寝屋南地区・第2－2トレンチ

第2－1トレンチに直交して設けた幅2m×長さ35m＝70m²のトレンチである。谷地形（第1トレンチ設置地点）への傾斜方向を確認するために新設した。

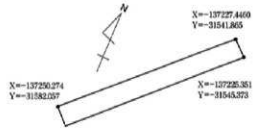
現代耕作土を除去した第1面では、第2－1トレンチより連続する畝1筋と、トレンチを横断する水路（溝3）および南東半部へ向かって落ち込む谷を検出した。

現代耕作土からは、染付片1点と施釉陶器1点が出土した（第81図1・3）。1は染付皿である。内面に菊花をモチーフとした模様がプリントされている。3は施釉陶器の鉢である。外面はオリーブ灰色の釉薬が施されている。ともに現代の製品である。

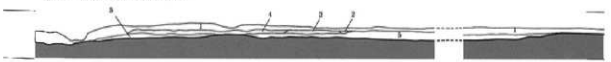
溝3　第2－1トレンチ後点より20mの地点において検出した、幅5m×深さ2mを測る水路状遺構であり、トレンチを横切って北東－南西方向へと続く。埋土は、地山と同質の黄灰色粘土および同粘土ブロックを多く含む橙色シルトである。耕作地を広げる際に、近隣において削った地山土を以って埋め立てたものと考えられる。この埋土よりサヌカイト剥片が1点出土した（第81図6）。石質は悪く、全



第81図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第２トレンチ平面・断面図、出土遺物実測図

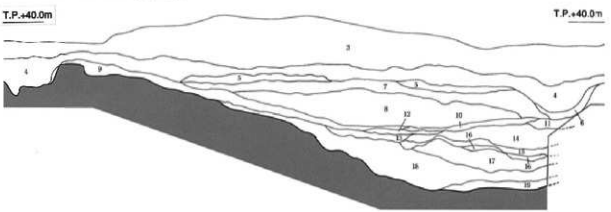


第３－１トレンチ 北西壁断面

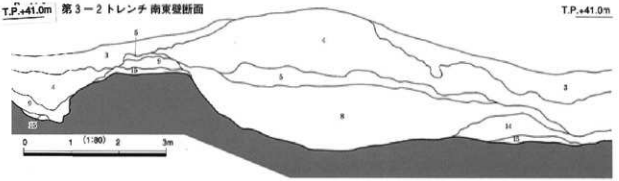


寝屋南地区　第３－１トレンチ
1）10YR6/1　褐灰色粘土質シルト（現代耕土）
2）2.5Y6/4　にぶい黄色細砂に2.6Y4/4　オリーブ褐色細砂ブロック混入
3）2.5Y6/6　明黄褐色砂質シルト
4）2.5Y5/4　黄褐色極細砂～中砂まじりシルト
5）2.5Y5/4　黄褐色シルトに10YR3/3　暗褐色細砂ブロック混入

第３－２トレンチ 北西壁断面

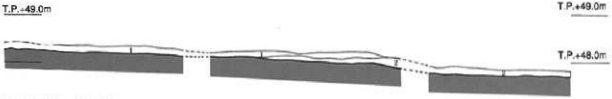


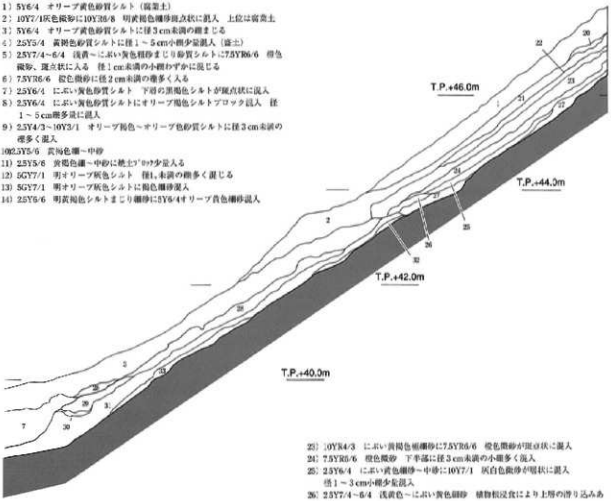
第３－２トレンチ 南東壁断面



第82図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第３トレンチ平面・断面図

第３－１トレンチ





寝屋周地区　第３－２トレンチ

1）5Y6/4　オリーブ黄色砂質シルト（腐葉土）
2）10Y7/1灰色微砂に10Y3/6/8　明黄褐色礫砂斑点状に混入　上位は腐葉土
3）5Y6/4　オリーブ黄色砂質シルトに径３cm未満の礫まじる
4）2.5Y5/4　黄褐色砂質シルトに径１～５cm小礫少量混入（盛土）
5）2.5Y7/4～6/4　浅黄～にぶい黄色粗砂まじり砂質シルトに7.5YR6/6　橙色微砂、斑点状に入る　径１cm未満の小礫わずかに混じる
6）7.5YR6/6　橙色微砂に径２cm未満の礫多く入る
7）2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルト　下層の黒褐色シルトが斑点状に混入
8）2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルトにオリーブ褐色シルトブロック混入　径１～５cm礫多量に混入
9）2.5Y4/3～10Y3/1　オリーブ褐色～オリーブ色砂質シルトに径３cm未満の礫多く混入
10)2.5Y5/6　黄褐色礫～中砂
11）2.5Y5/6　黄褐色礫～中砂に焼土ﾌﾞﾛｯｸ少量入る
12）5GY7/1　明オリーブ灰色シルト　径1,未満の礫多く混じる
13）5GY7/1　明オリーブ灰色シルトに褐色礫砂混入
14）2.5Y6/6　明黄褐色シルトまじり礫砂に5Y6/4オリーブ黄色礫砂混入
15）2.5Y6/4　にぶい黄色中砂　径５cm未満礫多く混入
16）2.5Y4/2　灰黄色中砂～砂質シルト
17）2.5Y6/6　明黄褐色シルトまじり礫砂に5Y6/4オリーブ黄色細砂入る
18）2.5Y6/4　にぶい黄色中砂　径５cm未満の礫多く混じる
19）2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土質シルト
20）2.5GY7/1　明オリーブ灰色微砂～シルト
21）5Y6/4　オリーブ黄色細砂に7.5YR6/6　橙色微砂に2.5GY7/1　明オリーブ灰色微砂ブロック状に混入
22）7.5YR6/6　橙色粗礫砂
23）10YR4/3　にぶい黄褐色粗礫砂に7.5YR6/6　橙色微砂が斑点状に混入
24）7.5YR6/6　橙色微砂　下半部に径３cm未満の小礫多く混入
25）2.5Y6/4　にぶい黄色礫砂～中砂に10Y7/1　灰白色微砂が層状に混入　径１～３cm小礫少量混入
26）2.5Y7/4～6/4　浅黄色～にぶい黄色細砂　植物根浸食により上層の滑り込みあり
27）10YR5/6～7/5　黄褐色～明黄褐色中砂　径１cmの小礫少々混入
28）橙色微砂に2.5GY7/1　明オリーブ灰色微砂　径１cmの小礫少々混入
29）2.5Y4/3～3/3　オリーブ褐色～暗オリーブ褐色微砂まじり砂質シルト　炭化物少々混入
30）2.5Y7/4　浅黄色礫砂に炭化物多量に混入
31）10YR4/3～2.5Y4/3　にぶい黄色～オリーブ褐色砂質シルトに径３cm未満の礫少量混入
32）2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルトに7.5YR5/6　明褐色礫砂ブロック混入
33）2.5Y6/4～6/6　にぶい黄色～明黄褐色シルトまじり礫砂
地上）2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘土質シルト　7.5YR5/6明褐色細砂～5Y1/3浅黄色中砂

体的に縞模様が認められる。最大長2.8cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測り、側面の一部に自然面を残す。

谷　トレンチ南東半部にひろがる谷状の落ちである。第2－1トレンチ接点より15mを起点として南東方向へ緩やかに落込み、30m地点で最深値（T.P.－45.3m、埋土厚さ約1.9m）を測る。灰黄褐色砂質シルト層である上層とオリーブ灰色～黒色粘土質シルト層である下層とに大別できる。上層を除去した面において、北東—南西方向の湧澤を検出した。下層の上位にはマンガン粒が多く混じり、土壌撹拌の痕跡が残る。即ち、この谷は埋没する過程においても耕作地として利用されたものと考えられる。谷下層から土師器片が1点出土した（第81図5）。5は土師器皿であり、ゆるい段を持ち、口縁端部を軽くつまみあげて整形する特色を持つ。小片のみの出土であり、中・近世の製品であると思われるが推測の域を出ない。

④寝屋南地区・第3－1トレンチ

第2－1トレンチより里道を隔て、南西側に設けた幅2m×長さ64.5m＝134m²のトレンチである（第82図上段）。当初、トレンチの長さは80mの予定であったが、北東端より65mの地点に溜池（2m×8mの楕円形、土取り穴に溜水したもの）があったため、距離を縮小した。

現地形は、第2－1トレンチ同様、北東側の里道へ向かって緩やかに下がる。しかし、溜池より南西側では約30度の傾斜値をもって崖状に下降し、起伏の激しい地表面を有する竹林へと続く。この地点には、新たに第3－2トレンチを設置した（後述）。

第3－1トレンチは第2－1トレンチと同様、近年まで畑作地として利用されており、溜池の手前10mの地点まで、畝を有する現代耕土（第1層）が堆積していた。これを除去すると、橙色粗砂まじりシルトを主体とする地山土が確認された。第1面では、溜池の手前7mの地点で溝4を検出したが、これ以外に顕著な遺構はなかった。

溝4　トレンチ北東端より60m地点に位置する、幅25cm×深さ15cmの小溝である。弧を描いて調査区外へと続く。埋土は黄褐色砂質シルトで、マンガン片を少量含む。摩滅した土師器片が2点出土したが、器種は判別できなかった。現代の畝群よりも先行する遺構であると思われるが、時期は不明である。

⑤寝屋南地区・第3－2トレンチ

第3－2トレンチは、傾斜面に新設した幅2m×長さ25.5m＝51m²のトレンチである（第82図下段）。この場合の長さとは直線距離であり、実際の地表面積は約60m²を測る。

全体的に雑木と竹が繁茂し、地表には腐葉土が堆積する。現地表面の地形は、北西端より12mの地点まで約30度の傾斜値をもって降下し、高さ8m前後の隘起を経て調査区外の尾根へと続く。

層序は、表土および腐葉土である第1層・盛土である第2層・中世包含層である第3層・古墳時代後期包含層である第4層に大別できる。

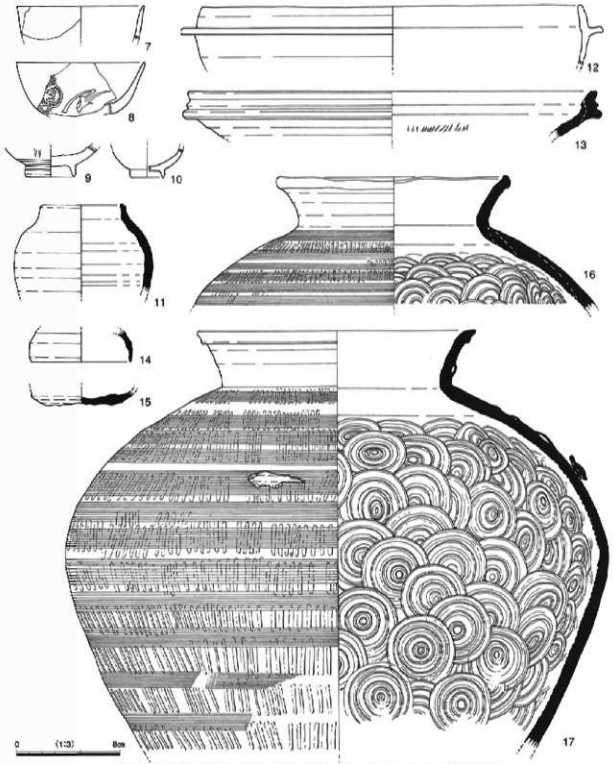
第1層は、トレンチ全面にわたって10～15cm程度堆積する。斜面直下地点より、染付片および瓦片が出土した（第83図7～9）。すべて、近世～現代の製品である。

7は鉢である。外面および内面縁に絵付が施される、現代の製品である。8は染付碗である。外面に松葉と梅花の絵付を施す。近代の製品である。9は染付碗の底部であり、内面に蛇の目釉剥が認められる。近世の製品である。

第1層を除去すると、部分的に5cm未満の礫を含んだ黄褐色砂質シルトの堆積が認められた（第2層）。地表面の凹凸は、すべてこの層の厚薄に起因する。竹をはじめとする植物根が深く入り組んでい

るため、上層の滑り込みが随所に見られた。この第2層は、近世よりこの地区で開始されたタケノコ栽培用の盛土であると思われる。タケノコの栽培は、斜面を段状に整地して土を入れ、施肥・間伐を行うが、第2層はしまりが悪く、掘削が容易であった。栽培土として利用されたものである可能性が濃厚である。この層からの、遺物の出土はなかった。

第2層を除去すると、トレンチ南西半部はほぼ平坦となった。第2層の下にはよくしまった浅黄色砂質シルトである第3層が残存していた。また、斜面より平坦面へと変わる地点に溝状の落ち込みがあり



第83図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第3トレンチ出土遺物実測図

（落込5）、ここから中世の遺物が出土した。遺物はどれも生活痕跡を色濃く残すものであるが、この落込みは、その形状からも人為的な遺構とは考えにくい。おそらく、崖上部より廃棄され、転落した遺物が自然の落込みに溜まったものであると思われる。従って中世における人間の居住地は崖上（即ち第3－1トレンチを設置した地点付近）に存在したものと推測される。

落込み5　幅3m×深さ0.8mを測る溝状の落ち込みである。トレンチを横切って調査区外（北西－南東方向）へと続く。堆土はにぶい黄色砂質シルトで、陶器・土師器が出土した（第83図11～13）。

11は、陶器の無頸壺の口縁から体部にかけての部分である。口径は6.8cm、最大厚0.8cmを測る。胎土はやや粗く、径3mm未満の角粒が少量混入する。焼成は甘く断面はセピア色を呈するが、表面には丁寧なナデ調整が施されているため、良品である印象を受ける。内面には錆状の付着物が認められた。肩部に耳状取手が付く可能性がある。

12は、土師器羽釜の鍔部である。口径30.5cm、鍔径は34.6cm、口縁部の立ち上がりは1.8cmを測る。全体的に丸みを帯びたフォルムを持つ。口縁はやや内湾して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。内外面ともになでて仕上げられている。内面には、口縁端部より3cm下がった箇所において水平方向に付着した炭化物が幾重も認められた。繰り返しの煮沸使用に耐えたものと観察される。

13は、陶器擂鉢の口縁部である。胎土は粗く、径3mm未満の角礫が多量に混入する。焼成は良好で、一部に自然釉が付着する。使用による摩滅が著しく、内面には凹凸が見られる。

第3層を除去すると、傾斜面に炭片と、焼土塊が混じるシルト層の広がりが確認された。平坦地では径5cm未満の礫を多く含む黄褐色砂質シルトが堆積していたが（第4層）、これにも部分的に炭が混じり、黄灰色に変色した礫まじりシルト層が筋状に流入していた。この第4層からは、6世紀と見られる須恵器片が30点程度と土師器片・円筒埴輪片が出土した（第83図14～17）。これらのなかには溶着した須恵器片が見られた。以上のことから、この地点には6世紀頃に稼動した窯が築かれていたのではないか、という疑いが持たれた。このため、遺構である可能性を考慮して今回の調査では炭化物を含む一連の包含層の掘削を行わず、幅50cmの側溝を左右に入れて地山までの深度を確認するにとどめた。

出土した土器のうち、実測に耐えるものは以下の4点であった。14は坏蓋の口縁部である。胎土はやや粗く、径2mmの白色粒が混入する。外面にはケズリを施すが、焼成以前のキズが一部に残る。15は壺類の底部である。14同様、胎土に白色粒が混入する。内面には強いロクロナデと渡方向の指ナデ跡が残る。底部外面は粘土の切離し痕が残り、表面整形は行われていない。16・17は須恵器甕の口縁から体部にかけての部分である。16は、外面に平行タタキ後カキ目、内面には同心円状タタキを施す。口縁端部は丸く仕上げ、内面にはナデによる段をつくる。胎土は精密であり、焼成も良好であるが、口縁に焼き歪みが生じている。17は、16と同様のタタキとカキ目調整を施すが、口縁端部の形状が異なる。口縁端部より下方1cmの位置に断面三角形の突帯をめぐらせ、なでて面を作り、鋭く外側へ反り返らせる。外面肩から体部にかけて、部分的に黒延がみられ、オリーブ色の自然釉の付着が広範囲に認められる。焼成はやや甘く、随所に火ぶくれが生じ、肩部には他の須恵器片（坏口縁？）が溶着していた。

また、これらの須恵器とほぼ同地点から、円筒埴輪片が出土した。表面の劣化が著しく、小片であるため図化はできなかったが、外面にタガの一部やハケメ調整痕が確認できる。タガの形状からは、V期（6世紀）の製品であると思われる。

第4層を除去するとオリーブ灰色粘土を主体とする地山土が確認された。この地山面は平坦ではなく、

東側へ大きく落ち込む様相を見せた。最も深い地点では、地表から約３ｍを測るまでに達した。

このトレンチの調査では、傾斜面に築かれた窯跡の存在を予想させるという成果が得られたが、これが正しければ、傾斜地直下には灰原が広がるはずである。しかし今回の調査では、灰原らしき遺物の包含層は認められなかった。窯跡の存否については、今後の調査成果を待ちたい。

⑥寝屋南地区・第４トレンチ

第４トレンチは、第３－２トレンチとは尾根を隔てた南側に設置した、幅２ｍ×長さ100ｍ＝200㎡のトレンチである（第84図）。当初は第１トレンチの延長上に位置する平坦地を起点として設置する計画であったが、第３－２トレンチの調査成果を踏まえ、傾斜面を起点とするよう変更した。

地表面には第３－２トレンチ同様、雑木と竹の繁茂があったが、樹幹・竹根は概して細く、３－２トレンチに比べて貧弱な印象であった。地形は、北東端の尾根筋から急角度で下降した後、高さ１ｍ前後の起伏を連ねながら再び下降し、草地（近年までは耕作地か？）を経て南西側の尾根へと向かう。現地表面の標高はT.P.＋32～42ｍを測る。

層序は主に、腐葉土を含む表土である第１層・タケノコ用盛土である第２層・窪地に溜まった落込埋土に分けられる。第１層は第３－２トレンチに比べ、若干堆積が厚い。トレンチ北東端より20ｍの地点の窪みより、遺物が出土した（第85図）。第３－２トレンチの落込み５と同様、傾斜面直下地点からの出土であり、連続した溝状遺構となる可能性もある。

第85図18は、染付皿である。高台は低く、形骸を留めるのみである。近・現代の製品である。第85図19は、瀬戸産の陶器の鉢である。粘土を折り曲げて、丸い口縁部を形づくる。一般に黄瀬戸と呼ばれる釉薬を施す近世の製品である。第85図20は、瓦器羽釜の鍔部である。口縁部の立ち上がりは2.4cmを測る。外面には強いナデ、内面には斜め～横方向のハケ目を密に施している。磨滅が著しく、他の部位は検出できなかったが、大型品であると思われる。

第２層は、礫まじりの黄褐色砂質シルト層で、トレンチ全体において確認された。第３－２トレンチとは違い、盛り上げて段や小山を作り出すというよりも、むしろ窪地や落ち込みを埋めるように堆積していた。遺物の出土はなかった。第２層を除去した時点で地山を検出する部位も多く、丘陵の裾野に見られるような入り組んだ凹凸が認められた。

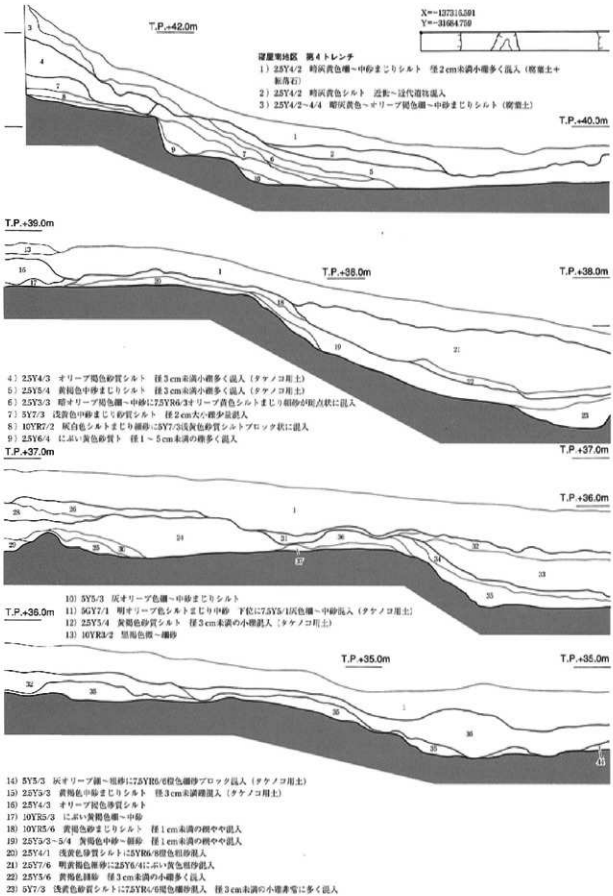
落込みや窪地に堆積した土は、黄褐色細砂～粗砂を主体とする地山に近いものと、湿地化して黒色オリーブ粘土質を呈するものに大別できる。いずれも東南方向へ開く様相を見せる。顕著な遺構および遺物の出土はなかった。

地山は、傾斜面においては固くしまった粗砂まじりシルトであり、それ以外は均質な黄白色粘土もしくは灰白色細～中粒砂であった。

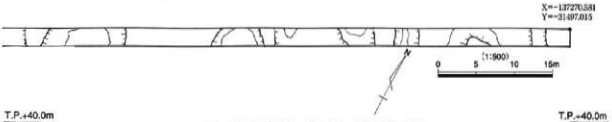
⑦寝屋南地区・第５トレンチ

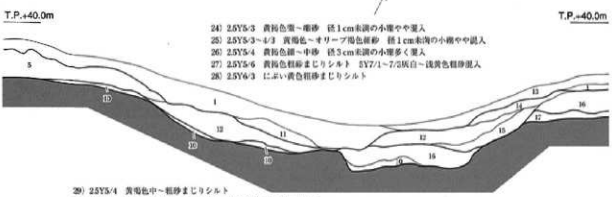
第５トレンチは、第４トレンチ北西側に、ほぼ直角方向の軸をもって設置した幅２ｍ×直線距離20ｍ＝40㎡（実質面積は約45㎡）のトレンチである（第86図）。尾根上から傾斜面を降下して平坦地に着地するまでの地点にあたり、最高傾斜値は40度を測る。地表面は第４トレンチ同様、雑木と竹の繁茂があった。

層序は、腐葉土層である第１層と地山土をブロック上に含む堆積層である第２層に大別できる。北西半部の急傾斜面においては、第１層を５～10cm除去した時点で、灰白色粘土である地山を確認した。南東半部の緩い斜面では、第１層が80cmあまり堆積し、その下に第２層が確認できた。第２層は礫や

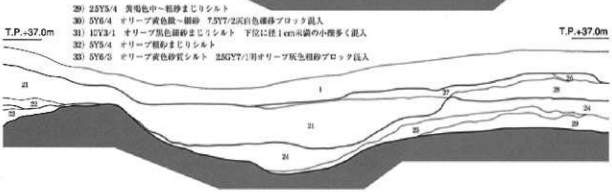


第84図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第４トレンチ平面・断面図

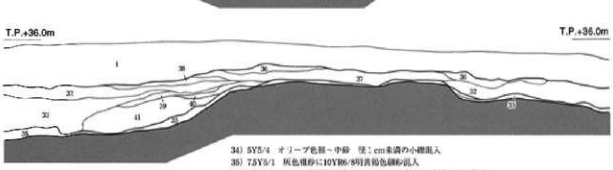




24) 2.5Y5/3　黄褐色粗～細砂　径1cm未満の小礫やや混入
25) 2.5Y5/3～4/3　黄褐色～オリーブ褐色細砂　径1cm未満の小礫やや混入
26) 2.5Y5/4　黄褐色細～中砂　径5cm未満の小礫多く混入
27) 2.5Y5/6　黄褐色粗砂まじりシルト　5Y7/1～7/3灰白～浅黄色細砂混入
28) 2.5Y6/3　にぶい黄色粗砂まじりシルト



29) 2.5Y5/4　黄褐色中～粗砂まじりシルト
30) 5Y6/4　オリーブ黄色細～細砂　7.5Y7/2灰白色礫砂ブロック混入
31) 10Y3/1　オリーブ黒色細砂まじりシルト　下位に径1cm未満の小礫多く混入
32) 5Y5/4　オリーブ褐色まじりシルト
33) 5Y6/3　オリーブ黄色砂質シルト　2.5GY7/1明オリーブ灰色粗砂ブロック混入

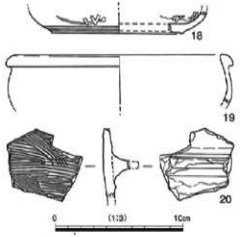


34) 5Y5/4　オリーブ色細～中砂　径1cm未満の小礫混入
35) 7.5Y5/1　灰色礫砂に10YR6/8明黄褐色礫砂混入
36) 10YR5/6～5/8　黄褐色礫砂まじりシルト　径3cm未満の小礫多く
混入（タケノコ層土）
37) 10Y6/1　灰色細砂まじりシルト
38) 7.5Y5/6　明褐色礫砂　径5cm未満の小～中礫非常に多い
39) 10Y6/1～5/1　灰色礫砂まじり砂質シルト

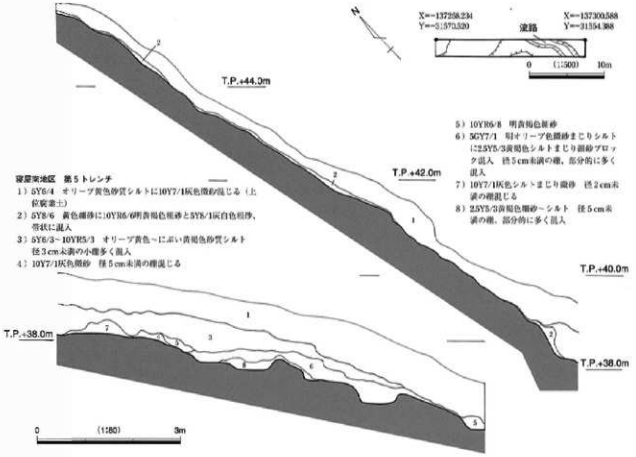
40) 7.5GY7/1　明緑灰色シルトまじり細砂に2.5Y6/3にぶい黄色細砂ブロック混入
41) 7.5YR5/6　明褐色細砂まじりシルト
42) 5GY7/1　明オリーブ灰色粘土（地山）に明褐色細砂まじりシルトブロック混入
43) 5GY7/1　明オリーブ灰色粘土（地山）に明黄褐色シルトブロック混入
44) 5Y7/1　明オリーブ灰色粗砂に7.5YR5/4にぶい褐色細砂ブロック混入
45) 7.5YR5/4　にぶい褐色細砂に2.5GY7/1明オリーブ灰色シルトブロック混入
地山）7.5YR5/6　明褐色粘土

地山である細砂ブロックを多く含んでいることから、崖崩れや地滑りによって上位から崩落した土が堆積した層であると考えられる。厚さは50～60cmを測る。

第2層を除去すると、灰白色粘土を主体とする地山面が現れた。地山面は起伏が激しく、傾斜面は急峻である。斜面下に蛇行する細い流路を確認したが、人為的な遺構ではなかった。いずれの層からも、遺物の出土はなかった。即ち、このトレンチでは他に見られたような近代における整地の跡すらも見られない、いわば人為的な関与が極めて薄い地点であったと判断される。



第85図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区
第4トレンチ出土遺物実測図



第86図　打上・寝屋南遺跡　寝屋南地区　第5トレンチ平面・断面図

打上地区（第87～91図）

打上地区は、寝屋南地区より約800m南西地点に位置する調査対象地である。周知の遺跡である寝屋南遺跡の範囲からは外れるが、東側には広範にわたる太秦遺跡を控えており、遺構・遺物の存在が推測される地区である。この地区には計6本の調査区を設置した。

①打上地区・第1－1トレンチ

第1－1トレンチは、寝屋南地区とは尾根を隔てた、丘陵の裾野に位置する（第87図）。打上地区の東北山地を水源とする打上川の北岸にあたり、近年までは水田として耕作されていた土地である。西・北・東の3方面は竹林と雑木林に囲まれており、南側の河川に向かって開けた景観を呈する。

地表面は北北東から南南西方向へむかって下がり、途中3カ所に段を設け、耕地の平坦化を図っている。

当初、第1トレンチは長さ100m×幅3m＝300m²の規模を予定していたが、北北東端より60m地点に大規模な攪乱が認められたため、これを避けて分割し、70m地点より新たに第1－2トレンチを設置した。また、第1－1トレンチは、整地段に従って上段・中段・下段の3つに分けて遺物の取捨にあたった。

第1－1トレンチの層序は、現代耕作土および床土（第1層）・盛土および整地土（第2層）・近世～近代の洪水砂（第3層）・近世水田耕作土（第4層）・近世以前の洪水砂（第5層）・近世以前の水田耕作土（第6層）・流路埋土（時期不明）に大別できる。

第1層は、褐灰色～灰色シルトを呈する水田耕作土である。直下に黄橙色粘土の床土を伴う。トレンチ全体に10～20cmの厚さで堆積していた。これを除去すると、上段では鋤溝群を、中段ではピット・土坑・溝を検出した。いずれも近世の遺構である。

土坑1　トレンチ北北東端より20m地点に位置する平面方形の土坑である。長さ1.4m×幅1.2m×深さ0.45mを測る。埋土は上位に灰色シルト、中位に炭化物および焦土を含んだシルト、下位に灰白色粗砂があった。上層から寛永通宝が1点出土したが（第87図22）、中層からは炭に混じって焦げた金属塊が出土した。この金属は近代の廃棄物であり、この土坑も同時期の攪乱の可能性が高い。上層から出土した銭貨は、この土坑を埋めた際に、近隣から持ち込んだ土に混入していたものかと解釈される。

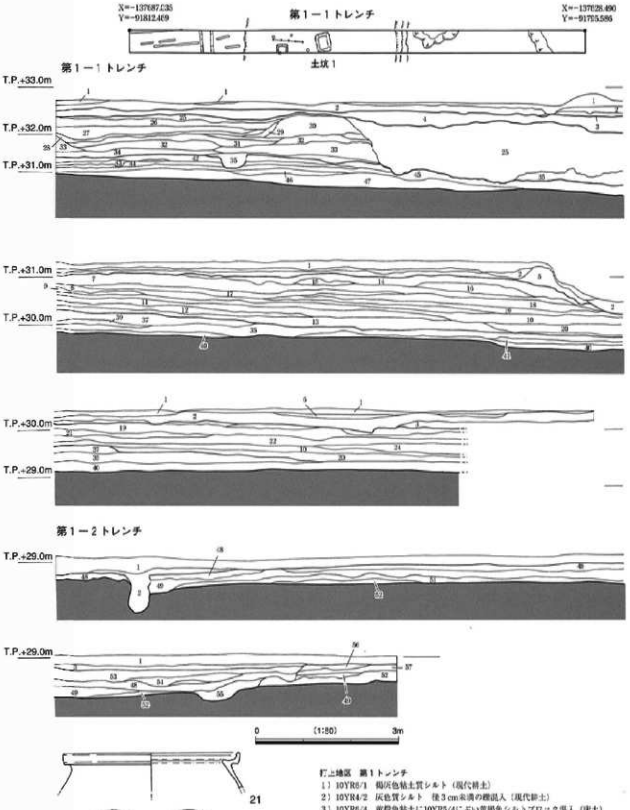
土坑2　土坑1より5m南東地点に位置する平面隅丸方形の土坑である。長さ2.5m×幅1.8m×深さ0.2mを測る。埋土は第2層が主体で、黄灰色シルトに灰色粘土ブロックがまじり、鉄班が多く沈着する。遺構の性格は不明であるが、近世の染付片と陶器土瓶の口縁部が出土した（第87図21）。

柵列　土坑1の東側に位置する。直径20cm程度×深さ5～15cmのピットが直線上に並ぶ。埋土は、灰色砂質シルト（第1層）である。

ピット　トレンチ中段では、柵列の東側に2点（PIT1・PIT2）、西側側溝と壁面に3点（PIT3・PIT9・PIT10）のピットを確認した。すべて直径30～40cm×深さ25cmを測り、平面楕円形を呈する。埋土は灰色シルト（第1層）に鈍い黄色砂質シルトが細かいブロック状に混入する。ピット1・3・9・10では直径10cm前後の柱痕も確認できた。建物として復原はできないが、同時期・同質のピット群である。いずれからも遺物の出土はなかった。

鋤溝群　南北方向とこれに直行する方向軸をもつ耕作痕跡である。遺物の出土はなかった。

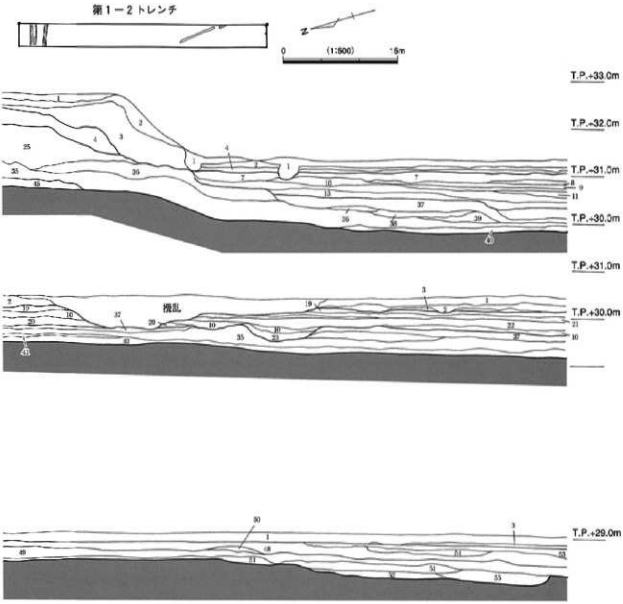
次に、トレンチ上段・中段に盛られた整地土（第2層）を除去したところ、上段において水田畦畔を検



打上地区　第１トレンチ

1）10YR5/1　褐灰色粘土質シルト（現代耕土）
2）10YR4/2　灰色質シルト　径３cm未満の礫混入（現代耕土）
3）10YR5/4　黄褐色粘土に10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック混入（床土）
4）5Y6/1　灰色粗砂に7.5Y5/6明黄褐色礫粒砂混入　小塊わずかに混入
5）10YR6/8　明黄褐色砂質シルト　径２cm未満の円礫少量混入
6）10YR6/8　明黄褐色粗砂～小塊
7）2.5Y6/6　明黄褐色極砂まじりシルト
8）10YR6/6　明黄褐色シルトに細砂ブロック混入
9）10YR6/5　黄褐色シルトに径１cm未満の礫少量混じる
10）10YR6/6　明黄褐色粗砂まじり粘土質シルト（遺雷～近代耕土）

第87図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第１トレンチ平面・断面図、出土遺物実測図

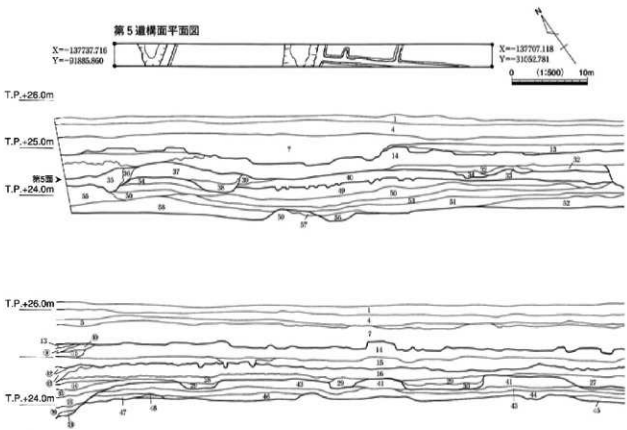


11) 2.5Y6/4　にぶい黄色中砂
12) 10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂まじりシルト
13) 10YR6/3　にぶい黄橙色粗砂まじり珍質シルト
14) 10YR7/6　明黄褐色埋砂　径1cm調小礫混入
15) 2.5Y5/1　黄灰色腐～細砂
16) 2.5Y6/4　にぶい黄色シルトまじり細砂
17) 2.5Y6/3　にぶい黄色粘土
18) 10YR6/6　明黄褐色シルト　下位に埋砂混じる
19) 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト　マンガン粒混じる
20) 2.5Y6/6　細砂まじり粘土　マンガン少量混入
21) 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト
22) 2.5Y7/1　明オリーブ灰色細砂に10YR6/6明黄褐色中砂混入
23) 10YR6/6　明黄褐色埋砂～中砂　ラミナあり
24) 2.5Y6/4　にぶい黄色シルト　径1cm未満の礫少量混じる
25) 2.5Y6/4　にぶい黄色細砂
26) 10Y5/1　灰色砂質シルト　マンガン少量混入
27) 2.5GY5/1　オリーブ灰色細砂まじり砂質シルト
28) 2.5GY6/1　オリーブ灰色中～細砂
29) 2.5Y6/4　にぶい黄色埋砂～細砂　下半部に径1～5cm大礫多く混入（洪水砂）
30) 2.5Y5/1　灰～灰オリーブ色シルト　しまり良い（造鉄水田畦）
31) 10Y5/1　灰色細砂～埋砂
32) 2.5Y5/4　黄褐色細砂　径3cm大礫多く混入
33) 2.5Y5/1　灰～灰オリーブ色シルトに細砂ブロック少量混じる
34) 7.5Y4/1　灰色細砂～微砂
35) 10Y5/1　灰色細～中砂
36) 2.5Y6/4　にぶい黄色埋砂まじり粘土質シルト
37) 10Y7/2　灰白色細砂
38) 2.5Y6/6　明黄褐色細砂まじりシルト～細砂
39) 2.5Y6/6　明黄褐色粘土質シルト
40) 10YR7/3　浅黄色シルトに粘土ブロック混じる
41) 10YR6/3　にぶい浅黄色シルト～細砂
42) 5Y6/2　灰オリーブ色腐～細砂
43) 5Y5/2　灰オリーブ色細～埋砂
44) 5Y5/2　灰オリーブ色粗砂～細
45) 10Y7/2　灰白色細砂
46) 7.5Y6/1　灰色～灰オリーブ色細砂
47) 10YR6/8～5/8　黄褐色粘土（ほぼ均質）
48) 10YR6/4　黄橙色粘土質シルト
49) 7.5YR4/3～4/4　褐色埋砂（鉄分染出し着色）に5Y4/3暗オリーブ中砂混入（流路埋土）
50) 5Y5/2　灰オリーブ色微砂まじり細砂
51) 2.5Y5/3～4/3　オリーブ褐色微砂～細砂
52) 5GY6/1　オリーブ灰色微砂
53) 10Y3/1　オリーブ黄色粗砂まじり細砂礫少量混入
54) 7.5GY7/1　微砂まじりシルト
55) 10Y5/1　灰色細～中粒砂　径1cm未満小礫多く混入（流路下層）
56) 2.5GY6/1　オリーブ灰色細砂まじりシルト
57) 10Y5/1　灰色細～中粒砂　径1cm未満小礫多く混入

出した。この畦畔は、トレンチを横切る大畦と小畦で方形に水田を区画するもので、径２cm未満の小礫を含む粗砂（第３層）に被われていた。遺物の出土はなかったが、堆積層の上下関係から近世の水田であると思われる。

この近世水田耕作土（第４層）を除去すると、トレンチ全域にわたって砂質シルト層（第５層）が現れた。第５層は洪水によってもたらされた土砂と、これを攪拌して土壌化したシルト層から成る。この層はほぼ１mの厚さでトレンチを覆っており、近世を通じて耕作され、徐々に堆積したものと思われる。遺物の出土はなかった。

第５層を除去したところ、中～下段においては地山土と目される浅黄色粘土を確認したが、上段ではさらに粗砂が下方へ滑り込んでおり、旧流路の存在が予測された。しかし、この時点で掘削限界深度を越えたため、上段ではこの面以下の調査は行わなかった。



打上地区　第２トレンチ

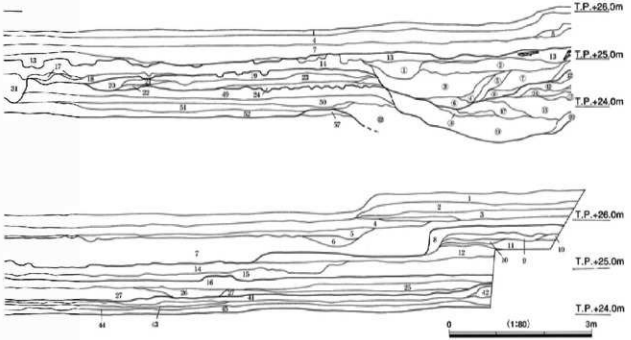
1）5Y4/1　灰色粘土質シルト　径２cm未満の礫少量混じる（現代耕土）
2）2.5Y5/2　暗灰黄色粘土質シルト（現代耕土）
3）2.5Y4/1　黄灰色粘土質シルト
4）10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　径１cm未満の礫少量まじる　鉄斑沈着　上位ににぶい黄橙色褐砂薄く堆積
5）10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　微砂粘状にまじる
6）10YR5/2　にぶい黄褐色粘土質シルト　マンガン粒少量まじる
7）5Y7/3　浅黄色細砂～中粒砂　鉄分波状に沈着（近代洪水砂）
8）5Y7/3　浅黄色細砂～中粒砂に10YR4/6褐色粗砂まじり、水平ラミナを形成
9）10Y5/1　灰色砂質シルト
10）7.5Y7/1　灰白色粗砂
11）7.5Y5/1　灰色細砂　水平方向のラミナを形成
12）7.5Y3/1　オリーブ黒色粗砂まじり粘土～粘土質シルト
13）5Y6/2　灰オリーブ色細砂～中砂　木片流入
14）5Y5/2　灰オリーブ色粘土質シルト
15）10GY5/1　緑灰色粗砂まじり粘土　炭化物堆片多くまじる
16）5B6/1　青灰色粘土　ほぼ均質　部分的に炭化物まじる（中世水田）
17）7.5GY5/1　オリーブ灰色微砂～細砂
18）5Y5/2　灰オリーブ色細砂
19）10Y4/2　オリーブ灰色粗砂まじり粘土　上辺に鉄分沈着
20）5Y4/2　灰オリーブ色細砂まじり粘土
21）7.5GY6/1　緑灰色細砂
22）7.5GY6/2　緑灰色細砂まじり粘土
23）5GY5/1　オリーブ灰色砂質シルト　径１cm未満の礫多くまじる
24）7.5GY6/1　緑灰色粘土と微砂の互層
25）5B6/1　青灰色細砂まじり粘土（中世水田）
26）7.5GY4/1　暗緑灰色粘土　径１cm未満の礫多くまじる
27）7.5Y8/2　灰白色微砂
28）7.5Y5/2　灰オリーブ色細砂まじり粘土シルト
29）5Y6/3　オリーブ黄色粗砂　上位に径１cm未満の礫はいる
30）7.5Y7/1　灰白色細砂
31）7.5Y5/2　灰オリーブ細砂まじりシルト　径１cm未満の礫多くまじる　しまり悪い
32）5Y4/2　灰オリーブ色粗砂まじり粘土
33）2.5Y5/3　黄褐色粗砂まじり粘土
34）2.5Y7/3　浅黄色粗砂
35）7.5Y6/1　灰色細砂　マーブル状のラミナあり
36）5Y5/2　灰オリーブ色細砂まじり粘土
37）5GY6/1　オリーブ灰色粗砂まじり粘土

第88図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第２トレンチ平面・断面図

②打上地区・第１－２トレンチ

第１－１トレンチの南東延長線上に設けた長さ32m×幅３mのトレンチである（第87図下段）。現代耕土である第１層を除去したところ、地山である粘土層がトレンチ両端で確認された。この面ではトレンチ北西端で近現代の暗渠と動溝を検出した（第１面）。さらに精査を進めたところ、地山上面において流路跡を検出した（第２面）。

暗渠　トレンチの北西端より２mの地点において検出した。東方向から、トレンチを横切って西へと進む。幅40cm×深さ80cmの溝に直径８cmの竹管と小枝を堆設し、この上を粘土質シルトで埋めたもので、近現代の遺構と思われる。



38）10Y3/1　黒褐色礫砂　径５cm未満の礫少量まじる
39）2.5Y5/2　暗灰黄色礫砂
40）7.5Y6/2　灰オリーブ色粘土質シルト　礫砂水平方向のラミナを形成
41）10Y5/1　灰色礫砂まじり粘土（水田耕盤）
42）7.5Y5/2　灰オリーブ色礫砂　径１cm未満の礫多くまじる
43）7.5GY5/1　緑灰色粘土　ほぼ均質
44）7.5Y5/2　灰オリーブ色礫砂まじりシルト　径３cm未満の礫多くまじる
45）10Y5/1灰色粘土　ほぼ均質　上部に炭化物細片まじる
46）7.5Y7/1灰白色礫砂　礫砂水平方向のラミナを形成
47）5Y5/3　灰オリーブ色礫砂　径３cm未満の礫非常に多くまじる
48）2.5Y2/1　黒褐色粘土質シルト　炭化物多くまじる
49）7.5Y5/2　灰オリーブ色礫砂まじり粘土質シルト　上面からの踏み込みあり（中世水田）
50）5Y3/2　灰オリーブ色礫砂まじりシルト
51）5Y4/2　灰オリーブ色粘土　有機物少量まじる
52）5Y4/2　灰オリーブ色礫砂　有機物少量まじる
53）2.5Y5/2　暗灰黄色中砂まじり粘土質シルト
54）7.5Y3/1　オリーブ黒色礫砂
55）2.5Y5/2　暗灰黄色礫砂まじり粘土　径１cm未満の礫少量まじる
56）10Y5/1　灰色礫砂　水平方向のラミナを形成
57）10Y5/1　灰色礫砂　径１cm未満の礫少量まじる
58）10Y5/1　灰色礫砂～中砂　水平方向のラミナを形成
59）10Y3/1　黒褐色粘土　有機物多くまじる

流路埋土
①　5Y5/1　灰色礫砂
②　2.5GY6/1　灰オリーブ色礫砂まじりシルト
③　5Y7/2　灰白色中～礫砂　斜め方向のラミナを形成
④　10Y4/1　灰色砂質シルト
⑤　2.5GY6/1　黄灰色中砂～礫砂　上位に鉄分沈着
⑥　7.5Y5/1　灰色礫砂　上位に褐色粘土ブロック10%まじる
⑦　10Y6/1　灰色細砂～礫砂　斜め方向のラミナを形成
⑧　10Y6/1　灰色細砂～礫砂　径cm１未満の礫少量まじる
⑨　2.5Y5/3　暗灰黄色中砂～静質シルト　斜め方向のラミナを形成
⑩　7.5Y5/2　灰オリーブ色粘土質シルト
⑪　5Y5/2　灰オリーブ色シルト
⑫　5Y4/2　灰オリーブ色礫砂
⑬　2.5Y5/3　黄褐色粗砂　上位に鉄分沈着
⑭　2.5GY5/1　オリーブ灰色礫砂まじりシルト　径１cm未満の礫少量まじる　水平方向のラミナを形成
⑮　5Y5/3　黄褐色粗砂に7.5Y5/1灰色粘土ブロック50%まじる　径５cm未満の礫少量まじる　上位に鉄分沈着
⑯　2.5Y7/3　浅黄色礫砂に5Y5/2灰色細砂まじり斜め方向のラミナを形成　上位に鉄分沈着
⑰　5GY5/1　オリーブ灰色礫砂まじりシルト
⑱　5Y5/3　灰オリーブ色粗砂　斜め方向のラミナを形成
⑲　5Y7/4　浅黄色粗砂　径５cm未満の礫多量にまじる　斜め方向のラミナを形成
⑳　7.5Y5/1　灰色粘土

流路　トレンチの南東端を岸として、最大幅26m×最大深0.8mを測る。西から南東方向へと流れ、調査区外へと続くが、地形に沿って打上川へ注いでいたものと思われる。堆土は細砂～微砂で、部分的に地山粘土を深く抉る。遺物の出土がなかったため明確な時期は不明であるが、地山直上に位置することや堆土の状況から、歴史時代以前に遡る可能性がある。

③打上地区・第2トレンチ

第1トレンチの南西方向、打上川を隔てた地点に設置した長さ50m×幅3mのトレンチである（第88図）。ごく近年まで水田耕作が行われていた区画にあたる。地形は、打上川の流れと同じく、南東から北西にむかって緩やかに傾斜するため、段を設けて耕作地の平坦化を図っている。南西には標高50mを測る太秦山と称される丘陵地が控えるが、この影響はあまりうけておらず、古くは打上川の流域もしくは氾濫原であったと思われる地点にあたる。

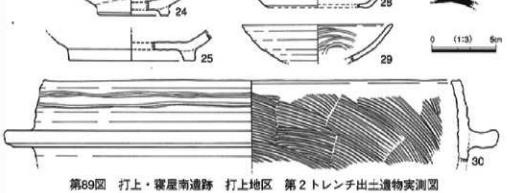
層序は、現代耕土および床土（第1層）・近代水田耕土および洪水砂（第2層）・近世水田耕土および洪水砂（第3層）・中世水田耕土および洪水砂（第4層・第5層）に大別できる。

第1層は、黒褐色～暗灰黄褐色粘土質シルトである。現代の水田耕作土であり、原地表面に見られる段は、この層によって形成されたものである。

第2層は、近代の洪水砂とこれに覆われた耕作土である。洪水砂は灰白色中～浅黄色粗砂で、トレンチ全体にわたり、20～40cmの厚さで堆積する。随所にラミナや鉄分の染出痕が見られた。耕作土は、灰オリーブ色粘土質シルトで、上面には、区画に則した畝痕が残存する。以上のことから、この耕作面では結土質耕土においても栽培可能な商品作物（例えばムギ等）が畝上に栽培されていたが、大規模な洪水で埋没したものと推測される。

第3層は、近世の洪水砂とこれに覆われた水田耕作土層である。水田面では、耕作に伴う小畦畔とヒト・ウシの足跡を多く検出した。畦畔は北東－南西方向に軸をとるものが多いが、明確な規則性は確認できなかった。また、トレンチ中央において、洪水によって削られたと思われる流路跡を検出した。ここから染付片・陶器片が出土したことから（第89図23～25）、一連の堆積が近世のものであることを確認した。

23・24は、灰オリーブ色の釉を塗布する施釉陶器である。23は、皿であり、口径10.2cmを測る。24は碗であるが、底部外面に煤が付着しており二次利用の痕跡を残す。口径は11.2cm、高さは4.0cm、高台径は5.8cmを測る。底部内面には釉塊が付着するため凹凸を有する。25は、染付鉢の底部であり、



第89図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第2トレンチ出土遺物実測図

内面に釉剥を残す。

第4層は、トレンチ中央流路よりも南東側においてのみ確認した中世遺物を包含する洪水砂と、これに覆われた水田耕作土層である。洪水砂には径3cm未満の礫が多く混じり、激しい出水があったことを示す。水田耕土上面には若干の凹凸を認め得たが、畦畔の検出にまでは至らなかった。

洪水砂の除去を進めたところ、土師器羽釜片が1点出土した（第89図30）。口縁から鍔にかけての部位が残存しており、口径33.8cm、鍔外径39.5cm、口縁の立ち上がりは4cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部はなでて平面をつくる。口縁の外面には、2条1対の沈線が2箇所にめぐらされている。体部の調整は外面が強いナデ、内面が斜め方向のハケメである。胎土は密、焼成は堅緻であり、残存状態も良い。洪水の際に運び込まれたものと推測されるが、遺存状況を見る限り、近隣地において廃棄されたものと思われる。

第5層は、第4層の直下に堆積する洪水砂とこれに覆われた水田耕作土であるが、第4層同様、中世の包含層であると考えられる。耕作土上面では、北東－南西方向に築かれた大畦と北西－南東方向へのびる小畦・落ち込みを検出した。耕作土は黒褐色粘土であり、植物遺体や炭化物を多く含有する。洪水砂は、灰色微～中粒砂から成り、古代～中世の遺物が出土した（第89図26～29・31）。

26は、土師器皿である。口径7.0cm、高さ1.2cm、底部中央にわずかであるが突出を持つ。口縁部内面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。27は、口径8.0cmを測る瓦器皿であるが、磨滅が進んでいぶしは消滅し、内面に複方向のミガキを僅かに残すのみである。

28は土師器皿である。口径は10.6cm、高さは1.8cmを測る。底部から口縁へかけて立ち上がり、口縁端部はナデによってやや内曲させて立ち上がる。内面に煤の付着が認められる。29は瓦器碗であり、口径は12.2cmを測る。口径に比べて器高が低い器形を持つ、和泉型の製品である。口縁端部には段・沈線は見られず、やや外半させて端面を丸く仕上げている。外面はナデ、内面には連結輪状のまばらな暗文を施す。

31は須恵器坏蓋の一部である。焼成は甘く、断面は赤褐色を呈する。ケズリが施された外面に「－」の線刻が認められた。焼成前に描かれたものであるが、記号か文字かは小片であるため不明である。これらの遺物の生産時期は、31を除き14世紀に求められる。

第5層を除去すると、部分的に炭化物を含んだ黒褐色粘土を伴う濃灰色粘土を主体とした耕作土が確認されたが、この段階で掘削深度が限界に達したため、調査を終了することとした。

以上、第2トレンチでは耕作土層と洪水砂の重なりを確認し、中世に遡る水田遺構面を検出することができた。しかし、第5層より須恵器片が出土したことから、以下に古代にまで遡る包含層が存在することも可能性として指摘できる。

④打上地区・第3トレンチ

第2トレンチより南西方向へ180m程度離れた地点に設置した、長さ40m×幅2m＝80m²のトレンチである（第90図）。当初、第1トレンチの延長上に設置する予定であったが、近辺に産業廃棄物が山積しており、現位置へと変更した。

地形は太秦山（標高50m）につらなる、なだらかな丘陵斜面上にあたる。地表面は、竹林に覆われており、雑木の生成はわずかである。

層序は、盛土整地層である第1層と近世～近代の包含層である第2層に分けられる。

第1層は径3cm未満の小礫を多く含む明黄褐色砂質シルトで、タケノコ栽培用盛土と認識している

ものである。地表面には腐葉土がほとんど見られなかったことから、近年までタケノコ栽培が行われていたものと思われる。

第2層は、にぶい黄褐色シルトを主体とした近世～近代の包含層である。染付片と瓦（平瓦・丸瓦）が出土したが、このうち平瓦は土師質であった。この第2層を除去すると、地山である橙色粗砂まじり粘土質シルトが確認された。地山面に顕著な遺構は見られず、遺物の出土もなかった。

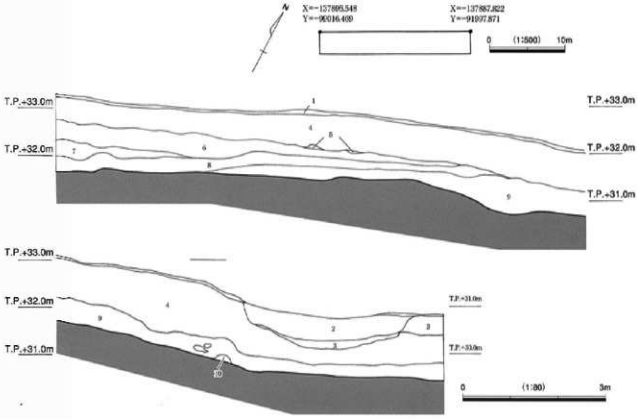
⑤打上地区・第4－1トレンチ

第2トレンチより南西方向へ100mの地点に設定した長さ60m×幅3m＝180mのトレンチである（第91図上段）。第2トレンチとは、市道を隔てた丘陵縁辺にあたり、第3トレンチとは同一の尾根上に位置する。南側に山積する産業廃棄物と北側の急峻な崖を避けた斜面上に設置した。

層序は盛土である第1層のみで、これを除去したところ地山である橙色粗砂まじり粘土質シルトが確認された。一部、窪地を地山である粘土ブロックで整形した痕跡が見られるが、これ以外に顕著な遺構は確認できなかった。第1層より染付片（現代）が出土した。

⑥打上地区・第4－2トレンチ

第4－1トレンチの北側崖下に設置した、一辺3m四方形＝9m²のトレンチである。丘陵北側の終焉と上層の堆積状況を確認するために設置した。昨年まで水田耕作が行われていた区画にあたり、地表



打上地区　第3トレンチ
1）10YR4/2　灰黄褐色シルト　径3cm未満の礫少量含む（腐葉土）
2）10YR5/3　にぶい黄褐色シルト 径3cm未満の礫少量含む（近代整地土）
3）10YR6/1　褐灰色砂質シルト
4）10YR5/6　明黄褐色シルト　径3cm未満の礫少量含む（近代整地土）
5）10YR2/4　にぶい黄橙色粘土質シルト
6）10YR5/6　黄褐色シルト　径3cm未満の礫少量含む（近代整地土）
7）10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト
8）10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　二次に多量の鉄分沈着
9）7.5Y6/8　橙色粗砂まじりシルト

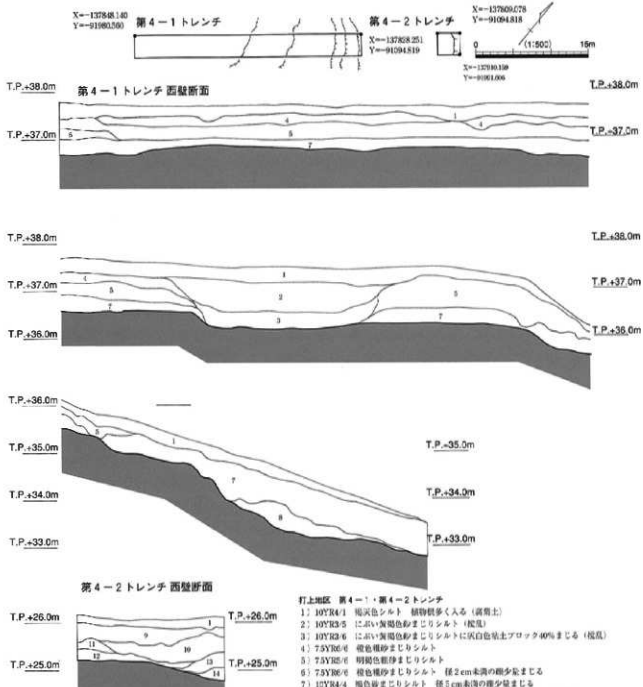
第90図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第3トレンチ平面・断面図

面には石組みの用水路が設けられていた。

層序は、現代耕土の第1層・近代の耕土である第2層・砂を体とする第3層に分けられる。

第3層は灰色粗砂に徴砂が筋状に入り込む形状であり、北に位置する打上川の氾濫による痕跡と見られる。時期的には第2トレンチで確認された近代の洪水層に対応するものと思われる。

第3層を除去すると、灰色粘土を主体とする地山面が確認された。この面は、北側へ向けて大きく下降しており、このまま打上川左岸の河岸堆積へと連続するものと思われる。



打上地区　第4－1・第4－2トレンチ
1）10YR4/1　暗灰色シルト　植物根多く入る（表土）
2）10YR3/5　にぶい黄褐色砂まじりシルト（撹乱）
3）10YR3/6　にぶい黄褐色砂まじりシルトに灰白色粘土ブロック40%まじる（撹乱）
4）7.5YR5/6　橙色機砂まじりシルト
5）7.5YR5/6　明褐色粗砂まじりシルト
6）7.5YR6/6　橙色機砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量まじる
7）10YR4/4　褐色砂まじりシルト　径5cm未満の礫少量まじる
8）10YR3/2　灰色粗砂まじりシルトに7.5YR3/6明褐色粗砂ブロック20%まじる
9）10YR6/1　灰色粗砂～礫層に7.5YR5/6明褐色細砂まじりシルトブロック30%まじる（自然堤）
10）2.5GY5/1～6/1　オリーブ灰色中砂～細砂　部分的に水平ラミナを形成
11）2.5GY7/1　薄オリーブ灰～細砂
12）5Y7/1～7/2　灰白色粗砂に明黄褐色砂質シルトブロック30%混じる
13）5Y4/2　灰オリーブ色シルトに2.5Y6/6明黄褐色細砂ブロック10%混じる
14）5Y4/1　灰色粗砂　徴砂筋状に混入

第91図　打上・寝屋南遺跡　打上地区　第4トレンチ平面・断面図

6．まとめ

以上、各トレンチの調査成果を述べた。今回の調査では、予想された旧石器～縄文時代に遡る遺物の出土は認められなかったが、旧地形の推定復原に加えて古墳時代～中世の包含層を確認するなど、一定の成果をあげることができた。以下、若干の考察を交えながら、調査結果のまとめとする。

①寝屋南地区・第1トレンチ付近には、南方向に開口する谷が存在し、その縁辺は第2－2トレンチ中央付近にまで及ぶ。この谷は徐々に埋没し、近世以降、耕作地として利用された。

②寝屋南地区・第2－1トレンチ、第3－1トレンチ付近では、近代以前に遡る遺構および包含層は確認できなかった。地山近似層よりサヌカイト剥片が出土したことから、石器の散布地であることは再認識できたが、出土量も微量であり、周辺に遺構が残存する可能性は低い。

③寝屋南地区・第3－2トレンチでは、近代整地層の直下に中世の包含層を確認した。また、寝屋南地区・第4トレンチでは、北西端斜面下の表土より中世に属する遺物が出土した。しかし、第4トレンチの西南部および第5トレンチにおいては、遺物の出土が皆無であった。これらのことから、中世の包含層は、第3トレンチと第4トレンチを隔てる尾根筋の傾斜面直下周辺にのみ存在するものと思われる。

④寝屋南地区・第3－2トレンチからは、6世紀に作成されたと見られる須恵器と埴輪片を含むシルト層が確認された。この層には炭化物が混じり、部分的に褐色化した焼土が見られた。また、須恵器には溶着したものが含まれていた。これらのことから、この付近に須恵器や埴輪を焼成する窯が存在していた可能性がある。

⑤打上地区・第1－1トレンチおよび第1－2トレンチ付近には、トレンチを斜めに横断する方向軸（北東から南西方向へ走る）を持つ旧流路が存在した。時期は不明であるが、この流路は打上川の支流のひとつと思われる。周辺の旧地形を考証する際の一資料として提示できる成果である。

⑥打上地区・第2トレンチ付近は、打上川の氾濫原にあたり、少なくとも中世以降はこの湿地堆積を利用して水田耕作が行われていた。この水田は条里方向を意識しておらず、地形に則した地割を行って営まれていたと考えられる。尚、出土遺物から、中世以前の包含層が存在する可能性が高い。

⑦打上地区・第3トレンチ・第4－1トレンチ設置地点では、包含層および遺構面の確認はできなかった。古墳群に近接するものの、遺構が存在する可能性は希薄である。

⑧打上地区・第4－2トレンチ設置地点では、打上川の氾濫堆積が確認できた。このことから、第2トレンチを含む中世包含層の分布範囲は、この地点にまで及ぶものとみられる。　（黒須）